

スチューデントファーム「近江楽座」  
まち・むら・くらしふれあい 工舎  
2008年活動報告書

滋賀県立大学

<http://ohmirakuza.net/>

ohmirakuza 2008

## “スチューデントファーム「近江楽座」”

### 学生力が地域を変える！

一年の活動を終えた近江楽座成果発表会では、地域関係者に参加いただきコメントをいただいたり、メッセージをお願いしています。一例を紹介すると、

「NPO法人とよさとまちづくり委員会と快蔵プロジェクトが出会い、豊郷町に住んで下さった学生は、この5年間で14名、空き民家や空き蔵の改修は8物件となりました。…西山邸の近所の人たちは学生が住んでくれることを喜んで見守っています。磯部邸で畑に芽が出ているのを知らず、畑をぐちゃぐちゃにして、おばあちゃんに怒られたり、いろんなことをして地域の人に注意を受けたりしたけど、みんなが運営しているBar タルタルーガで出会うと、地域の人も笑顔で、人のつながりが深まりました。…」(同委員会Sさん)

これは、とよさと快蔵プロジェクトに対して、地域のパートナーであるまちづくり委員会の方からのメッセージです。学生が継続して地域に関わることで、地域が変わっていくということが具体的にイメージできます。もちろん、学生たちも地域の方たちによって大きく育てられています。

近江楽座は地域と関わることを特色としていますが、これまでそういうことが未経験の学生は、最初、どのように地域に入っていけばいいのか、地域とどう関わり、関係をどう築いていけばいいのか、みんな悩みます。一方で、地域の方たちとの人間的な出会いもあります。一言では語れない様々な出来事や出会いが確実に学生たちの成長の糧になっていきます。さらに、地域との間合いの取り方も難しい問題です。地域の自立と学生の主体性をどう確保しバランスをとっていくか。答えはひとつではなく、近江楽座の実践の中でいくつもの形が生み出されてきています。

昨年12月に、これまでの活動成果をまとめた『近江楽座のススメ 学生力で地域が変わる／4年間の軌跡』が発刊されました。その中には、地域活動を通して、悩み、考え、成長していく学生たち姿が描かれていますので、また参考にさせていただけたらと思います。

さて、滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎”は、平成16年度に文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に採択され、平成19年度からは大学独自の予算を用いて継続して取り組み、20年度で5年目を迎えました。

平成20年度の活動は、学生主体の地域活動を行うAプロジェクトが20件、自治体や企業等から提示された課題について、近江楽座として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトチームを募集し、自治体等と協働で取り組むBプロジェクトが3件、合計23のプロジェクトが展開し、テーマや地域との関わりも非常にバラエティに富むものとなり、内容の充実が見られました。2年目となるBプロジェクトも、まだまだ試行錯誤の段階ですが、クライアントから高い評価を受けました。

プロジェクトに取り組んだ学生たちのがんばりや指導教員等の指導・フォローアップ、そして地域の方々のおたたかい見守りやご指導に感謝致します。

持続するということがどれだけ大変なことか、これからもみんなで近江楽座を盛り立てていってほしいと願います。

平成21年6月  
近江楽座専門委員会 委員長  
印南比呂志(人間文化学部生活デザイン学科)

# 目次

1 近江楽座概要	1
1-1 近江楽座について	7
1-1-1 近江楽座とは	7
1-1-2 AプロジェクトとBプロジェクト	8
1-2 プロジェクトの採択について	9
1-2-1 応募件数及び採択件数	9
1-2-2 プロジェクト募集	9
1-2-3 プロジェクト審査	10
2 活動報告	11
2-1 プロジェクトの活動報告	13
2-1-1 プロジェクト一覧	13
2-1-2 各プロジェクトの活動報告	14
●健康・暮らし●	
1. 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト / ボランティアサークル Harmony	15
2. 稲枝 Cotton Project / Cotton Project	19
3. Oumi Food Project / Oumi Food Project	23
4. 市民および医療に携わる人々とのふれあいを通して志向する未来看護塾 / 未来看護塾	27
5. Living Design 12th FASHION SHOW / Living Design 12th	31
●環境●	
6. 犬上川竹林プロジェクト / エコキャンパスプロジェクト	35
7. エコキャンパスプロジェクト木楽部会 / エコキャンパスプロジェクト木楽部会	39
8. ソーラーペロタクシー / ソーラーハンター	43
9. 菜の花エネルギー / 菜の花エネルギー	47
10. 「もったいない帳」を用いたスローライフプロジェクト / もったいないプロジェクト	51
11. Let's 複合 / 廃棄物バスターズ	55
●景観・再生●	
12. いかして民家? / 古民家楽座	59
13. 近江中山道百彩プロジェクト / 百彩	63
14. 限界集落の村おこし / 男鬼楽座	67
15. とよさと快蔵プロジェクト / とよさと快蔵プロジェクト	71
16. 湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動- 空き民家の調査・活用と都市農村交流事業の企画・実施 / 木之本楽座 ※	75
17. 湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動- 古民家での田舎暮らし体験プログラムの企画 実施 / 長兵楽座 ※	79
●地域づくり●	
18. 信・楽・人-field gallery project- / 信・楽・人-field gallery project-	83
19. Taga-Town-Project / Taga-Town-Project	87
20. 発信基地 in 朽木の森 / くつきチーム	91

21. 彦根人力舎—彦根地場産業発信計画— / リキシャ	95
22. 八日市屋台プロジェクト（プロジェクトYY） / わいわい楽座	99
23. 高島市における若者が輝くまちづくり調査活動— 高島における若者の生活スタイルに関する調査および発信活動 / Area+Design ※	103

※印はBプロジェクト

2-2 全体の活動報告	107
2-2-1 中間発表会	107
2-2-2 成果発表会	109
2-2-3 地域活動スキルアップ講座の開催	111
2-2-4 情報の発信	112
2-3 学生委員会の活動	113
2-4 メディア掲載状況一覧	114
3 課題と今後の展望	119
3-1 ふりかえりシートにみる近江楽座	121
3-2 近江楽座専門委員会からのメッセージ	126
4 近江楽座なヒトたち	131
5 付録	137

# 1

## 近江楽座概要



## 1-1 近江楽座について

### 1-1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」ーまち・むら・くらしふれあい工舎”は、2004年度の文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）に採択された教育プログラムです。

本学は、開学以来、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」を理念に滋賀という地域との関わりを重視しており、地域を対象とする演習、フィールドワーク、研究活動等が活発に行われてきました。

こうした実績を土台にしなが、ら、「近江楽座」では、学生が主体となって地域活性化に貢献する活動を行うプロジェクトを学内公募し、選定するとともに、選ばれたプロジェクトに対しては、活動費の助成、専門家のアドバイスなど様々な支援が受けられる仕組みになっています。

#### ■ 活動助成システム

“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定したプロジェクトの事業計画に基づいて、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

#### ■ コンサルティングシステム

教員の指導、助言に加えて、行政や専門家の紹介など、学生の地域貢献プロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

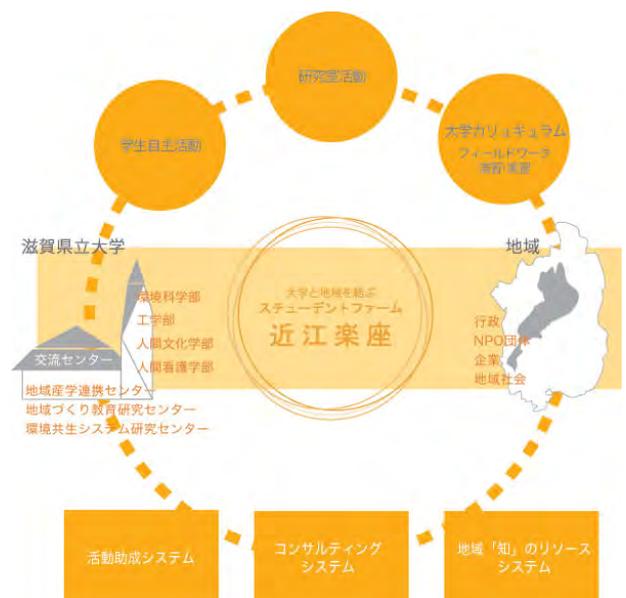
#### ■ 地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係る情報を他大学、研究機関、行政、NPO団体などと共有化し、活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

学生が地域へ出て行って活動することで、社会の仕組みに対する正しい理解、地域に根ざした問題発見の能力、課題解決への行動力、合意形成をはじめとする人とのコミュニケーション能力などを向上させる教育面での効果があります。

また、大学の持つ知的資源や学生のパワーを生かしなが、ら、大学と地域の連携を深めることで、地域活性化に貢献する大学としての役割も果たしています。

現代 GP としての取組を終えた、翌 2007 年度からは、大学独自の取組としてより一層パワーアップした活動が展開できるよう充実を図っています。また、同年度より、「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を行う従来の取組を継承した「A プロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成して活動する「B プロジェクト」の取組が始まっています。



## 1-1-2 Aプロジェクトと Bプロジェクト

### ▼Aプロジェクトとは

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を支援するものです。平成 19 年度より、昨年度までの継続活動を対象とした「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした「新規プロジェクト」という二つの区分を設けて募集し、公開プレゼンテーション及び審査を経て、採択されたプロジェクトです。

### ▼Bプロジェクトとは

自治体や企業等から提示された課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトチームより企画提案を求めます（プロポーザル方式）。今年の課題は『湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動』『高島市における若者が輝くまちづくり調査活動』です。



## 1-2 プロジェクトの採択について

### 1-2-1 応募件数及び採択件数

#### ■ 応募件数

##### ▼Aプロジェクト

22 チーム

(うち、昨年度より継続：15 件、新規：5 件、復活 2 件)

##### ▼Bプロジェクト

3 チーム

- ・湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動：2 件
- ・高島市における若者が輝くまちづくり調査活動：1 件

#### ■ 採択件数

##### ▼Aプロジェクト

20 チーム

(うち、昨年度より継続：15 件、新規 5 件)

##### ▼Bプロジェクト

3 チーム

- ・湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動：2 件
- ・高島市における若者が輝くまちづくり調査活動：1 件

### 1-2-2 プロジェクト募集

#### ■ プロジェクト募集期間

##### ▼Aプロジェクト

・日時：平成 20 年 4 月 10 日（木）～5 月 12 日（月）

##### ▼Bプロジェクト

・日時：平成 20 年 6 月 10 日（火）～6 月 23 日（月）

#### ■ 募集説明会

##### ▼Bプロジェクト

- ・日時：平成 20 年 6 月 17 日（火）
- ・場所：滋賀県立大学 交流センター 研修室 4

## 1-2-3 プロジェクト審査



### ■ プロジェクト審査

#### ▼A プロジェクト（公開プレゼンテーション及び審査会）

- ・日時：平成 20 年 5 月 24 日（土）
- ・場所：滋賀県立大学 交流センター研修室
- ・内容：プレゼンテーション（パワーポイントによるプロジェクト説明）及び質疑応答、審査（非公開）

#### ・選定委員：

滋賀県立大学理事（教育担当） 土屋正春

滋賀県立大学人間文化学部教授（近江楽座専門委員会委員長）

濱崎一志

滋賀県立大学人間文化学部准教授（近江環人地域再生学座担当）

森川稔

マキノまちづくりネットワークセンター（近江環人 2 期生） 藤原久代

犬上川を豊かにする会（滋賀県立大学 OB） 佐々木和之



#### ▼B プロジェクト（プレゼンテーション及び審査会）

- ・日時：平成 20 年 6 月 26 日（木）
- ・場所：滋賀県立大学 交流センター 研修室 1
- ・内容：プレゼンテーション（面接形式）及び質疑応答、審査（非公開）

#### ・選定委員：

滋賀県立大学理事（地域貢献・渉外担当） 田邊俊夫

滋賀県総務部自治振興課 清水安治

高島市企画部政策調整課 志村道代

滋賀県立大学人間文化学部教授 黒田末壽

滋賀県立大学人間文化学部准教授 森川稔

滋賀県立大学地域づくり教育研究センター 奥野修



### ■ 採択および採択通知

#### ▼A プロジェクト

- ・日時：平成 20 年 5 月 28 日（水）
- ・内容：近江楽座ホームページ及び学生ホール掲示板にて通知

#### ▼B プロジェクト

- ・日時：平成 20 年 6 月 30 日（月）
- ・内容：近江楽座ホームページ及び学生ホール掲示板にて通知



### ■ プロジェクト説明会

#### ▼A プロジェクト

- ・日時：平成 20 年 6 月 5 日（木）
- ・場所：滋賀県立大学研修室 1
- ・内容：採択プロジェクト代表者に、事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会

2

活動報告



## 2-1 プロジェクトの活動報告

平成20年度は、Aプロジェクト20チーム、Bプロジェクト3チームの合計23チームが活動しました。

### 2-1-1 プロジェクト一覧

#### ●健康・暮らし●

1. 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト  
／ ボランティアサークル Harmony
2. 稲枝 Cotton Project / Cotton Project
3. Oumi Food Project / Oumi Food Project
4. 市民および医療に携わる人々とのふれあいを通して志向する未来看護塾  
／未来看護塾
5. Living Design 12th FASHION SHOW / Living Design 12th

#### ●環境●

6. 犬上川竹林プロジェクト / エコキャンパスプロジェクト
7. エコキャンパスプロジェクト木楽部会  
／ エコキャンパスプロジェクト木楽部会
8. ソーラーペロタクシー / ソーラーハンター
9. 菜の花エネルギー／菜の花エネルギー
10. 「もったいない帳」を用いたスローライフプロジェクト  
／もったいないプロジェクト
11. Let's 複合 / 廃棄物バスターズ

#### ●景観・再生●

12. いかして民家? / 古民家楽座
13. 近江中山道百彩プロジェクト / 百彩
14. 限界集落の村おこし / 男鬼楽座
15. とよさと快蔵プロジェクト / とよさと快蔵プロジェクト
16. 湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動ー  
空き民家の調査・活用と都府農村交流事業の企画・実施／木之本楽座 ※
17. 湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動ー  
古民家での田舎暮らし体験プログラムの企画 実施 / 長兵楽座 ※

#### ●地域づくり●

18. 信・楽・人-field gallery project- / 信・楽・人-field gallery project-
19. Taga-Town-Project / Taga-Town-Project

20. 発信基地 in 朽木の森 / くつきチーム
21. 彦根人力舎ー彦根地場産業発信計画ー / リキシャ
22. 八日市屋台プロジェクト（プロジェクトYY） / わいわい楽座
23. 高島市における若者が輝くまちづくり調査活動ー  
高島における若者の生活スタイルに関する調査および発信活動 / Area+Design ※

※印はBプロジェクト

## 2-1-2 各プロジェクトの活動報告

各プロジェクトの活動報告については、次のとおりです。

# 1

## 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト ボランティアサークルHarmony



代表者名:佐藤友紀(人間文化学部)  
指導教員:黒田末壽・竹下秀子(人間文化学部)



甲良養護学校に通う子ども達の家族やその支援者などからなる「NPO法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー」の活動支援を目的として、自閉症などの障がいを持った子ども達の余暇活動支援や、彼らと地域との交流支援を行っています。2008年度は、これまで続けてきた粘土工作などの定例活動や、宿泊体験などに加え、生き物と触れ合う乗馬体験にチャレンジしたり、活動の広報に力を入れました。ハンディを抱えた子ども達やその関係者だけではなく、「地域との交流」を大切にしながら、障がいの有無に関係なく誰もが住みやすい地域社会の実現を目指しています。

## ボランティアサークル Harmony 活動報告

### ☆プロジェクトの目的☆

ボランティアサークル Harmony は、県立大学でサークル登録をした学生ボランティア団体です。甲良養護学校に通う子どもたちの保護者有志と、養護学校教員で構成する「NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー」の支援活動を5年間行ってきています。子どもたちは、対人関係を築くことや他者とのコミュニケーションをとることが難しいとされる、自閉症やダウン症という障がいをもっています。しかし、これまでの活動を通して、私たち学生に対してうち解けてきてくれています。また、一般の人たちにもこの活動の大切さが理解され始め、支援が広がりつつあります。

目的は、①障がい児者とその家族への支援、②障がい児者への理解を深めること、③彼らを支える地域社会づくりをより多くの人々と推進することです。学生自身も、ハンディを抱えた子どもたちだけでなく、その家族・養護学校教員・地域の方などと交流することで、障がい児者とのコミュニケーション力の向上と社会人としての成長を目指します。

### ☆日程（2008.4～2009.3）☆

- 4月：定例活動
- 5月：定例活動（湖東町）
- 6月：定例会議、定例活動
- 7月：定例会議
- 8月：宿泊体験活動（湖東町）
- 9月：定例会議、定例活動
- 10月：定例会議、カヌー体験（多賀町）、ろくろく祭り（愛知川）
- 11月：会議、お茶摘み+定例活動（湖東町）
- 12月：クリスマスコンサート、宿泊体験活動（湖東町）
- 1月：定例活動
- 2月：定例会議、定例活動+会議（3月分）
- 3月：なし

### ☆定例活動（お茶会と粘土工作）☆

子どもが自分だけの作業に没頭してしまわないように、隣にいる学生の手の動きを見たり、話しかけに応えたりしてもらえよう、積極的に呼びかけをしています。作業所での作業を視野に入れたとき、ひとりで作業をするのではなく、皆と一緒に活動するという意識をもってもらうためです。

#### ・お茶会

茶道は、静かに正座をし、作法にしたがってお茶をいただく、という型にはまった活動です。子どもたちと学生と一緒に、お茶の先生から作法を習います。この活動も6年目になり、子どもたちも長時間正座していられるようになっていきます。最近では、先生のお手本を見なが

からお茶を点てる練習もしています。



左：お茶の点て方を習っています。



右：粘土工作中。

#### ・粘土工作

粘土工作は、自由な発想と創造性を生かした型にはまらない活動です。粘土工作に関しては、毎回同じような形にはならないように誘導し、焼いて作品にします。今後は作品展も予定しています。

#### ☆カヌー☆

子どもたちにいろいろなことを体験・経験してもらいたいという思いから、琵琶湖でカヌーに乗るといった活動を行いました。この活動はB&Gの協力を得て行いました。子どもと学生がカヌーに乗り込んでいっしょに漕ぎました。

少し戸惑いを感じさせるものでしたが、次第に子どもたちの笑顔やはしゃぐ様子が見られ、波に揺られる感覚に心地よさを感じていました。



左：カヌー、多賀町にて。



右：お泊まり会にて、雑談中。

#### ☆宿泊体験☆

子どもたちは誰かの支援がないと自宅以外で宿泊ができないため、1年に2回宿泊体験を実施しています。今年も、夏は乗馬、冬はクリスマスコンサート、外での食事・宿泊など、子どもたちと一緒にいつもと違う体験ができました。私たちも定例活動だけでは見ることができない子どもたちの生活を知ることができます。また、保護者や養護学校の先生方から普段の様子を聞いたり、一緒に今後の活動を話し合ったりします。

### ☆クリスマスコンサート☆

障がいをもった人たちが誰にも気兼ねすることなく楽しめる音楽会を開きたいという思いから、毎年開催するようになり、今年で5回目を迎えました。県大の交流センターを借り、広報活動を行い、一般の方々も気軽に参加してもらえるコンサートにしました。Harmony が主催し、吹奏楽部の演奏やアフリカ太鼓、風船ショーを実施しました。毎回、障がいをもった方やそのご家族、養護学校の関係者の方々、知り合いを通じて、たくさんの人々に参加してもらっています。



左：吹奏楽部の演奏。



右：アフリカ太鼓

### ☆地域への貢献について☆

障がいをもった子どもたちは、自分たちでは自宅から出にくく、学校と自宅の往復以外では地域に出ることが少ない現状があります。そこで、私たちボランティアが手助けすることで、外に出る機会を増やし、地域の人との関わりをもてるように活動しています。

また、地域の人たちにも、コンサートなど様々な活動へ参加していただいています。それまで障がい児者と関わりがなかった人々に関心をもってもらうことによって、障がいの有無に関係なく、誰もが住みやすい地域社会につながっていく活動です。現在、その実現に向けて人々のつながりが広まってきている段階で、クリスマスコンサート参加者が去年より増えて200人以上来てくださったことに手応えを感じています。

### ☆課題と今後の展望☆

今後は、プロジェクトチームのメンバーも強化しなければなりません。この活動を続けていくためには、一定の数のボランティアを確保する必要があります。今後もメンバーの数を増やせるように、魅力ある活動の提案をしていきたいです。

目標である子どもたちの余暇活動支援は達成できていると思います。そして、これからも新たな活動内容を提案し、子どもたちにもっと様々なことを経験してもらおうと共に、幅広く地域の方々との関わりをもっていくべきだと考えています。広報活動も学内外に向けて、今後も継続して活動していきます。メロディーとHarmonyだけで完結する活動ではなく、他の方々と一緒に楽しみ、考えていく活動を広めていきます。

# 2

## 稲枝Cotton Project Cotton Project

代表者名:岩崎史子(人間文化学部)

指導教員:道明美保子(人間文化学部)

彦根市稲枝町本庄地域の綿花栽培は、現在、後継者不足や資金不足など様々な課題を抱えています。本プロジェクトでは、地元住民や「みずの郷いなか体験さわ」と連携しながら、若い労働力と染織の学術・技術的な知識といった専門性を活かし、綿花栽培の復興を支援します。活動の初年度となる今年度は、放置田畑を利用した綿花の栽培や糸作り、染色などの取り組みを通じて、自然素材の製造過程や先人達の知恵や手作業を学びました。また、それらの各作業を地元小学生の体験学習講座として実施し、地域に根ざした綿花栽培の技術と文化を未来に伝えることを目指しました。



# 稲枝 Cotton Project

## 2008 年度 活動報告

### 活動目的

---

本プロジェクトは、彦根で戦前まで盛んだった綿花栽培に着目し、地元住民の方々や「みずほの郷いなか体験さわ」と連携しながら、一緒に彦根の木綿の復興を目指そうと立ち上げたものです。

### 綿花復興へ

彦根市内の本庄町や柳川町は、古くからの綿花の栽培地で、布団綿などの産地でした。しかし、戦後木綿の産地として残ったのは綿織物の産地ばかりで、しかも原材料の綿は輸入に頼っていたため、綿の栽培地はほとんどなくなってしまいました。

その中のひとつが本庄町です。そこで戦前まで綿畑だったところはことごとく水田や野菜畑になりました。さらに、高齢化で畑の世話をする人がなくなったことや、国の減反政策で稲作もできなくなってしまったことで放置農地が増え、景観的にもよくない状態になりました。

そこで、綿花を育てることは土地の有効活用、景観の保全、伝統産業の復興に加え、衣服の地産地消の啓蒙にもなると考え、活動に参加することにしました。

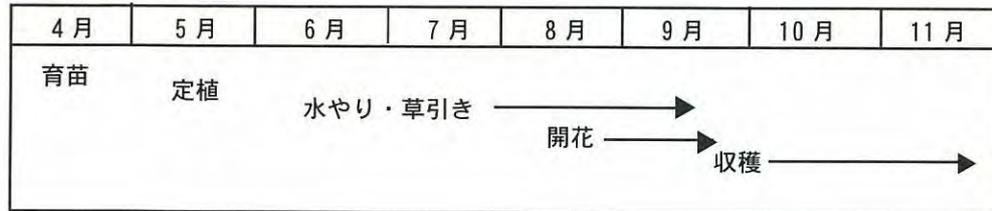


今年度の活動地は彦根市南部の三カ所です。柳川町で和綿を、本庄町と上岡部町で陸地綿を栽培しました。

# 活動内容

活動の初年度となる今年度は、放置田畑を利用した綿花の栽培や糸作りなどの取り組みを通して、綿をはじめとする天然素材の製造過程や歴史などを学びました。

## 綿の栽培の流れ



まず4月に入ると、前の年に育てた綿の種をポットで育苗します。

苗が育つと、5月10日（コットンの日）前後に畑へと定植します。一本の竹の筒を使って等間隔に植えられるように印を付け、その竹を土に押し当て穴を掘ります。そして、苗は土をほぐしながら一つ一つ丁寧に手作業で植えていきます。

6月～夏の間は水やりと草とりを主に行いました。雑草が伸びるのは早く、一週間に何度も草とりをしなければいけません。



コットンボールがはじけたら、いよいよ収穫です。きれいな状態で収穫するには2日に1回は畑へ行き収穫しなければいけません。半年以上をかけて育ててきた綿が収穫できることにメンバーの喜びも大きかったです。収穫期には次々と綿がはじけるので忙しいですが、畑を訪れるたびに収穫できる喜びを味わうことができました。

## 今年の収穫量

一つの畑につき約360本の綿が育ち、約2ヶ月の間で大量の綿を収穫することができました。左の写真の袋（一袋約2～3kg）で10袋ほど収穫することができました。収穫時期には澤さんや古川さん、そして地域の方がこまめに綿を摘んでくださり、おかげさまでこのようにたくさんの綿を収穫することができました。



## イベント参加

### 9月 地域の方との交流会



みずほの郷で開かれた食事会です。綿の紡ぎ方や綿についての情報交換をし、綿栽培に関わる方や地域の方と知り合えた貴重な時間となりました。

### 10月 高宮布まつり



彦根市高宮区でかつて生産されていた「高宮布」にまつわるイベント。“原始機”を体験し、布を作るための「織り」について理解を深めることができました。

### 11月 小学校での授業



稲枝東小学校の皆さんに綿についての授業をしました。メンバーにとっても、曖昧だったり知らなかった知識を再確認する良い機会となりました。

### 1月 しが子ども文化芸術祭



「近江はたおり探検隊」のブースのお手伝いとして参加しました。綿や糸繰り器が興味を誘い、多くのお子さんが訪れてくれました。

## 地域へ、そしてこれから

活動を進めていくにつれて、綿を中心とした人の輪がどんどん広がっていくことに驚きました。ほんの少しでも自分から動いてみたり、発信してみると、まだ知らない誰かが気づいてくれるかもしれないということを、このプロジェクトを通して学びました。

今年は初めての綿栽培でしたが、色々なイベントを通して地域の方々との出会いがあり、少しずつでも私たちの活動について知ってもらえたのではないかと、と思っています。

今後の課題は、まず収穫した綿を糸にし、織物にして作品に仕上げることです。また、地域に根ざした活動にするために、無理なく活動を継続していけるようなシステムを考えることが必要だと考えています。

# 3

## Oumi Food Project

### Oumi Food Project

代表者名:青木麻美(人間文化学部)

指導教員:灘本知憲・佐々木一泰・田中敬子

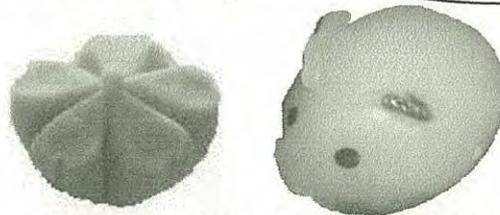
岡本秀巳・浦部貴美子(人間文化学部)



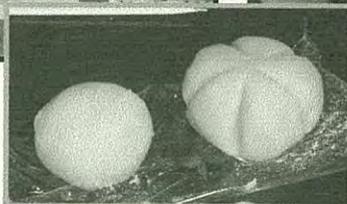
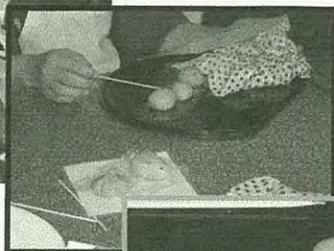
本プロジェクトは、食生活を専攻する学生らが中心となり、「食」という観点から彦根市を元気にするための活動を行っています。発足一年目であった2007年度は、地元産の食材を使った「近江牛バーガー」の商品開発と屋台販売を中心に活動しました。2008年度は、彦根市内の橋本商店街にある「いこう館」を活動拠点とし、これまで調理・加工過程で廃棄されていた食材や、地元産の食材を使ったオリジナル和菓子の開発や、料理教室や講演会などの食育活動に取り組みました。学生ならではの視点と専門性を活かし、「食」を通じて、学生と地域、地域住民同士をつなぐ「いこいの場」を提供しました。

# 手作り和菓子体験開催!

In いこう館



当日作成した桜とうさぎの練りきり



3月、いこう館で開かれた  
毎月10日恒例行事『橋の市』で  
『手作り和菓子体験』を開催した模様です。

※ いこう館：滋賀県立大学と橋本商店街が連携した商店街活性化の拠点となる建物



当日は8名の方に参加していただきました。  
結果はなかなか好評で、地域の方々と楽しい時間を持てました。  
自分たちで企画したイベントを行う事で  
地域の方々主宰の行事を盛り上げる事が出来たのは、  
私達にとって**大きな成果**…となりました!

また、地元で採れた野菜等の販売や…

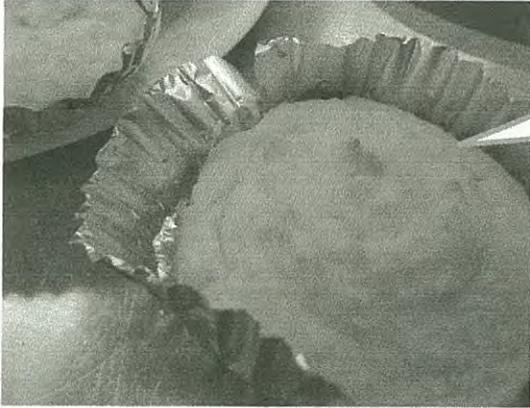


うどんの販売…

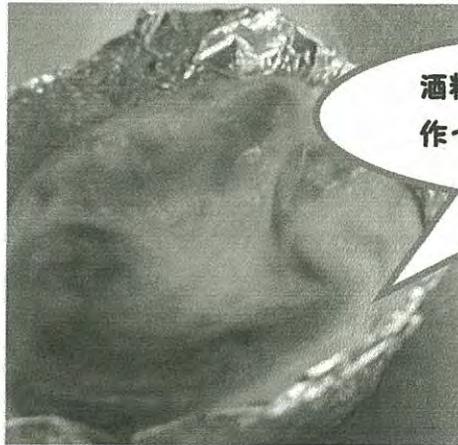
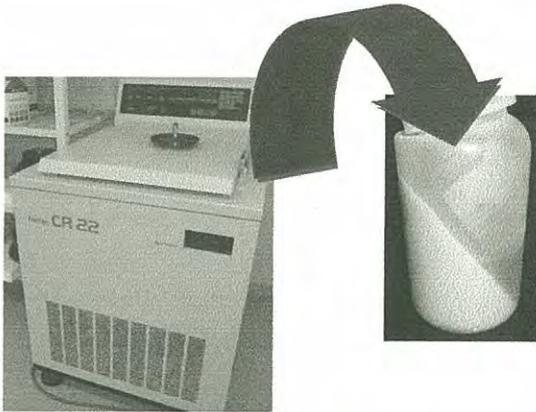


等のサポートも行いました。

地域の方々に喜んでもらえる商品の開発に取り組みました



甲良町で採れた  
おから入りマフィン



酒粕を遠心分離器にかけて  
作った『酒粕チーズケーキ』

これは9月、10月にいこう館に来た方々に配りました。  
いこう館で出せる品を開発する為、夏に調理室で試作を重ねました。  
試行錯誤の繰り返しでした

職人さんを招いて指導もしてもらいました



和菓子職人さんから  
和菓子の指導を受ける

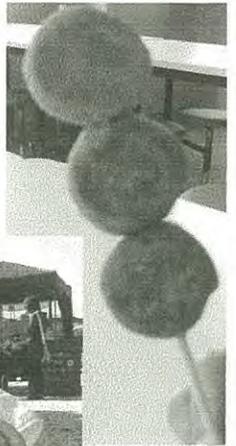
パン職人さんから  
パン作りを学ぶ



昨年度に引き続き…**近江牛バーガー**を販売しました



おから餅  
おいし～な



販売開始から長蛇の列が出来、屋台の周りは人だかりになりました。

用意した150食は即完売☆

今年も大盛況に終わりました♪

三色団子風にした『おから餅』も販売しました

こちらも売れ行きは好調でした。

## いこう館に看板完成



生活デザイン学科の院生さんに、看板製作を依頼し、3月に完成しました。

描かれている九種類のマークは、様々なイベントが行われる、にぎやかないこう館であるようにという願いが込められています。

## 地域への貢献

地域のイベントをサポートし、自ら考えた企画を提案・実施し、盛り上げた

## 課題と今後の展望

橋本商店街と大学とのつながりの強化

いこう館を盛り上げる催しものの提案や広報活動を行う

地元の農産物を使った商品の開発

学生の縦の繋がりを強化、継続性のある組織作り

# 4

## 市民および医療に携わる人々との ふれあいを通して志向する未来看護塾

### 未来看護塾



代表者名:甲津江理・山本徹(人間看護学部)

指導教員:豊田久美子・伊丹君和(人間看護学部)



私たちは、人間看護学部に所属する学生らが中心となり、地域住民や医療現場で働く方々と交流しながら、看護における対人関係の意義を学ぶことを目的に活動しています。これまでの4年間の活動を通じて得ることができた、医療や看護に対する多様な地域のニーズに対し、今年も彦根市立病院小児病棟等での「定期的なボランティア活動、湖風祭への「子ども広場」の出演、長寿会での健康支援活動などに取り組みました。今後も、学生ならではの視点で地域を捉えながら、人が人として生きていくための生き方を支える「未来の看護のあり方」について模索していきます。



## 未来看護塾の活動は！？

未来看護塾の活動は大きく2つに分類することができます。

1. 地域市民および医療に携わる人々の交流【定期的なボランティア活動】
  - 1) 彦根市立病院 小児病棟
  - 2) 特定非営利活動法人 NPO ぼぼハウス／ぼぼクラブ
  - 3) ハピネス彦根
2. 未来看護塾企画の人々への【生き活き支援活動】
  - 1) 入院患者を対象として……彦根市立病院小児病棟でのクリスマス会
  - 2) 親子を対象として……子どもフェスティバル&キッズフェスティバル  
湖風祭での“こども広場”開催

## 彦根市立病院 小児病棟

活動…月曜日から金曜日の間の16～18時

活動場所…彦根市立病院 小児病棟

対象者…小児病棟に入院している子どもとちとその親御さん

活動内容…プレイルームで遊ぶ(トランプ・ブロック・折り紙・ままごと・手裏剣遊び)勉強を教える、病室から出られない子どもとちと関わる(あやとり・絵本読み)プレイルームの飾りつけ

日頃子どもたちと接することや、実際に病院に行く機会が少ないため、この小児病棟での活動はとても貴重です。小学生や中学生は入院中、勉強が遅れることに対して不安を抱いているようで、私たちが少しでも勉強のお手伝いできればいいなと思います。一緒に勉強していると懐かしくてとても楽しいです。また、子どもたちと一緒に遊ぶことを通して、子どもの元気や笑顔を引き出し、退院への意欲、成長・発達を促せるような関わりをしていこうとも思っています。このボランティア活動を通じて、さまざまなことを考え、感じて、子どもたちの目線にたつてものごとを考えられるように、感性を育んでいきたいと思っています。

## ぽぽハウス・ぽぽクラブ

〈ぽぽハウス〉

活動…月・火・水の17時までの自由な時間

対象者と活動内容…高齢者へのデイサービスや、障害をもつ子どもたちの放課後学級をおこなっているNPO法人です。1年を通じて様々な企画をたて、高齢者や障害をもつ子どもたちが地域に出て活動することをサポートしています。

〈ぽぽクラブ〉

活動…月2回の月曜日

対象と活動内容…彦根市の子育て支援の一環として、親子間のふれあいや親同士の輪を広げることを目的に活動を行っている団体です。年齢別にクラスが編成されており、そのクラスに参加することで子どもたちは同年代の友達と遊ぶことができます。クラスは遊び隊(2歳児中心の親子)とたんぽぽ隊(3歳児中心)にわかれます。各クラスでは日々の活動のほかに誕生日会や運動会・クリスマス会などの行事を行っています。

## 湖風祭

湖風祭では無料でスライム作り、スーパーボールすくい、アートバルーン、シャボン玉を子どもたちに楽しんでもらいました。今年もスタンプカードを用いることで子どもの遊びへの積極性を促しました。私たちは子ども達と関わることでコミュニケーション能力の増加、そして地域への貢献の大切さを学びました。また今回は2日間にわたり、親を対象としたアンケートをとりました。未来看護塾の認知度については17%の人しか知りませんでした。まだまだ地域へ根付いていないことがわかりました。その他に子どもの年齢層や満足度、改善点などを書いてもらうことで来年への課題も見つけることができました。



## クリスマス会 ～in 彦根市立病院小児病棟～

2008年12月20日には、彦根市立病院小児病棟のデイルームをお借りしてクリスマス会を開きました。デイルームにクリスマスの飾りつけをして、ハンドベル、マジック、合唱、クリスマスカードづくり、サンタが子どもたちにプレゼントを渡しました。高齢者の方には松ぼっくりでつくったクリスマスツリーをプレゼントしました。健康上、参加できる子どもは多くはなかったものの、病院の看護師さんが他の病棟の方々にも声をかけてくださり、高齢者の方が多く参加してくださいました。この活動を通して、普段の生活を病院で送っているこどもさんにとって、



季節を感じてもらう楽しみの一つになったと思います。来てくれた人の笑顔がたくさんみられました。しかし、子どもたちや高齢者が参加するというよりも、どちらかというと私たちが提供するという形のクリスマス会だったと、振り返ってみてわかりました。反省として、今後の活動に活かしていこうと思います。私たちが病院と地域の人々の間で、架け橋として存在できるよう、計画で客観視する力が求められることに気づきました。みんなで一つのものを作り上げること、それにおいて必要な連携ということが難しいこと、しかし人と人を繋いでゆく看護職にとって大切なことだということを深く実感する機会となりました。

### 地域への貢献について

今年は何年行われていた長寿会はなく、地域への大きな貢献という面では湖風祭がありました。湖風祭に関しては上記に述べた通りです。ですが未来看護の地域への貢献で一番大切なのは定期ボランティアです。一度に関わる人は少ないですが継続することで多くの人に関わることができました。また定期的に継続することで地域との関連の力を強めていくことができ、地域へ貢献できていると思います。また本年度からは市立病院の緩和ケア病棟へのボランティアが開始されます。さらなる地域への関わりを大切に、少しずつでも地域に貢献していきたいと思います。



### 課題と今後の展望

実際に地域で活動することによって、対象者の具体的な意見を直接聞いたり、反応を見たりすることができた。そこから、地域の子どもたちへの遊ぶ場の提供や高齢者の方々の健康意識の活性化等、未来看護塾の活動がもつ役割やその必要性を実感することができた。それに加え、今年度の活動を通して知り得た地域の人々のニーズに応えていくために、さらなる活動を今後も行っていく必要があると考えた。そこで今年度の活動を通して今後の課題に関して以下の点を考えた。

- ・湖風祭に実施したアンケートから未来看護塾の認知度が低かったので広報誌の作成を定期的に続けていく。
- ・活動を通して得た地域の方のニーズに対して活動を展開していく。
- ・学生間で活動の振り返りや意見交換を行い、考えを共有し、今後の活動内容の改善をしていく。
- ・特色のある活動を創造していく。

# 5

## Living Design 12th FASHION SHOW

### Living Design 12th



代表者名:杉森香苗(人間文化学部)  
指導教員:森下あおい・道明美保子(人間文化学部)



昨年で11年目を迎えた「ファッションショー」。これまで、ショーだけではなく、ショーの服の展示や服に使用した生地を紹介を通して、豊かな滋賀の繊維産業を私たち自身が学ぶ活動と同時に、滋賀の地に住む市民の方々に地域産業を知っていただく場を提供しました。2008年度は、地域や会場との“交流”や“一体”テーマに、地域の素材を身近に感じてもらうためのワークショップや、観客と一体となれるようなショーを開催しました。“生活デザイン”という、暮らしの中のあらゆるモノを幅広く学んでいる私たちならではの視点で、地域の人々とより一体となって楽しめる空間や時間をデザインすることを目指しました。

# Our Activities

今回私たちはファッションショーを行うにあたって、ただこれまでのようにショーを見てもらうだけではなく、もっと地域の方々と身近に感じて交流したいと考えた。

そこで、私たちは“地域の方々と身近に感じる活動”を目標とし、ショーの告知も兼ねファッションショーの約3ヶ月前から滋賀県内や彦根市内の地域イベントに参加するなど、積極的に交流の場を設けた。



## 8.8 第46回彦根ばやし総踊り大会

毎年彦根市の商店街で行われる、彦根ばやし総踊り大会に出場。会場では、滋賀県の布会社から提供していただいた布で作った、オリジナルでめぐいとミニパンフレットを配布し、私たちの活動を知ってもらいきっかけを作った。私たち自らオリジナルでめぐいを身につけ、1人1人に声をかけ手渡しをしたことにより、地域の方々と身近に感じる事ができた。また、彦根ばやし総踊りでは全員でファッションショーオリジナルTシャツを着て、みごとに1時間踊り続けた。全員おそろいのピンク色のTシャツを着て踊ったことによる宣伝効果は絶大で、地域の方々に私たちの活動を認識してもらうことができた。このでめぐいの配布・総踊りを通して、初めて、たくさんの人々と交流を深めることができた。



## 9.15 第9回朴アート祭

### ●ミニファッションショー

彦根護国神社付近にあるカフェ、「朴 mok u」で行われた第9回朴アート祭に参加し、ファッションショーを行った。服の数やショーの長さは小規模だったが、地域の方々のすぐ目の前でショーを行うことができた。また、朴の中村さんからのつながりで紹介していただいた彦根市内の美容室「ask」「RAS HAIR」さんにショーに出るモデルのヘアアレンジをしていただくなど、新たな試みと交流が実現した。

### ●くるみボタンワークショップ

上記と同じく朴アート祭開催中に、地域の子ども向けのワークショップを試みた。子どもたちと一緒に滋賀県の布でボタンをくるみ、それに子どもたちそれぞれの装飾や絵を描いてもらう。そしてヘアゴムなどのアクセサリーにつけてプレゼントするというのだ。開催中、多くの子どもたちが訪れ、とてもぎやかなワークショップとなった。子どもたちと直に触れ合うことで、私たちはとても元気をもらい、たのしくワークショップをすることができた。そして子どもたちを通して、保護者の皆様にも興味を持ってもらえたと感じた。



この朴アート祭でのファッションショーとワークショップは私たち12期生の初めての試みだったので、様々な面で不安や戸惑いがあった。しかし、彦根城付近の神社境内での開催ということもあるせいか、子どもやその保護者世代だけでなく、若い人から年配の方、外国の方も多かったので年代やジャンルを問わず様々な方と交流でき、私たちの活動をたくさんの人に見てもらうことができた。また、この朴アート祭への参加で多くの反省点の認識ができたことにより、私たちのショー構成と服作りに対する思いも高まり、その後の活動につながる大きな一歩となった。



## 9.25 北川織物ファッションショー

北川織物工場の北川さんから、能登図書館で開催されるファッションショーにお誘いいただき、私たち活動メンバーのうち5人が代表して参加した。このファッションショーは、北川織物工場の数々の素敵な麻布を、ショー形式で紹介するというものだ。そこで私たちも、北川さんが織られた麻布で服を作って参加した。その麻布は、事前に北川さんにデザイン画をお見せし、それぞれのイメージに合う布を選んでいただき、提供していただいたものだ。

各自がいただいた布の、それぞれの特徴や色、風合いを生かしながら服作りをした。ショー当日は私たち以外の方が作られた服もたくさん見ることができた。このショーを通じて、麻布の様々な可能性を感じることができ、とても良い刺激を受けた。



## 11.9 展示

ファッションショー終了後の湖風祭3日目には、学内で服の展示会を行った。今回のファッションショーのテーマが「ショーウィンドウ」ということもあり、それぞれの服に、ハンガーやオリジナルタグを用いて、本物のブランドショップをイメージした空間作りを心がけ、展示を行った。また、服を展示するだけでなく、前日に行われたファッションショー当日の映像を流すことにより、実際にショーを見ていただけなかったお客さんにも、楽しんでいただくことができたと感じた。そして、来場者の方にアンケートで私たちのショーや展示の感想を聞き、私たちの活動の成果を知った。



私たちはこのような活動を通して、地域の方々と触れ合い、輪を広げ、さらに滋賀県立大学のファッションショーという取り組みについて、よりいっそう多くの人に知ってもらえることができたことと肌で感じた。約3ヶ月前から外へ出て活動を行ったことで、「総踊りで活動を知ったから見に来たよ!」というような声をいくつも聞くことができ、私たちの活動の意義を感じた。最後に私たちの活動を振り返ってみると、私たちが当初目的とした、“地域の方々に身近に感じる活動”は達成されたのではないかと感じる。私たちがこれだけの活動をやって来れたのは、多くの方々の協力と支えがあったからであり、活動に携わったすべての皆さんに心から感謝したい。この地域との交流をここで終わらせることなく、この活動で得た経験やつながりをこれからも大切にしたい。



## 成果と課題

近江楽座の活動としてファッションショーを行うことにどんな意味があるのか — 私たちは戸惑った。私たちにとっては、やはり“ショーを完成させたい”という思いが強い。12年間続いてきたファッションショーは、私たち生活デザインの生徒にとって誇りであり、憧れであり、大きな学びの場である。どんなショーにしたいのか、どんな服を作るのか、どうすれば楽しんでもらえるか、たくさん考えて、たくさん話し合った。話し合いを重ねるなかで、私たちがただショーをするのではなく、見ている人と一緒になって楽しみたい、そのために私たちがしていること・やろうとしていることを知ってほしい、私たちから一方的に伝えるだけではなく自分たちから地域の中に入っていき、自分たちから地域の人々と一緒になって楽しむ活動をやってみよう、と思うようになった。この『やってみる』ということを考えるきっかけになるものが『近江楽座』だった。

もしかしたら、最初は無理やりに近江楽座の活動とファッションショーを結びつけていたのかもしれない。しかし近江楽座としての活動があるからこそ、何かやってみようと考えて実践した。そこには大きな意味と成果があった。

例えば、今回行った「ワークショップ」滋賀の繊維に触れて、感じて、知ってもらおうということが大きな目的だった。開催中、多くの子どもたちが訪れ、とてにぎやかで楽しく活動することができた。ワークショップを通して、町の人と交流するという自体にも意味はあると思うが、この活動で気付いたことは「言葉で伝える」ということの大切さであった。このワークショップをきっかけに、ファッションショーのことや地元の企業さんから提供して頂いた布を使っているということなどを、直接話しながら伝えることができた。直接話すことで、伝えることの難しさや自分たちがデザインしたものから会話が広がることの楽しさを知った。何かをつくる・デザインするということを学んでいる私たちにとっては、とても良い経験となった。「彦根ばやし総踊り」への参加も同様に、手作りの手ぬぐいやミニパンフレットを直接配布するというで会話が生まれ、私たちの活動に親しみをもって知ってもらえたのではないかと感じる。

今回、見ている人をショーに引き込むため、私たちはショーにあるストーリー性を持たせるということを考えた。そのため、ある程度今回のショーの内容・テーマである『SHOW WINDOW』という設定をあらかじめ知っておいてもらう必要があった。外部での活動を広く行ったことで、今年のファッションショーに対する認識も広まり、結果として湖風祭ではショーへの参加者を含め、多くの人に楽しんでもらえたと思う。近江楽座の活動全体から見ると、地域との関わりは少ないように思われるが、一年間を通して活動してきたことがメインである湖風祭ファッションショーに集約されて成果が発揮されることは、この『Living Design』ならではのものであり他の活動にはない良さがあると思われる。

今年で近江楽座への参加の3年目となったが、“交流・一体”というテーマをもって活動したことで、私たち自身も見ている人も一緒になって楽しめるファッションショーをつくることができた。しかし、生地の提供を頂いている企業の方々との関わりや、地域への貢献・産業の活性化という点からみるとまだまだ不十分な点もあり、また近江楽座として活動を続けていく際の、活動の幅・可能性がたくさんあるというようにも思う。近江楽座の活動を通して、この滋賀県にある繊維や布の魅力を、滋賀県立大学であるからこそ表現できるファッションショーとしてこれからも伝えていってほしい。



# 6

## 犬上川竹林プロジェクト エコキャンパスプロジェクト



代表者名:井上太樹(環境科学部)

指導教員:野間直彦(環境科学部)・黒田末壽(人間文化学部)



私たちは、大学の北東部を流れる犬上川の河辺林を、地域住民と協力しながら継続的に維持・管理していくことを目的として活動しています。これまで4年間の活動の成果として、景観や防災的にも問題のあった竹藪を、明るく親しみやすい環境へと改善することができました。2008年度は、これまでの定期的な竹林整備活動や竹炭づくり、河辺林の生物調査などに加え、病院や学校など地域住民を対象に、竹や自然と親しむことを目的とした体験イベントや交流会を行いました。これらを通じて、自然素材としての竹の素晴らしさを伝えるとともに、地域住民の自主的な河辺林整備を促進していきます。

## 竹林の過去、現在…

昔、日本人にとって竹は身近な存在でした。タケノコは食材、その皮は包装材として、成長した竹は建材や生活用資材として、竹は生活の中に組み込まれていました。そのため日本各地に竹は植栽され、大事に管理されていました。しかし、高度成長期以降プラスチック用品が広まるなど日本人の生活様式が変わり、竹の利用が減少しました。その結果、各地の竹林は放置され、竹林の拡大・荒廃が進みました。



放置され荒れ果てた竹林

## 犬上川河辺林



犬上川の河辺林

犬上川には川に沿って帯状に続く“河辺林”と呼ばれる林が多く残っています。河辺林には、この辺りではあまり見られないような貴重な植物が生育しています。そして、この河辺林には竹林が広がっています。この竹林も放置され、拡大・荒廃が進み、様々な問題を引き起こしています。竹が増えすぎると、林内に光が入りにくくなり、植物の生育環境が悪化する。暗く鬱蒼とした林は景観的にも悪く、ゴミの不法投棄も増える、不審者も隠れやすくなる。林沿いの道路へ竹が倒れてくる、冬季には竹の上に積もった雪が落ちてくる。枯れ竹が絡まり合っていると、人が入りにくくなり、ますます竹林が荒れていきます。

## 犬上川竹林プロジェクトの目的

犬上川竹林プロジェクトでは、大学関係者や市民団体「犬上川を豊かにする会」と共に、河辺林で起きているこのような問題の解決に取り組んでおり、継続的な河辺林管理を目指しています。

## 今年度の活動

2008年度は、竹林整備活動を継続して行い、新たに調査研究活動を開始しました。また、他団体との交流もたくさん行うことができ、活動の輪が広がっているのを実感することが出来ました。

### ※ 竹林整備活動



河辺林の環境改善には、竹林の継続的な管理が必要です。そのため、私たちは竹の間伐、倒竹の除去などを行っています。竹の量が適度になると、林は明るく、入りやすく、親しみの持てるものに生まれ変わります。基本的に毎月第三土曜日を活動日としています。これまでの5年間にわたる活動の結果、河辺林の約1000㎡を整備することができました。入りやすくなった林には、タケノコや竹を採りにくる地域の人々の姿をよく目にするようになりました。

## 竹の有効利用

### 竹炭づくり

移動式炭化炉を用いて学内で竹炭を作りました。3月に予定していた竹炭づくりは読売新聞に掲載され、たくさんの市民の方から連絡を頂きましたが、当日は生憎の雨で炭焼きは中止に。しかし、見学に訪れた方に活動紹介などを行い、楽しく交流することができました。



### 竹箸づくり



湖風祭での竹箸作り

湖風祭や、県立大学で行われ

た「六ヶ所村ラブソディー」上映会などで竹箸づくりの体験ブースを出展しました。また、竹箸づくりに興味を持った長浜バイオ大学の学園祭実行委員から要請を受け、長浜バイオ大学の学園祭でも竹箸づくり体験ブースを協同して出展しました。

その他、竹とんぼや竹楽器など、色々な竹細工に挑戦しています。

### タケノコ採り

タケノコの時期は本数管理が容易なため、このときにしっかり手を入れるのが竹林管理にとって重要です。2008年度は、彦根のラジオで広報を行い、地域の人と一緒にタケノコ採りやタケノコ料理を楽しみました。



このような竹の利用活動は、犬上川や竹について知り、竹に親しみを持ってもらうのに非常に有効です。竹林の問題を解決するにはまず知ってもらうことが大切です。

## ☀ 調査研究活動

### 伐採実験

琵琶湖博物館、環境科学部と共に、河辺林の生物多様性を維持するためには竹林をどの密度で管理するのがよいかという点に焦点を当て、竹の間伐による下層植生の影響を調査し、竹林の管理指標の検討を試みています。

### 希少植物の移植

現在犬上川では河川改修工事が行われており、放っておけば貴重植物の一部の生育地が消失してしまいます。そこで、湖東地域振興局から生育地が無くなる貴重植物の移植の要請を大学が受け、滋賀植物同好会、彦根自然観察の会と協力して2006年から移植作業を行ってきました。今年度の移植作業で、予定していた移植は全て終了しました。これからは、移植株の定着率などの調査を行う予定です。



今後の課題として、移植地の管理をどのようにしていくかが挙げられます。これからも継続してモニタリングを行うのか、あるいは数年の観察の後放置するのかなど、費用と効果を考えどのような管理が適当なのか議論が必要です。

## ☀ 他団体との交流

「犬上川を豊かにする会」や開出今第三自治会と座談会を2回行いました。私たちの活動のことを知っていただき、また地域の人の河辺林に対する思いを聞くことができました。

他にも、竹を使用したいということで環境建築学科、人間文化学部、生活デザイン学科、男鬼楽座と竹採りを、長浜バイオ大学とは竹箸づくりを一緒行うことができました。また、彦根市環境保全指導員主催の市民環境スクールに参加し、犬上川周辺で環境活動を行っている他団体と意見交換することができました。さらに、未来看護塾の協力の下、彦根市立病院で竹楽器（コンチク）の演奏会を催しました。たくさんの人に、犬上川や竹のことを知ってもらってきたと思います。



彦根市立病院でのコンチクの演奏会

## ☀ 地域への貢献



多賀町立博物館での門松作り

今年度は多くの人・団体と一緒に活動を行うことができました。これは今までの継続した活動が実を結んだものだと思います。多くの人に犬上川のこと、竹のことを知ってもらえたのではないかと思います。また、これまでの整備活動により、さらに利用しやすい林にすることができました。これらのことが、竹の利用に繋がり河辺林の環境改善の一歩になると考えています。また、色々な団体が色々な分野で竹を使用することによる間接的な貢献は計り知れないものがあります。さらに、調査研究活動により科学的見地から竹林管理への提言ができれば、犬上川だけでなく各地の竹林にも応用することができます。

## 課題と今後の展望

- ◆ 犬上川流域に住む人々に放置竹林の問題について、知ってもらい、地域にとってどのような林がいいのか一緒に考えていきたいと思っています。そのためには、私たちの活動に参加してもらう必要があります。月に一回の定例活動をしっかり行い、参加しやすい仕組みを作っていきます。彦根市の協力も得て、市民の参加をさらにすすめようと思います。
- ◆ 愛知川や野洲川など他の流域で竹林整備活動を行っている団体との交流が今までありませんでした。同じ問題に取り組んでいる団体同士で意見交換を行うことで、新たな発見や問題解決の糸口が見つかるかもしれません。
- ◆ 未だ枯れ竹や腐りかけの竹など有効利用できそうにない竹を処理できずにいます。とりあえずは焼却処分を目指そうと思います。
- ◆ 県立大学の学生の活動への参加がほとんどありませんでした。学生が参加しやすいイベントの開催、学内向けの広報を積極的に行うなど対策を講じて、より多くの学生の参加を促したいと思います。

# 7

## エコキャンパスプロジェクト木楽部会

### エコキャンパスプロジェクト木楽部会

代表者名:田口真太郎(環境科学部)

指導教員:松岡拓公雄(環境科学部)・山根周(人間文化学部)

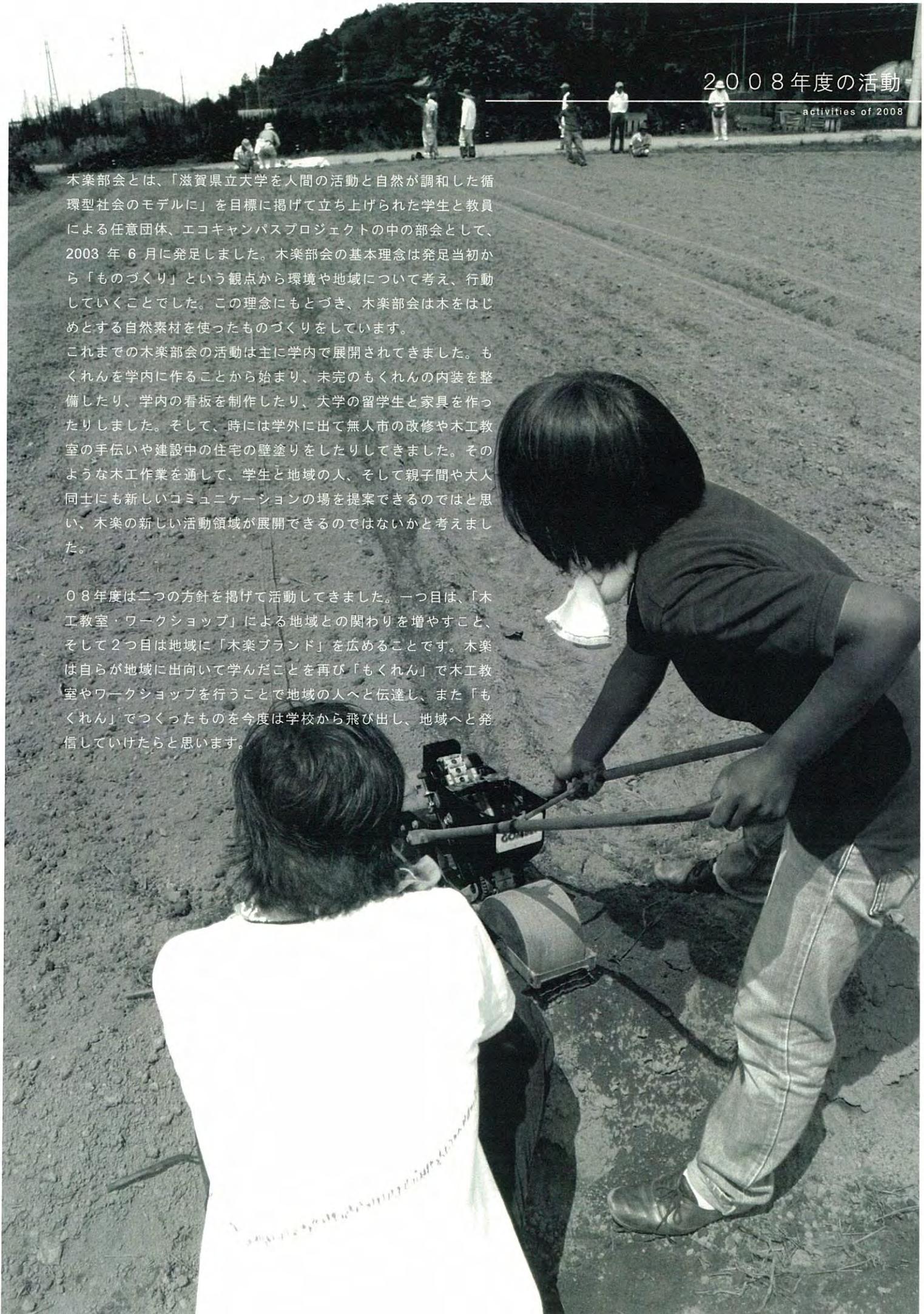


私たちは、木などの自然素材を使ったものづくりを通じ、ものを作る楽しさや難しさ、大切さを学ぶと同時に、地元産の間伐材等の積極的な活用について模索することを目的に活動しています。活動5年目となった2008年度は、造形活動拠点である木作業施設「もくれん」を拠点に、自然素材を使った家具や小物「木楽ブランド」の製作・展示に取り組みました。また、新たに、木工教室や近江八幡での出張ワークショップを企画・実施し、これまでの活動を広く地域へ展開しました。年代や性別を問わず誰もが気軽に楽しめる木作業を通じて、地産池消への理解を含め、環境への意識の向上を目指します。

木楽部会とは、「滋賀県立大学を人間の活動と自然が調和した循環型社会のモデルに」を目標に掲げて立ち上げられた学生と教員による任意団体、エコキャンパスプロジェクトの中の部会として、2003年6月に発足しました。木楽部会の基本理念は発足当初から「ものづくり」という観点から環境や地域について考え、行動していくことでした。この理念にもとづき、木楽部会は木をはじめとする自然素材を使ったものづくりをしています。

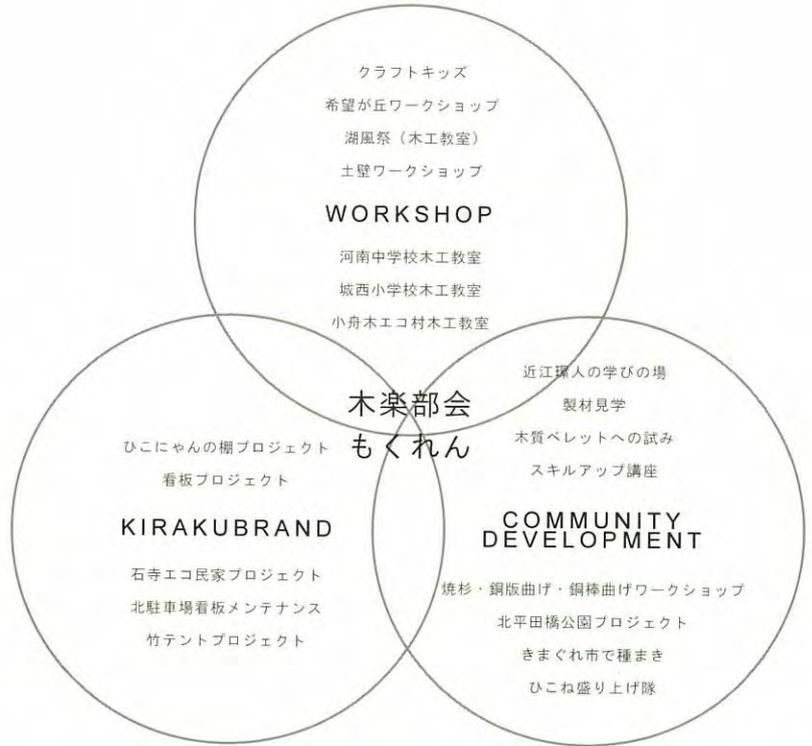
これまでの木楽部会の活動は主に学内で展開されてきました。もくれんを学内に作ることから始まり、未完のもくれんの内装を整備したり、学内の看板を制作したり、大学の留学生と家具を作ったりしました。そして、時には学外に出て無人市の改修や木工教室の手伝いや建設中の住宅の壁塗りをしたりしてきました。そのような木工作業を通して、学生と地域の人、そして親子間や大人同士にも新しいコミュニケーションの場を提案できるのではないかと思います。木楽の新しい活動領域が展開できるのではないかと考えました。

08年度は二つの方針を掲げて活動してきました。一つ目は、「木工教室・ワークショップ」による地域との関わりを増やすこと、そして二つ目は地域に「木楽ブランド」を広めることです。木楽は自らが地域に向かい学んだことを再び「もくれん」で木工教室やワークショップを行うことで地域の人へと伝達し、また「もくれん」でつくったものを今度は学校から飛び出し、地域へと発信していけたらと思います。



# 木楽部会活動マップ

the map of kirakubukai activities



**Workshop**

ワークショップは木楽部会と参加者が気楽にものづくりを楽しむ場です。ワークショップは木楽が一方向的にデザインの提案・制作するのではなく、参加者と共に考え・ものづくりをすることで相互に影響しあい、刺激しあうことだと考えます。参加者もまた木楽部会なのです。



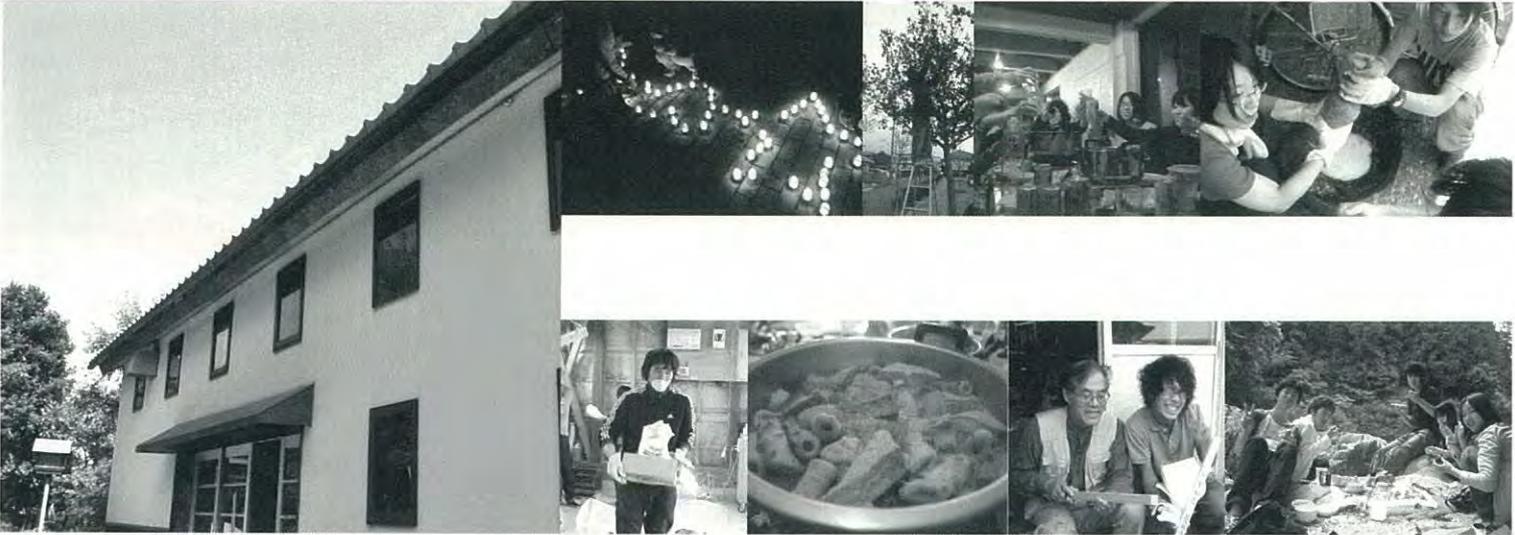




**Kiraku-brand**

木楽部会の活動も5年目に入り、学内の看板など木楽の製作物も少しずつ増えてきました。これまでの製作物に一貫してきたことが、自然素材の活用と地産地消、自分たちの手で作るということです。この活動理念を「木楽ブランド」とし、木楽の製作物、そして木楽で育った人材を地域に発信していこうと思います。





## これから

in the future

2008 年度は木楽部会にとって新たなスタートの年にしたいと思い、活動してきました。これまで木楽部会はいつものづくりについて考えてきました。それはデザインへのこだわり、天然素材へのこだわり、作品のディテールへのこだわりに現れてきたと思います。このこだわりを後輩へ、そして地域へと伝えたいと思いました。昨年度から木楽はものづくりを「伝える」ということにチャレンジし始めました。今年度はさらに積極的にワークショップに関わってきました。クラフトキッズや希望ヶ丘ではボランティアスタッフとしてもものづくりのサポートをしてきました。手伝うまでは、小さい子の手伝いだし簡単だと考えていたのに、実際はほとんど関わったことのない小学生とどのように接していいかわからず、教えるのも同年代の人に指示するのとはちがって、一つ一つ面倒をみてあげなくてはなりませんでした。そして、どうしたら子どもがより主体的に作業できて、ものづくりの面白さを感じてくれるかということを試行錯誤しました。

2008 年度の後半では今度は木楽部会主催のワークショップ・木工教室にチャレンジしてきました。小学生や中学生、または親子を対象にさまざまなことに取り組みました。1年間行った木楽部会の活動の中で、課題や反省は沢山あります。しかし得たもののほうがたくさんあることは間違いありません。もくれんという先輩たちが作り上げてきた最高の環境があるのだからやはりそこを拠点にワークショップや木工教室を開くことが一番の理想だと思います。

現在、公園のベンチ制作や学内のカモ小屋制作や看板の修復など進行中のプロジェクトもあります。しかし、もくれんを拠点にしっかりとしたものづくりマインド、つまりは木楽ブランドを確立していけたらと思います。

木を使うこと、そしてものづくりを通していろいろな団体、大人、子供たちと出会えて木楽部会の活動も展開していくことができました。これからも木楽部会はこのような関わった人たちに支えられて活動していけるとと思います。そのような皆さんに心から感謝を致します。そしてこれからも木楽部会が活動し続け、もくれんのあかりがいつまでも灯し続けられることを願います。

田口真太郎

エコキャンパスプロジェクト 木楽部会  
 e-mail : kirkau\_o\_kiraku@yahoo.co.jp  
 URL: <http://plaza.rakuten.co.jp/kirakuokiraku/>



# 8

## ソーラーペロタクシー ソーラーハンター

代表者名:元吉良輔(工学研究科)

指導教員:奥健夫・鈴木厚志(工学部)・近藤隆二郎(環境科学部)

2007年より彦根市内で運行されている自転車タクシー。主に人力によって動くこの“ペロタクシー”には、坂道などのために電動アシストシステムが搭載されています。私たちは、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を出さない環境にやさしい太陽電池を使って、その充電を行う「ソーラーペロタクシー」を開発し、それを普及させることを目的として活動しました。初年度となる2008年度は、主にペロタクシーへの太陽電池の設置とともに、電力やCO<sub>2</sub>の削減量の測定と検証を行いました。こうした活動を通じて、環境に調和したエネルギー源である太陽電池についてアピールし、エネルギー環境問題への関心を高めていきます。





## ソーラーハンター活動報告



### ★プロジェクトの目的★

現在、地球温暖化が問題視され、その原因である二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を出さない環境にやさしい太陽電池を使って、ペロタクシーの電動アシストシステムの充電を行う自立型のペロタクシーの普及を目指し、町の活性化を進めていくことです。

### ★プロジェクトの内容★

- ・ 太陽電池によるペロタクシーの電動アシストシステムの充電
- ・ 太陽電池を取り付けるために、ペロタクシーの屋根部分の改良
- ・ 地域や企業の方々との交流を通じて、研究室の研究テーマでもある太陽電池のアピール
- ・ ソーラーペロタクシーを彦根市内で走行

### ★日程★

- 5月：近江楽座の参加、メンバー募集
- 6月：活動計画の会議
- 7月：ソーラーペロタクシーの設計
- 8月：部品の発注
- 9月：ソーラーペロタクシーの組み立て開始
- 10月：ソーラーペロタクシー完成

### ★環境ビジネスメッセ★（11/5～11/7）



長浜ドームで開催された「びわ湖環境ビジネスメッセ2008」に参加し、ペロタクシ

ーに太陽電池パネルを取り付けた「ソーラーベロタクシー」の完成車両を出展しました。

完成したソーラーベロタクシーのPR活動のために、長浜ドームのドーム前広場にて車両を展示し、試乗会を行いました。

ソーラーベロタクシーはベロタクシーに太陽電池パネル、コントローラー（充放電制御）、接続部品を取り付けることにより製作しました。製作の際には太陽電池パネルの選定に苦労しました。ソーラーベロタクシーは太陽電池から得られた電気をバッテリーに充電し、その電気をベロタクシーの電動アシストシステムに使用しています。

ソーラーベロタクシーにはメッセに来られた会社員の方々や、親子連れ、学生の方々が試乗され、車両について説明させて頂く事ができました。

### ★NEW EARTH 2008★（11/26～11/28）



インテックス大阪で開催された「ニューアース2008」に参加し、ベロタクシーに太陽電池パネルを取り付けた「ソーラーベロタクシー」の完成車両を出展しました。

今回、完成したソーラーベロタクシーのPR活動のために会場内ブース（NPO 法人五環生活）にて車両の展示を行いました。ソーラーベロタクシーについて会場に来られた来場者の方々に説明させて頂く事ができました。

### ★長浜エコエコ大作戦★（12/13～12/14）



長浜商店街の「まち家横町」内特設場にてソーラーベロタクシー（ソーラーハンター仕様）の試乗会を行いました。

ソーラーハンターのメンバーで考えたデザイン図を基にしたラッピングシールを取り付けた新ソーラーベロタクシーのお披露目です。

ソーラーハンター仕様ラッピングシールを取り付けることで、近江楽座の活動であり、太陽電池を取り付けているソーラーベロタクシーであることが外観から見て分かるようにしました。彦根市内を走行する際には、ベロタクシーの動く広告塔としての利点を活かしてPR活動ができます。

#### ★ソーラーベロタクシーラッピング★

「キャッチフレーズ：太陽からの贈り物・ソーラーエネルギー」

太陽電池は太陽から地球に降り注いでいる太陽光（ソーラーエネルギー）を利用し、電気エネルギーを作り出すことができるため発電用の燃料が必要ありません。そのため、太陽電池は発電する際に二酸化炭素が発生しないので、環境にやさしいクリーンなエネルギーデバイスです。

#### ★地域への貢献★

イベント・展示会に参加させていただく中で、多くの人と触れ合う機会がありました。その中で、『このベロタクシーには太陽電池がついています。』と説明するととても関心をもって頂けました。みなさん太陽電池は環境によいということを知っておられ、どんどん太陽電池が普及すればいいのにねとの意見もあり、太陽電池のPRをすることができたと思います。しかし、地域全体の中ではまだ僅かな規模でしかないため地域活性化への貢献には至りませんでした。

#### ★課題と今後の展望★

課題といたしまして、発注先から品物が届かないことや太陽電池が届くのに時間がかかったりと大幅にソーラーベロタクシーの作製に時間がかかってしまったこともありスケジュール管理がうまくできませんでした。また、協力団体の五環生活さんの開催するイベントへの参加だけしかPR活動を行えなかったことがあり、まかせきりで受け身な活動が主になり、ソーラーハンターとしての自主的なPR活動が行えなかったことが挙げられます。私たちは太陽電池を多くの方に身近に感じていただけることを目標に掲げています。今後の展開といたしまして、自分達からの情報の発信に関して工夫を行い、多くの人に太陽電池への関心を持って頂く活動を行わなければならないと感じ、また、もっと周りの地域の人や企業との繋がりを持てるように活動を行なうことが必要であると思いました。

## プロジェクト目的

地域の資源循環型社会形成のためのエネルギー環境教育を菜の花バイオディーゼル燃料に特化して実施し、地域住民のエネルギーと環境についての意識を高め、資源循環の流れが地域に根ざすよう活動を続けることを目的としている。

## プロジェクト内容

①高校生に対するエネルギー教育講座開講

②地域の方々にエネルギーに興味を持ってもらい、理解を深めてもらう

コトナリエ ⇒ 自主制作した足こぎ発電機を設置し、イルミネーションを点灯させる体験型ブースの設置

湖風祭 ⇒ イルミネーションを点灯させる足こぎ発電を体験してもらう  
菜の花畑で採れた菜種油を使って揚げた天ぷらを振る舞った

③休耕田での菜の花栽培

## 今後の展望

今後は、畑で採れた菜種を播種の際に使用して、安定した収穫量を得られるようにより一層努力するとともに、地域の方々との交流をもっと増やしていきたい。

具体的には、エネルギー環境教育を、地元小学校などに出前ができるような仕組み作りを考えていきたい。

## 本年度成果

4月～5月 休耕田での菜の花開花

6月～7月 菜種収穫

7月上旬 コトナリエで設置する足こぎ発電機の自主制作開始

8月上旬 高校生を対象とした燃料製作実習（高大連携）

8月中 コトナリエにて足こぎ発電機の体験型ブースの設置

10月上旬 菜の花畑土起こし、播種

11月上旬 湖風祭にて足こぎ発電機の体験型ブースの設置

菜の花畑で採れた菜種油を使って揚げた天ぷらの無料配布

12月上旬 休耕田をお借りしている農家の方々と天ぷら会

## 高大連携

エネルギーについて  
興味を持ってもらえ  
ました！



## コトナリエ

足こぎ発電機を自主制作し、体験型ブースを設置しました！！



## 菜の花栽培

地域の方々の協力により、多くの花が実り、  
たくさんの油が取れました！！



## 湖風祭

足こぎ発電機を  
体験して頂いた方々に、  
天ぷらを振る舞いました！！

# 9

## 菜の花エネルギー

### 菜の花エネルギー

代表者名:井川達朗(工学研究科)

指導教員:山根浩二・河崎澄(工学部)

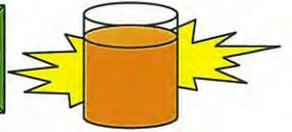


私たちは、資源循環型地域の実現を目標に、「菜の花バイオディーゼル燃料」を用いたエネルギー環境教育に取り組んでいます。これまで、廃食用油の回収会や、菜種油の家庭での利用促進、それらの廃食用油の燃料化などを実施してきました。2008年度は、昨年度に引き続き、湖風祭や小中高等学校におけるエネルギー教育講座の開催や、湖東町のイルミネーションイベント「コトナリエ」への燃料提供などを行いました。また、昨年度から取り組んでいる休耕田での菜の花栽培では、地域住民らに菜種油の搾取と利用、廃食用油の燃料化など一連のサイクルを体感してもらいながら、エネルギーに対する理解の向上を目指しました。

# 廃食用油, 菜種油から バイオディーゼル燃料を作ろう!



**急募! 石油に代わる新燃料!!**



## 石油の短所

- いつかなくなってしまう
- 燃やすと地球温暖化の原因になる二酸化炭素が増加する
- 日本で使われる石油は西アジアなどからの輸出に頼っている
- 原油価格が世界的に高くなっている。(右の図)



**何年経ってもなくならない, 二酸化炭素も増えない,  
しかも日本で作れる燃料ってないの?**



**廃食用油, 菜種油が車の燃料に!?**



食用油や廃食用油を, そのまま車の燃料にすることはできないの?  
できません. そのままでは, エンジンの中でうまく燃えないのです.



## バイオディーゼル燃料

食用油, 廃食用油を簡単な化学変化によって燃えやすく, 車の燃料として使えるようにしたもの。(略してBDFと言う)

- いま走っているディーゼル車にそのまま使えます。(エンジンの改造不要)
- 植物からできているから, 石油がなくなっても大丈夫.
- 日本でも菜の花を栽培したり, 家庭からでる廃食用油を集めて, バイオディーゼル燃料を作ることができます.
- 燃やしてでてくる二酸化炭素は, バイオディーゼル燃料のもとである植物が光合成で使うので増加しない。(カーボンニュートラルと言う)

**みんなで広げようバイオディーゼルの輪!!**

## 実際に使われている例

- ヨーロッパ・アメリカではすでにディーゼル乗用車の燃料として使われている
- 京都府・滋賀県などの一部の都市で, ゴミの日地域に廃食用油を集めてバイオディーゼル燃料を作り, バスやゴミ収集車の燃料の一部として使っている

## 知って得する豆知識!!

日本ではディーゼル車の台数は年々減っています. その理由はすす! バスやトラックからでる黒い煙です. バイオディーゼル燃料にはすすを大幅に減らす効果もあります!! バイオディーゼル燃料が普及しているヨーロッパやアメリカなどでは①燃費が良い, ②二酸化炭素が増えないという理由で普通乗用車を中心にディーゼル車が増えています. 日本は時代遅れ?

# 10

## 「もったいない帳」を用いた スローライフプロジェクト もったいないプロジェクト

代表者名:中小田すばる(環境科学部)

指導教員:近藤隆二郎(環境科学部)



私たちの日々の生活にあふれる“もったいない”。私たちは、環境家計簿や彦根市が提唱する環境チェックシートに代わり、誰もがより簡単に取り組むことができる「もったいない帳」を用いて、環境負荷の低い生活環境の形成を目指して活動しました。彦根城などの歴史的資源や琵琶湖などの自然環境、彦根市のリサイクル状況などに対する市民の日々の“もったいない”を調査・分析することにより、彦根市の地域特性を活かした、彦根市ならではのエコライフスタイルを提唱しました。こうした地域特性に応じた生活の見直しの積み重ねにより、新たな環境文化を創成し、将来的な視点での地域活性化へとつなげていきます。



## 趣旨

近年地球環境問題が世界的な主要問題として挙げられ、家庭生活での環境負荷の削減も求められるようになってきました。

家庭単位の環境負荷を低減するための取り組みとして「**環境家計簿**」が代表としてあげられます。しかし「**環境家計簿**」は一般的にめんどくさいと思われがちであり、なかなか多くの人に組みんでもらいにくいのが現状です。

そこで、「**誰にでも簡単に組みんでもらいやすい生活行動の環境負荷を減らすシステムを作ろう!**」と思って考案したのがこの「**もったいない帳**」です。

## もったいない帳の概要

そんな中で考案したこの「もったいない帳」は、

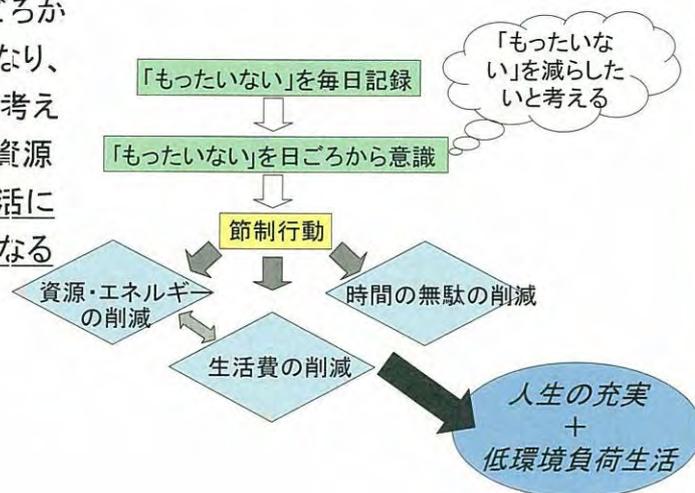
○毎日「もったいない」と思ったことをメモしていただく。

という単純なものになっています。



「もったいない帳」のイメージモデル

このメモが習慣になることで、日ごろから「もったいない」を意識するようになり、生活の無駄に気を使うようになっていきます。ゆくゆくはエネルギーや資源の浪費を抑え、環境負荷の低い生活につながり、経済的にも負担が少なくなることが期待できます。





## あいがちだった“もったいない”

2008年8月～9月にかけてのべ97名に「もったいない帳」の記録をお願いし、625の“もったいない”が記録されました。あなたもこんなことはありませんでしたか？

### ○電気

- ・電気をつけたままうたた寝をした
- ・誰もいない部屋の電気がついてた
- ・トイレの電気がつきっぱなし
- ・冷房が効きすぎて寒い
- ・クーラーつけたけど扇風機でよかった
- ・家族が同じ番組を別のテレビで見てる
- ・夜遅くまでオリンピックを見てた
- ・見てないのにテレビがついてる
- ・パソコンとテレビが同時についている
- ・昼休みにパソコンの電源を切らなかった

### ○食べ物

- ・食材を腐らせてしまった
- ・外食したけど多くて残してしまった
- ・間食しすぎた
- ・畑で採れた野菜を使いきれずに処分した

### ○お金

- ・安売りしてるからって買いすぎた
- ・いらぬものを買ってしまった
- ・水筒をもっていけばいいのに自動販売機でお茶を買った

### ○ガソリン

- ・道を間違えた
- ・空調を効かせるためにアイドリングした
- ・すぐ近くなのに車でいった
- ・買い忘れがあって同じところにもう一度行った

### ○紙

- ・印刷ミスをした
- ・毎朝送られてくるチラシが無駄
- ・両面印刷をしなかった

### ○ゴミ

- ・マイバックを忘れて店でレジ袋を買った
- ・割りばしを使ってしまった
- ・おみやげが過包装

### ○水

- ・歯みがきの間水を止めなかった
- ・お風呂の残り湯を洗濯に使いなかった
- ・水やりをした後に雨が降ってきた

### ○エネルギー

- ・お風呂に家族が続けて入らなかった
- ・お風呂を沸かしたことを忘れてて沸かしなおした
- ・ポットのお湯が沸きっぱなしなのがもったいない

### ○時間・機会

- ・休みの日に何もせずだらだら過ごした
- ・忘れ物をして取りに帰った
- ・新聞を取ってるのに忙しくて読めない

### ○その他

- ・流行を過ぎた服を着れない
- ・まだ使えるものを捨てた



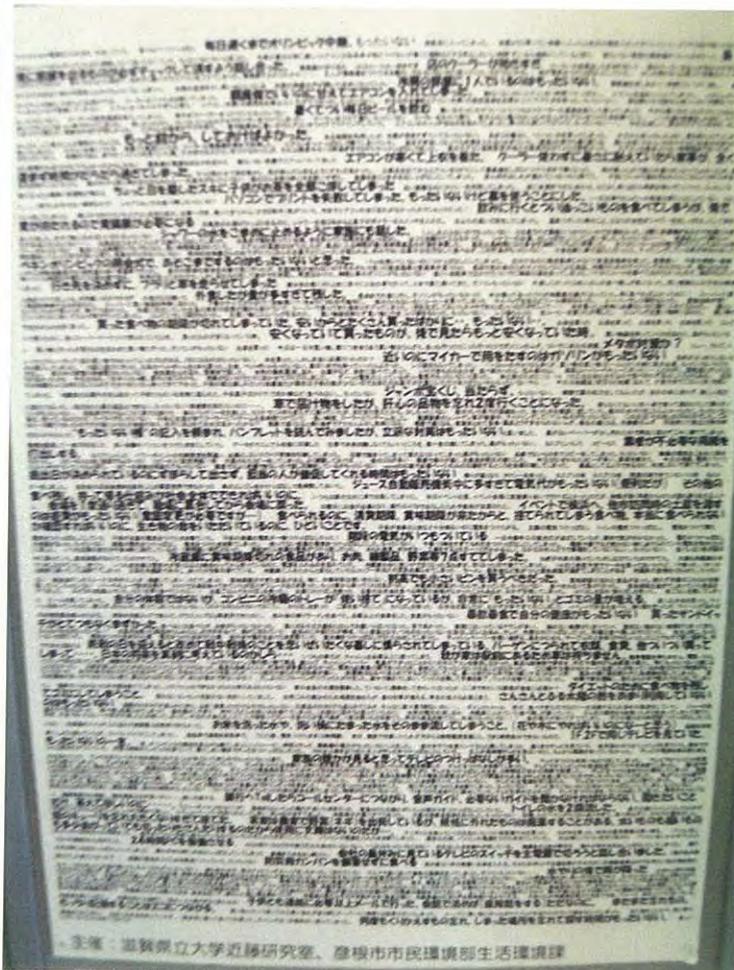
## 振り返り

### 地域への貢献について

実際には地域へ還元するところまでプロジェクトが進まず、実際に記録した人と、プレスリリース見たか、展示イベントに来た人しか「もったいない帳」を伝えることができませんでした。



### 課題と今後の展望



今年度は実質プロジェクトとして機能しておらず、あくまで研究の都合のいい部分だけを利用したにすぎません。プロジェクトとして機能させるにはきちんと一緒に考えられるメンバーを集める必要があります。また、活動全体が指導教員の伝手に頼りっぱなしであり、指導教員が考えている企画をそのままやっているだけであり、モチベーションも持てていませんでした。活動形態はどうあれ、メンバーたちで活動を考え、広げることが魅力的な地域貢献活動の第一歩と考えられます。

←425のもったいないパネル

# 11

## Let's複合 廃棄物バスターズ

代表者名:田中良祐(工学研究科)

指導教員:徳満勝久(工学部)

私たちは、一般の家庭から排出されるプラスチック廃棄物95%でできたリサイクル・プランターを製造し、その商品化に向けての研究や普及活動に取り組んでいます。2007年度に、量販店でのプランター販売という目標を達成し、今年度は、活動の集大成である「滋賀県発プラスチック系廃棄物完全循環システムの構築」に向けて、これまでの県外産に代わる県内のプラスチック廃棄物を原料にしたプランターを製作しました。また、小学校への園芸用プランターとしてのリサイクル・プランターの配布や環境出張講座などを通して、環境問題に対する意識を高めました。



# Let's 複合 廃棄物バスターズ

## 前年までの活動と課題

廃棄物バスターズ(滋賀県立大学工学部)は、約5年にわたり廃棄プラスチックのリサイクルについて研究開発を進めてきた。廃プラリサイクル技術の開発に成功し、それを地域貢献というテーマに基づきプランターという形にしてから、3年。さらに、昨年はついに商品化することに成功した。しかしながら、それまでは“広島産の廃プラ” (分別/洗浄程度良好品) を用いており、「彦根の廃プラ」を用いることが課題の1つであった。

## 彦根のプランター完成！！



広島産の廃プラ原料  
(リサイクルペレット)



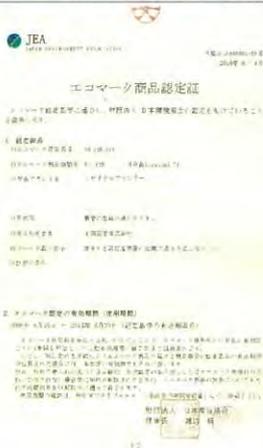
彦根市清掃センター  
&(株)エコパレット滋賀 の協力によって…  
&上西産業(株)



彦根産の廃プラを用いてのプランター作成に成功！！

そして、今年度…

彦根市清掃センター, (株)滋賀パレット, 上西産業(株)との協力により「彦根の廃プラ」を用いたリサイクルプランターの製品化に成功することができた！  
また、JEAエコマーク商品, 滋賀県リサクル製品としての認定も取得できた。  
現在、県内のホームセンター及び楽天市場等のwebにても発売中である。



認定書



再生材料を使用  
再生プラスチック70%以上  
エコマーク認定番号  
第08128013号

エコマーク

「エコマークは、環境保全に役立つと認められた商品に付けられ、“環境にやさしい暮らし”を願う人たちが、商品を選択しやすくなることを目的としています。厳しい審査基準をクリアした商品にだけ付けられる環境のブランドマークです」



県内のホームセンターで販売中！！

# 彦根市内での活動

## HIKONEキレイキャンペーン隊

「地域貢献」ということで、前年度に引き続きHIKONEキレイキャンペーン隊に参加してゴミの清掃活動を行った。今年度ではプランターを用いての美化活動は行えなかったが、その代わりにイベントでのゴミ箱を設置してのゴミの分別啓発活動を行った。現在、彦根市清掃センターさんでの手選別によってプランターを成型するのに必要な廃プラを得ているが、彦根市の分別水準の向上を目指したいと考えている。



みんなで集合写真

分別しよう！！



ゆるキャラ祭りにも参加

## 小学校にて環境クイズ！！

プランターの普及活動に加えて、次世代の社会を担う小学生に対して「環境教育」を行った。単に授業をするだけでは、面白くないためクイズ形式で環境問題を教えた。小学生の関心を惹くような形に仕上げるまでは苦労したが、反応はとてもよかった。また、私たちが思っている以上に意識の高い生徒たちが多くて驚かされることもあった。



これから環境クイズをします！  
点数が一番とったチームが優勝です！  
優勝チームには豪華賞品があるかも！！！！？  
それでは始めます！

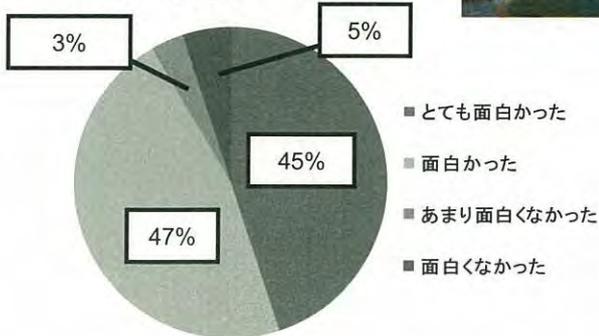


某クイズ番組のパロディです

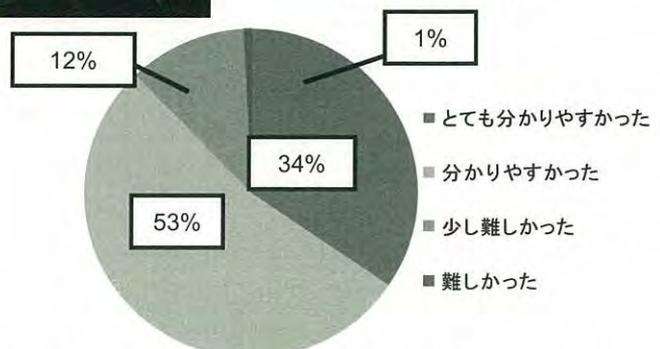
クイズは班ごとのチーム戦です



校門前で記念撮影



環境クイズはおもしろかったですか



環境クイズは分かりやすかったですか

# 昨年度のリベンジを果たす！！

## 全国大学生環境活動コンテスト(ecocon)2008

2008年12月、全国大学生環境活動コンテスト(通称エココン)に出場した。このコンテストには昨年度に出場し、1票差で予選敗退になったという悔しい思い出がある。

我々2008年度廃棄物バスターズはこの雪辱を晴らすため、法被と気合をもまとして再び東京の地に赴いた。結果、今回は1票差で予選を突破し、さらには決勝では準グランプリを得るという快挙をなすことができた！！これも、今年1年間の廃棄物バスターズの成長の証であるだろう。

また、多くの環境団体の活動に触れることによって、良い刺激を得ることができたのも貴重な体験であった。今後も、エココンを含めた様々な環境イベントにも参加していきたいと思う。



入賞チームで記念撮影!!

バスターズの名前がスクリーンに!!



賞状

準グランプリ

廃棄物バスターズ

貴団体の活動は第6回全国大学生環境活動コンテストにおいて多くの選考委員ならびに参加者から素晴らしい活動であると評されました。これからも一層情熱を傾け活動を継続されることを期待します。

平成二十年十二月二十三日  
全国大学生環境活動コンテスト実行委員会  
実行委員長 岡島 成行

準GPの賞状

## 今後の展望

### どんどん広がる廃プラリサイクル！！

- “廃プラの地産地消”をモットーに、彦根市を「廃プラ循環のモデル」地区として活性化し、今後県内他自治体(まずは、野洲市)等に活動を広げていく。
- 継続的な小学校への“出張環境教育”を実施。“知って欲しい環境問題”の内容を精査し、今後の教育ツールとしての充実を図る。
- “リサイクルプランター”以外の商品への水平展開。新しい商品としての可能性の探索。(“中水”貯留用大型水槽?)
- 各種環境コンペへの積極的参加。「廃プラの循環ビジネスモデル」の一例としてH21年度は国際コンペSIFEに挑戦する

## 目指すは廃プラ完全循環社会！！



# 12

## いかして民家

### 古民家楽座

代表者名:仁科美香(人間文化学部)

指導教員:石川慎治・濱崎一志、市川秀之(人間文化学部)

私たちは、彦根市及び近江八幡市を中心に、古民家などの地域の伝統的建造物を再評価すると共に、それらを活用した地域活性化の手法を探ることを目的として活動しています。2008年度は、昨年に引き続き、存続の危機に瀕している伝統的建造物の実測調査基礎資料の収集や、伝統的建造物の整備に取り組みました。また、伝統的建造物の公開イベントの実施等通じて、より多くの人々に、「古民家の再生」について理解を深めてもらいたいと思っています。さらに、それらのイベント参加者や地域住民に対する意識調査など踏まえ、住民参加による伝統建造物の活用について模索していきます。



# 古民家楽座

——— 湖東地域を中心とした古民家の再生

## 活動目的

存続の危機に瀕している伝統的な建造物の活用を通じて、地域の活性化を図る。

私たちが考える地域活性化とは、人を集めてにぎやかで華やかな商店街のような街をつくることではありません。閑静ではあるが、人が住まなくなり、廃れていっている町で、そこにとどまり住み続けてほしい。その街並みを持続可能な形で残し、よみがえらせる。そういったことによる活性化を目指しています。

再生を試みる民家は、重要文化財や指定文化財といった立派な文化財ではありません。行政も手を差し伸べてくれない普通の民家の再生が目的です。地域文化財としてその町を構成し、その町並みの雰囲気を守り伝えてきてくれた民家を対象としています。



## 金堂まち探検

“次の世代を担う子供たちに自分の住むまちを好きになってもらいたい”、“自分たちの住むまちの魅力にもう一度気付いてほしい”という願いのもと、行われている金堂まち探検。NPO法人金堂まちなみ保存会が中心となり、8/23に実施。立命館大学、古民家楽座のメンバーが学生スタッフとして参加しました。

当日はあいにくの雨でしたが、6人の子供たちが参加しました。

今回のテーマは“お地蔵様”。2チームに分かれて、それぞれの地区が祀っているお地蔵様を、1つ1つ廻りました。探検のあとは、地蔵盆のとき、飾り付けに使う、面菓子を食べました。

探検で見たもの、感じたことをみんなで絵はがきにしました。写真や色紙を張り付けたり、クレヨンで絵を描いたりして自由に表現。子供たちの素晴らしい作品がたくさんできました。



## ぶらりまちかど美術館・博物館

9/23には五個荘のまち全体を博物館とした、ぶらりまちかど美術館・博物館が行われました。

地蔵盆の様子や金堂まち探検で子供たちが描いた絵はがきの展示を、昨年改修工事が終わった近江商人の本宅・旧中江富士郎邸で行いました。

この日は、普段は入場料が必要な資料館も無料で公開され、たくさんの人が訪れていました。



## 守山まち歩き

今年度は湖東地域以外にも活動範囲を広げました。

11/29に守山市でまち歩きイベントを行いました。守山は江戸時代、中山道の宿場町として栄えた街です。しかし近年、建築物や土地利用の変化が進み、伝統的な宿場町は姿を消しつつあります。そんな中、古民家や景観などの価値が見直されるようになり、この守山宿でも伝統的な町並みを保存しようという動きがあります。

当日は一般の方や学生など、約30名が参加しました。守山宿の伝統的な町家を数棟見学。参加された方から「普段見られない町家の中が見られてよかった。」という感想を頂きました。



## 辻番所

昨年度、公開イベントを行った旧磯島家、及び辻番所は実測調査を継続。今年度は足軽組屋敷と棕櫚の関係の調査や庭の実測を行いました。旧磯島邸、及び辻番所は彦根市に寄贈され、文化財として保存されることになりました。

### 今後の展望と課題

少子高齢化の流れの中で、空き民家が増加しています。こうした空き民家の保存と活用を通して、地域の活性化を図りたいと考えています。



# 13

## 近江中山道百彩プロジェクト

百彩

代表者名:松尾清(環境科学部)

指導教員:近藤隆二郎(環境科学部)



地域住民がそれぞれの家の軒先に赤いものを飾り、町の色付けを行う「百彩」。2005年度より、中山道宿場町に暮らす地域住民の街並みへの意識付けや、地域の主体性の確立などを目的として、彦根市高宮地区で継続して実施してきました。2008年度は、ややマンネリ化しつつある現状を打破するべく、メインとなる町の色付けに加え、写真展の開催などの新たな試みにチャレンジしました。また、同地区でのこれまでの実績や経験を活かしながら、新たに鳥居本地区での開催を企画し、点から線へと、中山道宿場町全体の地域活性化へとつなげる第一歩を踏み出しました。

# 「百彩 in 高宮」

日時 2008年8月9・10日

場所 彦根市高宮町



## 活動内容

「百彩」とは、「町並みに赤い晴れ着を着せてみましょう！」と、夏祭りの雰囲気壊さぬように、家の中にある様々な「赤い物」を自由に選んで軒先に飾っていただく景観イベントで、2005年から毎年夏に行われています。

全体としての「赤」は統一しながらも、部分としては創造的な赤い物を自由に飾るという、創発的なまちづくりへのきっかけになることを目的としています。「赤」は「べんがら」や「赤鬼」を由来としています。高宮に住んでいる方々と学生が協力して、街道沿いの町並みを赤く飾り付けてきました。

また、赤く飾るだけでなく、毎年新たな企画を行っています。今年は地域住民の声をきっかけに、「百彩」の対象範囲を広げること、テーマをもって飾り付けを行うことに挑戦しました。その結果、飾り付けに参加して下さった世帯数が、去年57件から119件と大きく増えることとなりました。また、赤い動物を町並み全体に飾ったところ、好評をいただき、街全体が一つのテーマをもって飾り付けをするという形もあると示せたと思います。

## 地域貢献

4年間活動を継続してきたことで、「百彩」というイベントが、ずいぶん地域に根ざしてきたと思います。本年の対象地域、参加世帯数を約2倍にすることができたことは、そのあらわれだと思います。他にも、対外認知度の上昇、町内のコミュニティのさらなる拡大という成果もあります。

写真集の作成などで4年間をふりかえって、飾り方や飾る物に工夫をして、家ごとの個性を出そうとしている参加者がいることがわかったのは、町並みを装うことに対しての高い意識を持ってもらうことに成功したということの何よりの証拠だと思え、うれしい限りです。

また今年度で大きい成果として挙げられるのは、空き家の飾り付けを自発的にやってくれるなど、積極的に街全体を飾り付けようとしてくれる地域の住民が現れたことだと思う。また、2005年からお世話になっている、高宮のキーパーソンに自分たちのイベントであるという誇りが産まれていることも、大事な点です。

# 「とりいもと宿場まつり with 百彩」

日時 2008年10月25・26日

場所 彦根市鳥居本町

## 活動内容

今年度の活動の中で大きく進展を見せたのが、「とりいもと宿場まつり」との共同開催である。

きっかけとなったのは、高宮で毎年行われる「百彩」に影響を受けた方の、「(赤玉神教丸で有名な)有川製菓さんの創業350周年のお祝いに合わせて私たちのまちでも百彩をしたい」という一言。その一言で、少数数ではあるが地域の有志が集まり何度も実行委員会で話し合いを行い、一から作り上げ誕生したまったく新しい鳥居本独自のお祭りである。この中での「百彩」の役割は、本陣跡を中心とする街道1kmの区間を赤く染めることでお祭りのお祝いムードを作り、人の行き来を生み出すことである。私たち学生が中心になってお祭り当日の朝、地域の方々と協力して電柱や空き家へ赤い飾りを行った。事前に実行委員メンバーが各家々に協力を呼びかけていた成果も出て、徐々に住民の方々による飾りつけも増え、見事に街道沿いが赤く染まった。その街道のあちらこちらで、有川製菓さんでの公開展示や講師を招いての講演会を始め、実行委員メンバーがアイデアと力を出し合って行った惣菜市や野菜市、古民家でのおしゃれな喫茶店営業、演奏会など様々な催し物が行われ、雨で天気が悪かったにもかかわらずたくさんの人でにぎわい、鳥居本宿のまち歩きを楽しんでいただくことができた。

## 地域貢献

「とりいもと宿場まつり」の開催は、「百彩」が当初の目的どおり、お祭りの雰囲気作りの中心となり、大きな成果を生み出すことができたと思う。

まずこの祭りを作り上げていく過程で、話し合いを重ねるごとに実行委員メンバーの地域への愛着が増し、さらに祭りの実現によって自信が生まれた。初めての試みであったが故に協力依頼や広報を自分たちの足やクチコミで行わないといけない、祭りの準備を一からしないといけない、など経験したことのないたくさんの壁を乗り越えなければならなかったが、「今回は初めてなんだから100%成功しなくてもいい」と気負わず楽しむことができたので無事に祭りの日を迎えることができた。祭りの準備と実行を通して生まれた地域への愛着心や自信が今後の展開につながっていくと期待できる。

また実行委員だけでなく「百彩」に協力してくださった方やまち歩きを楽しむ人が、歴史ある中山道宿場町としての姿を見直すきっかけとなった。「百彩」の赤のイメージはとてもインパクトがあり、道行く人々にとってきっと忘れられない景観となったはず。また、昔のような人の往来を取り戻すまではいかなくとも、街道沿いを多くの人々が歩く姿をみると、まちに活気が生まれたようで今後中山道宿場町としての地域おこしを行うきっかけになりうると期待できる。



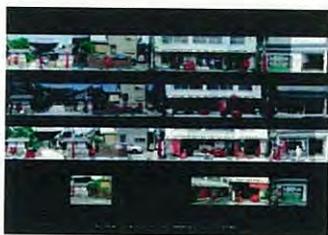
# 「百彩写真集の作成」

「百彩」の記録と、さらなる創発への胎動となることを

これまでに続けられてきた「百彩」の4年間の軌跡として、高宮大鳥居から無賃橋までの飾り付けの様子を納めた写真集を作成しました。使用した写真は、2005年8月14日、2006年8月13日、2007年8月11日、2008年8月10日の写真を利用している。1年目からイベントの対象となっている77件の外観が移されており、表紙裏表紙込みで24ページの写真集を作成しました。

この写真集は、高宮町の各家庭に配ることで、「百彩」の歴史をふりかえっていただくと共に、「百彩」の楽しさ・面白さを内外に伝えることを意図しており、各宿場町などにもPRとして配ることも考えています。

## 百彩写真集から一部抜粋



## 今後の展望と課題

### ①「百彩」への参加手法を工夫し、地域住民主体へ

高宮で行われている「百彩」は学生主体のイベントとして行っているが、今後は地域住民主体へと移行していくのが望ましいと考えている。なぜなら、イベントの継続性を考えた場合、学生主体では「イベントに関わる学生がいなくなったらどうするのか？」という課題を常に持ち続けなければならないからである。

無理やりに押し付けるのではなく、まずは地域住民の方々が主体的に参加しやすいような企画（自宅の飾りつけだけでなく空き家での展示を募集するなど）を行い、よりイベントになじみやすいよう工夫する必要がある。

### ②「第2・第3のとりいもと」が生まれる！？

「百彩」の発祥の地を高宮として、今年鳥居本へとつながったように、「赤いものを飾る」という手法を中山道沿いの他の地域へと、横へ横へと広めていくことができるのではないかと考えている。まずは高宮と鳥居本での活動を知ってもらうことから始めたい。「百彩」をそのまま真似るのではなく、その地域にあったアレンジを加えれば、なお面白い。

### ③地域の歴史的価値を再発見し、若い世代へ

とりいもと宿場まつりの実行委員のひとりが「自分たちの住んでいるところは、石田三成や和宮ゆかりの地なんだよ、と孫たちに話して聞かせるのがとても誇らしい」とおっしゃっていた。この方のお孫さんは祭りに合わせて石田三成の顔出し看板を作って家の玄関先に飾ってくれた。

今後は小さなお子さんたちの参加を促し、自分たちの住む地域には実は歴史的な価値があるのだということを若い世代へ語りついでいけるようなイベント（仮装行列など）を盛り込んでいきたい。

# 14

## 限界集落の村おこし

男鬼楽座

代表者名:古田修一郎(人間文化学部)

指導教員:野間直彦(環境科学部)・濱崎一志・石川慎治  
武田俊輔・市川秀之(人間文化学部)



現在、彦根市・多賀町周辺にある16の限界集落のうち、11集落が消滅の危機に瀕しています。私たちは、昭和40年代の面影を残す限界集落「彦根市男鬼地域」をフィールドに、これまで自然環境や地域文化財などの基礎的調査や、茅葺き民家の保存・活用のための活動に取り組んできました。5年目となった2008年度は、これまでの成果を活かして、屋根の一面の葺き替えを試みると共に、茅場の手入れなどを継続して行いました。また、新たに男鬼付近の限界集落にも活動範囲を拡げて、現況把握と問題点の整理を行いながら、限界集落のさらなる有効な活用方法について探りました。

# 男鬼楽座

山間集落の再生の可能性を探り、文化的景観資源の保存と活用を考える。

## 全国茅葺き民家保存ネットワーク協議会 第9回シンポジウム

6月28日・29日、福島県南会津郡下郷町で行われた、全国茅葺き保存ネットワーク協議会・第9回シンポジウムに参加しました。今年のシンポジウムの議題は“茅場”。茅場は茅葺き屋根の材料となる茅を得るための大切な場所で、かつては各地にたくさんありましたが、茅葺き屋根が姿を消していくと同時に、失われていきました。内容は茅場のもつ重要性から、茅の利用や茅場の生態系など様々で、改めて茅場の大切さを認識しました。

シンポジウム後は今日の宿泊地で、2日目の見学会の会場となる、大内宿に移動です。茅葺き民家が並ぶ風景に圧倒されました。夜には、夕食を兼ねた情報交換会が行われました。2日目は見学会が行われました。大内宿では茅葺き職人さんの指導を受けながら、地元の人々が協力して茅葺きを行っているそうです。廃校となった分校の校舎を使って、若い世代に茅葺きの技術を伝えようという試みも行われています。



## 茅運び

屋根の葺き材となる茅を、多賀町保月(ほうづき)の方が茅を譲ってくださることになったので、7月6日に茅運びを行いました。2tトラック三往復、軽トラック一往復分の茅を頂きました。



## 男鬼葺き替え

7月19日から21日の3日間、昨年差し茅を行った、男鬼町・大久保正一邸にて、屋根の葺き替えを行いました。今年  
は、大内宿のシンポジウムで交流のあった茅葺き職人の方も応援に駆けつけてくださり、総勢5人の茅葺き職人さ  
んと共に葺き替え作業に臨みました。20日はイベントとして行い、一般の方や学生さんにも参加していただきま  
した。この三日間で、のべ70人集まり、無事片面の下部を葺き替えることができました。



## 岐阜大学古民家再生プロジェクトとの交流



5月31日、6月1日に岐阜県大垣市上石津町にある緑の村公園に移築されている茅葺き民家の差し茅体験に参加しました。今年から本格的に楽座に参加したメンバーは、このイベントで、茅の縛り方や葺き方を学びました。夜は、この茅葺き民家で行われた交流会に参加して、地域の方の手料理をごちそうになりました。

## 茅刈り



11月22日、多賀町桃原で、来年の屋根の葺き替えに使うための茅を刈るイベントを行いました。当日は学内の11名の参加者と共にたくさんの茅の束を作ることができました。TIPの学生さんも参加して下さり、他チームとの交流も深まりました。また、イベント後、京都府南丹市美山で行われたカヤカルという茅刈りイベントに参加しました。そこで得た知識を活かし、12月には多賀町保月で5日に渡り茅刈りを行いました。ここで得た茅は来年の葺き替えイベントに使用します。

## 今後の展望

### 男鬼通信

NO.3 2008 春

～お久しぶりです。男鬼楽座です～  
 ここには11年ぶりですが活動することになりました。1昨年には差し茅イベントと茅刈りでしたが、今年はいよいよ屋根の片側の葺き替えを試みたいと考えております。その準備もかねて、5月31日、6月1日に岐阜県大垣市上石津町にある緑の村公園に移築されている茅葺き民家の差し茅体験に参加してきました。

～上石津町の差し茅体験～

○1日目



こちらが、差し茅を体験させて頂いた民家です。差し茅とは、個人で屋根の応急処置として、茅を葺き直す作業のことです。まず、通んできた茅を、1束1束と切りそろえます。1束1束とまとめるのですが、コブをつかめば、簡単にできるようになります。

次に、屋根の盛っている部分の茅を掻きまわす。それから切りそろえた茅を葺き直していきます。このとき濡れた茅でまだ挿入しそうなものもいっしょに敷いていきます。最後にほみ出た部分を切ったり、たたき上げたりして、屋根の形を整えていきます。

岐阜県立大学 人間文化学部 環境研究室  
 〒22-8523 岐阜県多賀町八坂町 2000  
 TEL: 0749-22-0111 FAX: 0749-22-0478  
 E-mail: hamazaki-kou@ecite.co.jp



雨が降りやみたら、あんなに沢山の天気で、思うように作業が進みませんが、人が多くなく、無事に1日目の作業を終えることができました！

夜は、茅葺き職人さんや岐阜大学の学生さん、そして地元の方々と交流し、貴重なご意見を聞くことができました。夕飯には、お隣の民家を使ったおにぎりや、地元の方の手作りのおたけを美味しく頂きました！この日は差し茅中の民家に宿泊させて頂きました。茅葺き屋根を修繕するためには、宿してやることも大切です。



というように、カマで刈るの作業も、これが結構、大変なのです！！



初級といえども、上石津の夜は冷えます。田舎の夜は静かです。

今年度も昨年に引き続き、学外への情報発信として男鬼通信を作成しました。春号では、08年の活動スタートとなった岐阜県で行われた差し茅イベントの活動報告と、夏に行われるイベントの告知も兼ね男鬼の現状を報告しました。この春号は、昨年のイベントに参加して下さった方に郵送し、また6月末に参加した全国茅葺きシンポジウムで、各地から来られた茅葺き関係者の方に配りました。夏号では、6月末の全国茅葺きシンポジウムで学んだことと、7月に男鬼で行われた葺き替えイベントの報告をしました。昨年からはじめたこの男鬼通信を継続させて、学内・学外に関わらず広範囲に発信し、これからもより多くの方に男鬼を知ってもらいたいと思います。08年度は、男鬼町だけに留まらず、全国に広がる茅葺き仲間と交流し、イベントに参加してきました。そのイベントで知り合った地域の方の笑顔を見ることができ、私達自身の活動にとっても、とても良い経験になりました。私達のこれからの課題は、情報を発信して多くの方に男鬼を知ってもらうこと。そして、男鬼のように限界集落が増えつつある多賀町の山村集落にも調査の幅を広げ、何か一つでも、得られるものを吸収していきたいです。

# 15

## とよさと快蔵プロジェクト とよさと快蔵プロジェクト

代表者名:横山耕蔵(環境科学部)

指導教員:迫田正美(環境科学部)

私たちは、高齢化や若者の町外への流出などに悩む豊郷町を楽しく活気ある町へと蘇らせることを目的に、古民家などの改修や、イベントの実施などに取り組んでいます。これまで、利用されなくなった町内の7件の古民家や空き蔵をコミュニティハウスやバーへ改修し、活用してきました。5年目を迎える2008年度は、個々の物件ではなく、町内でも比較的古い町並みの残る愛知神社付近の“通り”を対象として、ハード面、ソフト面の整備を行う長期計画に着手しました。古民家などを利用したカフェやギャラリーなどを設置し、それらを通して町内外の人々と交流しながら、豊郷町をより魅力的な町へと変貌させます。



## 快蔵フローチャート

ひとつのプロジェクトの始まりから終わりまで。さまざまな人たちが、どのようにプロジェクトに関っているか、簡単に紹介します。



調査

まずは舞台となる物件探し。まちづくり委員会が地元のネットワークを活かし、学生はまちあるきを行い、空き家情報を得ます。



交渉

実際に使わせてほしい家の持ち主に声をかけます。快蔵のこと、まちづくりのことを説明します。



物件調査

すぐに直せる物件なのか、大きな工事が必要なのか、物件の痛み具合をチェックします。実測して図面も作成。床下や柱も腐っていないかまでチェック。



利用法の検討

どうやって活用するのかをみんなで検討します。場所や家の特徴をふまえて利用法を考えます。みんなの意見を出し合い、試行錯誤。改修計画を図面にし、工期や施工手順などまで細かく計画します。必要な材料なども確認しておきます。

## とよさと快蔵プロジェクト

私たちは、高齢化や若者の町外への流出などに悩む豊郷町を楽しく活気ある町へと蘇らせることを目的に、古民家などの改修や、イベントの実施などに取り組んでいます。

### とよさと快蔵プロジェクトとは？

滋賀県犬上郡豊郷町。旧中仙道高宮宿と愛知川宿の間の宿として栄えた町です。この町には使われていない空き家が100件以上あります。風情ある町並みの広がる豊郷町において、それらは価値ある貴重な建物なのに、使われていないなんてもったいない！それがプロジェクト発足のきっかけとなりました。現在進行しているものも含め、いままで手がけた物件数は9件。地域のイベント参加だけでなく、自分たちで企画も行っています。

### シェアハウス

助成金などから得た予算を使い、空き家の改修を行います。この資金は必要な材料を買ったりすることに使われます。そして完成した物件はシェアハウスとして活用されるのです。シェアハウスの住人からもらう家賃収入を今後の改修費や光熱費・管理費として用いていくといった資金プールを作ることで、補助金がなくなった場合でもプロジェクト自体で運営していくことができるシステムになっています。

## 改修スタート



ここまでできて初めて、本格的に改修開始！改修の作業内容はさまざま。とりあえず勢いよく改修部分を解体することから始めます。改修が始まると、見えてなかった問題も出てきます。みんなで考えて、いざとなれば先輩やプロに助けをもらいながら少しずつ完成に近づいていきます。ときには近所のおばあちゃんから食べ物をもらうことも。そんなやさしさが私たちの元気になっています。



## オープンハウス



ここまでくるのに半年から一年。長い道のりを経て、ついに完成！このときの感動はひとしお。でもゆっくりしていい。オープンハウスの準備です。完成した家を一般公開。たくさんの人にお披露目です。改修写真のスライドショーをしたり、オープンイベントを行ったりと最後まで手作りです。



## コミュニティハウス

コミュニティハウスとは、簡単に言えば“地域の縁側”です。子どもからお年寄まで地域の人たちみんなが集まれる場所です。ここでは、おしゃべりしたり、ご飯を食べたり、カラムをしたり、何でも自由にできるフレキシブルなスペースです。また、コミュニティハウスは学生のシェアハウスの機能も併せ持った複合型ハウスで、まちと学生の交流の場にもなっています。

## Bar バー

地域コミュニティの創出を目指し、シェアハウスに住む学生が中心となって空き蔵を改修してできあがったBarです。学生が運営を行い、経営されています。ですので、お客さんにうまく対応できないこともあります。地域のお客さんたちから暖かく支えられながら今年で4年目を迎えます。お酒を飲みながらまちの人たちが交流するばかりでなく、まちの人と学生の交流の場ともなっています。

今年でプロジェクトは6年目

ハード面・ソフト面、双方を

より充実させていきます

## ゲストハウス

豊郷の魅力を伝えたい、タルタルーガで飲んだ後の泊まる場所が欲しい、将来性のある事業をしたい、といった要望から、ある蔵をゲストハウスとして現在改修進行中です。さらに地元の営農組合さんと連携して、宿泊農業体験といったプログラムも行えるようにすることを目標としています。これまで日帰りで訪れていた訪問者にも、もっと豊郷の魅力を知ってもらえる施設になる計画です。

## まちと学生とイベント

学生にとって直接多くのまちの人と触れ合える機会というのは、地域のイベントだったりします。春にはカロム大会、夏は夏祭り、秋にはコスモス畑でコスモスパンプキンフェスタなど、豊郷町では季節ごとにいろんなイベントが行われています。メンバーで参加し、まちの人と楽しい時間を過ごします。去年は、休耕田を使い、ビーチバレーや宝探しなどを行うどろんこ祭りという学生企画のイベントを実施しました。

## 今後の快蔵のめざすもの

プロジェクトも今年で6年目を迎えます。ゲストハウスの計画もその一環なのですが、これからは個々の物件ではなく、町内でも比較的古い町並みの残る愛知神社付近の“通り”を対象として、ハード面、ソフト面の整備を行う長期計画に着手します。古民家などを利用したカフェやギャラリーなどを設置し、それらを通して町内外の人々と交流しながら、豊郷町をより魅力的な町へと変貌させようというものです。

学生はまちにとってはよそものです。よそものわたしたちがまちにとって出来ることとは？これからも快蔵は進化を続けます！

とよさと快蔵プロジェクト

E-mail : [post-toyotoyo@hotmail.co.jp](mailto:post-toyotoyo@hotmail.co.jp)

Blog : <http://toyotoyo.wablog.com/>

# 16

## 湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための 移住などを支援する活動 —空き民家の調査・活用と都市農村交流事業の企画・実施

木之本楽座

代表者名:翠勇樹(人間文化学部)

指導教員:濱崎一志(人間文化学部)



現在、滋賀県湖北地域では、少子高齢化や過疎化による地域衰退に起因する空き家の増加や空き家の解体が進んでいます。一方、都市住民の間で田舎暮らしへの関心が高まりつつあるものの、そのきっかけづくりや情報発信などがまだ十分とは言えない状況にあります。2008年度は、昨年度に引き続き、北国街道木之本町の中山間地域において、地域資源や空き家調査を実施し、空き家情報のデータベース化を進めました。また、これらの空き民家を活用した田舎暮らし体験プログラムを企画・実施し、地域活性化へつなげることを目指しました。

代表者名：翠勇樹（人間文化学部）  
指導教員：濱崎一志（人間文化学部）

現在、滋賀県湖北地域では少子高齢化や過疎化により、空き民家の増加や解体が進んでいます。一方で、都市住民の間では田舎暮らしへの関心が高まっています。しかしながら、きっかけ作りや情報発信がまだ十分とは言えません。

そこで、木之本町杉野学区での地域資源や空き民家の調査を実施し、これらの地域資源や空き民家を活用した田舎暮らし体験プログラムを企画・実施し、地域活性化へつなげていきます。

## ◆現地調査

民家カルテ 調査日 / / 調査者	
No.	写真番号
所在地	
所有者	( 姓 ) 生年月日 / /
現住所	
家屋の状態	
空き家	有・無
建築年代	
建築種別	町家形式・農家形式・和風建築・洋風建築・他( )
改造レベル	平屋・中二階・高二階
2階壁面	5・4・3・2・1
1・2階壁面の差	白漆喰・土壁・黒壁・他( )
1階開口部	半開・他( )
2階開口部	出格子・格子( 細・中・荒・鉄 )・改造
1階開口部	有( 鉄・格子・虫籠・他 )・無
屋根	瓦・トタン・他( )
形式	野渡の盛り込め 有・無
屋根勾配	切妻・入母屋・寄棟 有・無
屋のしきみ	有( 段 )・無
配り	有・無
しころやね	有・無
棟出し	有・無
卯建	有・無
袖壁卯建	有・無
煙羽の盛り込め	有・無
梁の突出	有・無
妻飾り	有・無
千木	有・無
通りに対する屋根の向き	妻・平
1玄關の入り方	妻入り・平入り
1仏間の出	有・無
1ベンガラ着色	有・無
1セドグチ	有・無



空き民家がどれくらい存在するのか、また、空き民家がどの位置にあるのかを把握しました。さらに、左の民家カルテを用い、主屋の外観の特徴をまとめました。



木之本町杉野学区は、4つの集落が谷筋に沿って点在し、茅葺き民家も残っている、昔ながらの原風景を残している地域です。

余呉型（伊香型）と呼ばれる湖北地方独特の形式の古民家、ベンガラが塗られた民家で構成される統一性のある景観、川や山などの大自然に囲まれた生活環境など、多くの地域資源がこの地域には存在します。



## ◆ワークショップ

滋賀県は、都市と地方の交流居住・移住促進事業を進めており、滋賀県木之本地域集落機能再編促進協議会が中心となって進められました。次のページの宿泊体験プログラムは、この事業の一環でもあります。

この事業の中で、協議会メンバー以外の地元住民を交えたワークショップも行われ、参加させて頂きました。このワークショップは、地元住民と話し合いを進めることによって、地域の課題を洗い出し、将来に向かって目指すものと考えていくことを趣旨としています。



# ◆宿泊体験プログラムの実施

開催日時：平成 20 年 11 月 2～3 日  
 開催場所：木之本町杉野学区の 4 集落（金居原、杉野、杉本、音羽）  
 主催：滋賀県・滋賀県立大学（地域づくり教育研究センター  
 ・近江楽座 B プロジェクト）  
 共催：滋賀県木之本地域集落機能再編促進協議会  
 後援：木之本町、湖北移住交流支援研究会

このプログラムは、農村之地元住民と都市住民の交流を趣旨としていて、1泊2日の宿泊型でプログラムを実施しました。右のチラシなどで滋賀県近郊に広報をし、応募者を募りました。応募は京都府や大阪府や愛知県など滋賀県近郊の方から、千葉県や香川県など遠方の方からもありました。最終的に応募者は、予定の定員 15 名をはるかに超える 34 名集まり、急遽定員を増やし、18 名（男性 8 名、女性 10 名）の都市住民を招いてプログラムを行いました。



## 1 日目

1 日目はまず、金居原で集落散策をして、この日金居原の合歓の里で行われていたこすもすコンサートを見学しました。



そこから杉野へ移動し、総出の見学をしました。  
 その後は、地元住民と都市住民の意見交換会が行われました。



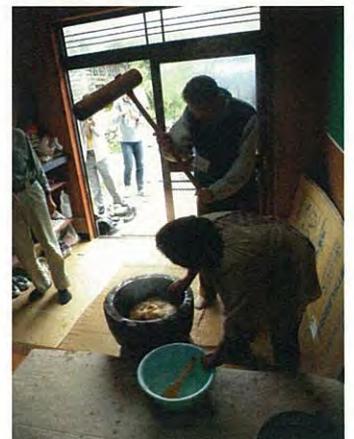
この意見交換会では、プログラムの参加者の方から、杉野学区での生活環境や空き民家の状況についての質問が多く出ました。  
 夕食は地産地消の食事ということで、地元で採れた野菜や山菜、お米を使った料理を楽しみました。

## 2日目

2日目は、早朝から炭窯の見学に行きました。この炭窯は現役で、今でもここで炭がつくられています。その後、杉野学区にある茅葺き民家の民宿で朝食を頂きました。



朝食後、杉本で集落散策を行いました。その中で、杉本の集落の中にある空き民家の内部を見学させてもらうこともできました。その後は、田舎暮らし体験ということで、餅つきと山芋（自然薯）掘りを体験しました。



最後に、昼食ということで音羽の川原でバーベキューを行いました。地元で採れた野菜、椎茸などをおいしく頂きました。



# 17

## 湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための 移住などを支援する活動 —古民家での田舎暮らし体験プログラムの企画、実施

長浜楽座

代表者名:福島志帆(人間文化学部)

指導教員:濱崎一志(人間文化学部)



長浜市中心市街地では、黒壁事業などにより商業や観光の活性化が進む一方で、居住人口の伸び悩みや高齢化の進展、空き家の増加、古民家の解体に伴う歴史的景観の喪失などが問題となっています。私たちは、古民家や水路網などの長浜の歴史的景観を構成する要素の保存や活用を進めながら、緩やかな地域活性化を図ることを目的として活動しました。地域住民や都市住民を対象に、実際に町家に触れ、まちなか居住を体験できるイベントを実施し、地域の空き家を活用しながら、地域再生・活性化への足がかりを探りました。

# 長浜楽座



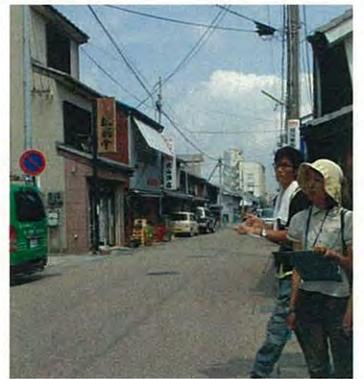
長浜市朝日町は米川沿いに位置し、川と水路に囲まれた地域です。古くは長浜湊として栄え、北国街道を中心に古い町家や蔵が残っています。しかし、近年、高齢化が進み古民家が空き家になり、解体されるケースが増えています。

そこで、長浜楽座では、現在どのくらい町家や蔵が残っているのかを調査し、同時に空き家の調査も行いました。

## ●町並み調査・空き家調査の実施

8月18日～25日にかけて朝日町の町並み調査と空き家調査を行いました。

383棟の民家を調査し、カルテを作成しました。その他、蔵や駐車場などの分布も調査しました。



## ●地元住民とのワークショップの実施

9月15日に地元住民とのワークショップを実施し、町並み調査の報告と、意見交流会を行いました。

朝日町の町並みの良さについて改めて知ってもらい、景観についての理解を深めてもらいました。

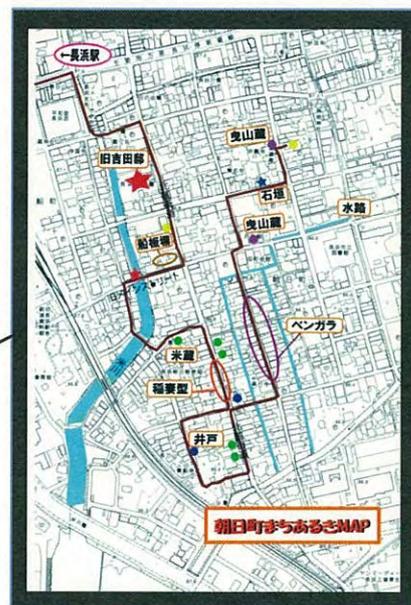


## ●空き町家でのお試し居住イベントの実施

10月25日、26日に空き家を利用した町家お試し居住のイベントを実施し、移住に興味を持つ京阪神を中心とした男女25名が参加しました。日帰りコースと宿泊コースで、まちあるき、古民家見学、参加者と地元住民との交流会、町家維持管理体験などを行いました。イベントを通じ、長浜について理解を深めてもらいました。



まちあるきの様子



古民家の解説



船板塀の町家を見学



古民家見学

## 地元住民との意見交換と交流会



長浜の地域はどなたところか  
どのような生活か、自治会など  
についての質問がなされました。



## 古民家見学と移住者訪問



東京から長浜に移住したアーティスト野崎文子さんの家を見学させていただきました。

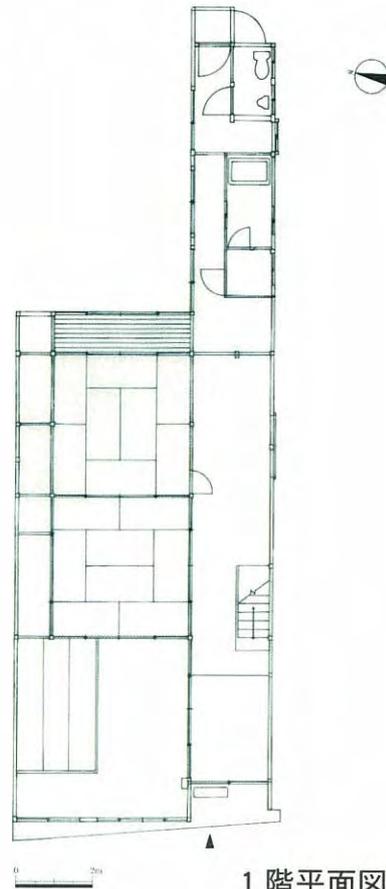
工房兼住宅として古民家を改修され、現在住まれている経験から、どのような経緯で移住したか、改修の時の苦労したこと、地元住民との付き合い、地域活動などについてお話を聞きました。

参加者からは移住についてのアドバイスを求められ、自分から積極的に地域に入ろうとすることが大事などとおっしゃっていました。

## ●空き家の実測調査

1軒の空き家の所有者である小野さんに協力をいただき、実測調査を行いました。

小野邸は築約120年のツシ2階の町家です。お試し居住イベントの際、この家に参加者が宿泊しました。



# 18

## 信・楽・人 - field gallery project

信・楽・人 - field gallery project

代表者名:石野啓太(環境科学研究科)

指導教員:印南比呂志(人間文化部)

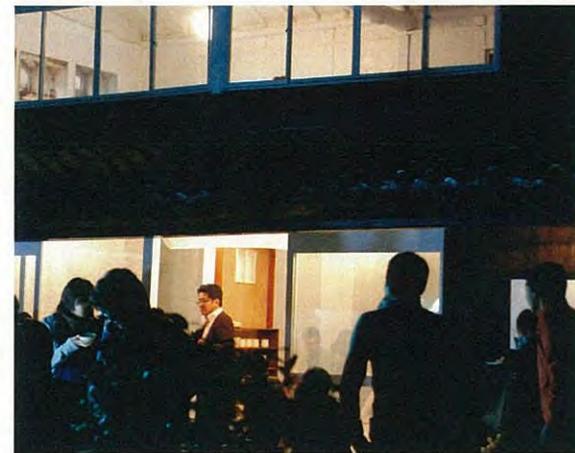
本プロジェクトは、「Field Gallery Project」をテーマに、信楽のまちに潜む地域の魅力を再発見・再構築し、まちをギャラリーのように楽しみ・驚き・発見してもらえるような場所にするを目的として活動しています。2008年度は、「Field Gallery」を実践していくための土台となる、フィールドサーベイ(現地調査)に取り組みました。また、昨年改装したギャラリー「shiroiro-ie」を活用した、ギャラリー改装記録の写真展や、「食と陶器」をテーマにしたイベントの開催を通して、地域との交流や新たな信楽の魅力を創造する契機を作っています。





### 01. 「shiroiro-ie」庭整備作業

今年のプロジェクトは庭の整備作業からはじまった。同世代の庭師の方と一緒に議論を繰り返しながらデザインを決定し、アドバイスをもらいながら作業開始。樹木の植え替え方、穴の掘り方、石の据え方、地のならし方。その作業は今までの改装作業とは全く違った技術で、非常に新鮮な体験であった。完成した庭には、窯元集団SHIN-RAの方たちの白にちなんだ作品も置かれ、華を添えている。



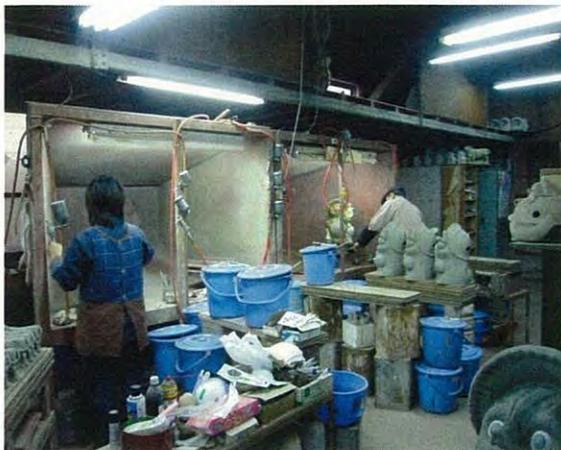
### 02. 「shiroiro-ie」オープニングパーティ

庭の作業も終わった秋上旬。ついにオープニングパーティの日を迎える。地元の窯元さん・作家さん・大工さん・これまでに関わってくれた多くの学生・外の方々などなど、本当にいろいろな人たちが集まり大盛況に終わることができた。いろいろな人たちとの交流が生まれ、まちが活気づいていくきっかけとしてこの場所が活きた瞬間であった。shiroiro-ieはギャラリーの枠を越えた、信楽の交流・情報発信の拠点なのである。



### 03. 「shiroiro-ie」ライブイベント かえるさん(細馬教授)／白鍵・黒鍵

信楽での交流の場づくりの一貫としてライブイベントを企画した。会場はもちろんshiroiro-ieだ。初回のライブは、関西を中心に活動されている白鍵・黒鍵さんをゲストに迎えオープニングパーティ時に開催。心地いい音楽が会場を包んだ。次にゲストに迎えたのは滋賀県立大の細馬教授だ。地元の方、学生などが駆けつけ鍋をつつきながらのほっこりとした演奏会となった。少しずつ交流の輪は広がっていく。



#### 04. 信楽まち歩きワークショップ

いろいろな人たちに信楽の生きた姿を見てもらおうと企画したイベントである。他所から来た人には、なかなか覗きにくい作業風景などを中心にまちを案内した。信楽に陶芸研修に来ているラオスやインドの作家さんなど、総勢20ぐらいの方々に参加して頂くことができた。見学依頼した窯元の方たちも親切に対応して下さい、信楽の魅力をいろいろと感じてもらえたらう。



#### 06. 「shiroiro-ie」改装の記録展

約1年間にわたる私たちの改装作業の様子をたくさんの人たちに知ってもらおうと『改装の記録展』を開催した。ギャラリー内に大小さまざまな写真を展示。また、これまでの活動をわかり易く伝えるためにブログの記事も展示した。パソコンのようにスクロールしながら見れるようロール状に展示。



#### 05. SHIN-RAによる「shiroiro-器展」

若手窯元集団SHIN-RAによる展覧会。私たちは、この展覧会の企画・設営・広報に携わった。名前のお通り各窯元の人たちが「白」をテーマとした作品を展示するというものだ。さまざまな用途の白い作品が、shiroiro-ieの内外に散りばめられ空間を彩った。



### 07.信楽人物マッププロジェクト

新しい展開としてはじめてのが、この人物マッププロジェクトである。このプロジェクトでは、信楽に生きる地の人たちに焦点をあてることで、今まで見えていなかった信楽の多様な姿・表情を人物を通して浮かび上がらせようといった企画である。これは「shigaraki field gallery project」への次なるステップでもある。実際にヒアリングを重ねる中で、新しいたくさんの発見がある。これは今後の重要なプロジェクトであろう。



### 08.「信楽ACT+散策路のwaによる春のイベント」 準備中

この春、第二回目となる若手作家・窯元主催の「信楽ACT+窯元散策路の仲間たち展」が行われる。それに伴い shiroiro-ieが展示会場の一つとして利用されることになった。また、イベントにおけるチラシの作成・案内看板の作成の依頼を受け現在製作中である。

### 09.地域への貢献・課題と展望

今年はshiroiro-ieの改装作業を終えた後、主にイベントなどを積極的に行うことで内外問わず多くの人に、shiroiro-ieが信楽の地域拠点として存在することを認知してもらうことに務めた。結果、多様な人の交流といった部分で地域に貢献できたのではないだろうか。課題・展望としては、今年始め出した人物マッププロジェクトを引き続き展開していき、私たちに新たな信楽の側面を見つけ出し、情報を発信していくことである。

### 10.メディア掲載一覧

- ・情報誌『SAVVY』2008年9月号掲載
- ・情報誌『Leaf』2009年1月号掲載
- ・読売新聞滋賀県民情報 2008年10月28日掲載
- ・毎日新聞滋賀版 2008年12月5日掲載



・情報誌『SAVVY』2008年9月号掲載ページ

# 19

## Taga-Town-Project

### Taga-Town-Project

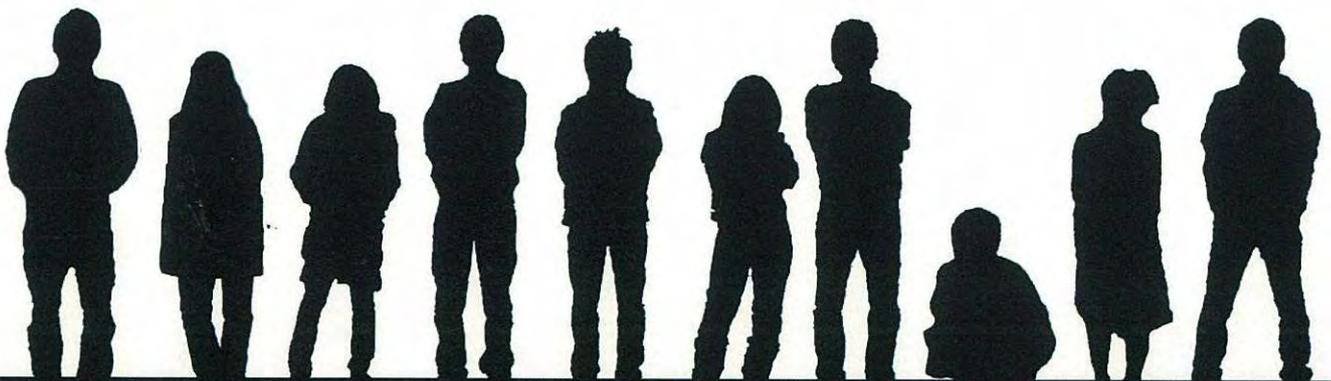
代表者名:稲葉結実(環境科学部)

指導教員:山根周(人間文化学部)・松岡拓公雄(環境科学部)



私たちは、多賀・湖東地域をフィールドに、町が抱えるニーズや課題について地域と共に考え、取り組みながら、元気で個性あるまちを作ることが目的に活動しています。建築デザインを学ぶ学生が中心となった本プロジェクトでは、これまで、地元間伐材を活用した休憩所の整備や、地元の万灯祭への企画・参加などに継続して取り組んできました。2008年度は、「まちによるまちづくり」の実現を目指して、活動のプロセスや成果などの「情報発信」に重点的に取り組みました。まちづくりをテーマにしたホームページなどからの情報発信を通じて、より多くの地元住民を巻き込みながら、多賀のまちづくりを盛り上げています。

# TAGA-TOWN-PROJECT



## TTP とは

「まちに入り、まちを知ることで、まちづくりに参画する、まちのことを真剣に考えている学生たちが集まったサークル」です。また、TTP は、近江楽座に採択されています。

多賀木匠塾から派生し、TTP となり、活動は今春で6年目を迎えます。

世代交代を行なうにあたって、明確な目標をもう1度考えているところで、現在模索中です。多賀に携わる様々な人との交流を通して、まちづくりに関わっていきながら見出していきたいと考えています。

## …まちあるき

新メンバーを迎えて、改めて多賀を再発見する機会として、まち歩きを行いました。午前中は絵馬通りを中心に各自思い思いに歩き回りました。午後は3チームにわかれて、「生活」「観光」「冒険」の3つのテーマにそって多賀町全域をフィールドに散策しました。約一日かけて巡り学校に戻ってからは、各チームごとに成果の発表をおこないました。まち歩きを通して多賀について考える機会を持つことができ、それぞれの視点や意識もメンバー内である程度共有できたものと考えます。



## …万灯祭

万灯祭あかりプロジェクトは Taga-Town-Project (以下 TTP) の継続的なプロジェクトとして4年目を迎えました。毎年、万灯祭の「あかり」というテーマにどういったアプローチに関わるかを学生なりに考え、まちの方との交流を視野に入れて活動してきました。万灯祭は、その規模から観光の要ともなっていますが、あえて今年度は「万灯祭を地元の人たちが地元のお祭りとして盛り上げるために、TTP としては補助的な活動がしたい」という想いがありました。

そこで、行灯を各世帯に配り、祭り当日に持ってきていただくという住民参加型のプロジェクトを企画しました。

竹で作る行灯は、多賀区・多賀にお住まいの皆さん・ボーイスカウト・多賀小学校の子どもたちの協力を得て、ワークショップを開催して製作しました。今年は晴れの日が多く、猛暑の中の作業で多くの方が汗を流し、たくさんの個性ある行灯ができあがりました。子どもたち、そして親御さんたちが楽しみながら作業に参加してくれたことは、メンバー一同改めて活動を実施してよかったなと感じさせられました。また私たち学生も、多賀にお住まいの約600世帯にお配りする行灯を作るべく、多賀書房さんの隣の駐車場で、住民の方のご協力のもと連日行灯を作成しました。

できあがった行灯を見てたくさんの方が足を運んでくださり、その光を見て「竹の行灯もいいな」「とても楽しませてもらった」など、お褒めの言葉もいただきました。その後、行灯は引き取ってくださる方にはお譲りし、役目を終えて回収されたものは新たな使い道を与えるために、株式会社マルトさんの全面的なご協力のもと炭へと加工しました。

炭へと加工することで様々な使い道が生まれると考え、竹をきることから始まった今回の活動を、いい形で締めくくることができたとも思います。現在その炭は細かく砕き、多賀にお住まいの本多さんの畑にまかれ、新たな命の一部としてその役目を果たしています。



## 📷 … ギャラリー

多賀町というフィールドで活動する上で、何をしてもまず第一に多賀町を知ることが必要だと考えました。知るということは、その地を訪れ実際に体感することではじめて可能になるともいえます。そこで、TTP の活動の拠点となりうる場所を多賀町に求めるプロジェクトがたち上がりました。それが「ギャラリープロジェクト」です。多賀町に場所を求めるだけでなく、その場所の活かし方を学生が提案し、例えば多賀のまちの方々の交流場所として、あるいは多賀の子どもたちの作品展の開催場所として、自分たちの活動の拠点多賀のまちの方々にも親しまれるという目標・構想があります。

その活動場所として、普段から TTP の活動を理解してくださりご協力いただいている多賀町商工会の方々から、貴重な活動場所となる物件をお借りすることができました。

そのお披露目も兼ねて、2月28日にオープンイベントとして「もちつき」を実施することもできました。現在は、4月に行われる新入生向けのまち歩き開催時に紹介できるように企画を検討中、2009年度は5月まで試験的に運営する見込みとなっています。将来的には多賀に関する議論や MT を多賀町で行い、より地域との距離感を縮めて活動すると思えます。

## 📰 … 広報

私たちの活動は、私たちが多賀町を知る必要があると同時に、多賀のまちの方々に TTP の活動を知ってもらう必要があります。まちの方々と時間をかけて意識を共有し、お互いに誤解をなくすことは息の長い活動を実行に移すうえでもとても重要で、そのための広報はひとつのプロジェクトとして扱っています。その代表的なものとしては「ててぶ便り」「TTP ブログ」などがあります。

「ててぶ便り」は現在創刊0号・次号 0.5号が発行中で、内容としては順次 TTP の活動の報告、お知らせなどを掲載しています。また、それよりも以前からウェブ上に設けた TTP ブログにより、学生間の意見交換や、まちの方への情報提供を随時行っています。

またこの他にも「TTPインタビュー」というプロジェクトも動いており、記念すべき一回目は2月2日に行いました。このプロジェクトの目的は、多賀町に住む方々の意識や想いを順番に一人ずつお聴きし、それらを学生の視点から分析してまとめることで、まちの方々同士がより関わりやすくなるための補助ツールとして提供することを目指しています。



ギャラリー物件



つきたてのおもち



TTP ブログ

# 20

## 発信基地in朽木の森

### くつきチーム

代表者名:鈴木宏健(人間文化学部)

指導教員:黒田末壽・武邑尚彦(人間文化学部)

私たちは、2004年度より、高島市朽木地区をフィールドに、学生という視点や立場から地域の魅力を引き出し、活かすことを目的に、聞き書き集や広報誌の作成などの様々な活動に取り組んできました。今年度は、多数ある朽木の魅力のうちの一つ、“お年寄りの語り”に着目します。お年寄りへの聞き取りから、日常では語られなくなりつつある、地域に根付いた“知恵”や“文化”を引き出し、それらを絵本として完成させました。これらの活動を通して、地域におけるお年寄りの存在意義を再認識すると共に、お年寄りが持つ地域を豊かにする可能性を、朽木地域内外に向けて発信していきます。



## 朽木チームとは？

私たちの活動は高島市朽木という地域に密着し、その地域に入り込みお年寄りのお話を聞くことです。伺ったお話は絵本などの発信ツールにして地域にフィードバックします。

現在では高島市となっていますが、朽木は最近まで滋賀県最後の村だった地域で、山と川に囲まれた自然豊かなところです。今年度の朽木チームはその自然に着目し、林業についての絵本を作成しました。

今、朽木東小中学校は学校の林を使って建て替えを行っています。その林は50年も60年も前から卒業生や地域の方々が大事に育ててきたものです。そのことやそれに関する苦勞を、少しでも知ってもらうことが目的です。絵本の内容は学校林のことにとどまらず、広く林業のことにふれています。物語内容は小学生にも読みやすいものになっています。絵本は朽木を中心とした小・中学生に配布する予定です。

朽木チームは今年度引き継ぎを行い、活動を始めてから3年目になります。これからも地域のお年寄りの声を聞くだけでなく、失われつつあるものを記録し、還元し、少しでも地域の役に立てたらと思います。



⇒朽木の大自然。川は澄んでいて、川遊びもできる。(上図)

⇒朽木の森にて。おじいさんに木の育て方を教わっている。(下図)



## 絵本を通して地域と関わる

還元という言葉を使いましたが具体的には聞き取った情報のフィードバックを指します。今回は絵本の配布という形で実現しています。前述しましたが、地域の未来を担う子供たちに絵本を配布するほか、聞き取りに協力していただいたお年寄りに方にも絵本を見てもらう予定です。自分の話が絵本になった、という自信を持っていただけたらと思います。

## なぜお年寄りの声なのか？

私たちの活動は前述の通り、朽木のお年寄りの声を聞くことです。

お年寄りのお話には今現在にはないものや事が数多く登場します。それらは失われてし



⇒お年寄りの声を真剣に聞くメンバー（上図）

まった古いしきたりや行事だったりします。そして、それらは今お年寄りの口から聞かなければもしかしたら永遠に失われてしまうものかもしれません。

時代とともに失われてしまったものならば当時では必要なかったものなのかもしれません。しかし、今もう一度聞いてみたら必要なものかもしれません。今でなくとも、未来には必要になっているかもしれません。記録として残すことは「いつか」のために必要だと思います。

⇒朽木の朝市。ほとんどのメンバーが朝市初体験（下図）

いつか、というと抽象的に聞こえるかもしれませんが、いつかとは未来のことです。お年寄りの、言い方は失礼かもしれませんが、古い言葉が新しい世の中にも役立つと、そう思うのです。

いつかのために今できること、今しか出来ないことはやっておきたいと思います。そのためにお年寄りの力が必要なのです。



そしてそれを記録として残すだけでなくその地域の人たちにまた、地域の外に住む人たちに伝える事が、今、必要だと思うのです。

簡単に「伝える」という言葉を使いましたが、その作業は大変なことです。残すだけなら大量にデータを採れば良いのですが、伝えるとなるとそうもできません。その取った情報の一部しか伝えることができないからです。何を伝えるべきか、何を伝えられるか、おこがましいことですが悩ましいことです。

## 伝えるということ

伝えるとはいうものの、私たちはお年寄りの話から学ぶことばかりです。お年寄りの話は面白い。なぜでしょうか。答えは簡単なのですが、私たちの知らないことを知っているからです。例えば庭に咲いている花の種類とか、木の育ち方とかです。もしかしたらそれらのことは50年60年前では当たり前の知識だったのかもしれませんが、しかし、現在ではその知識は当たり前ではなくなっています。失われつつあるその知識を引き継ぎ、伝える、つまり、伝承することが私たちくつきチームの役割だと思っています。

本来ならば継承することが望ましいのですが、それは、地域の住民にならなければなかなかできることではありません。しかし、知らない地域に住むことは難しいことだと思うのです。何年活動しても、外から来る限り、私たちは「よそ者」でしかありません。聞いた話によりますと、結婚してお嫁さんとして地域に住み始めたとしても10年20年は「地元のひと」とは認められないということです。それほどに朽木の地元意識は強いものようです。しかし、だからこそ、私たち「よそ者」にしか見えないものがあるように思います。

その地域に住んでいる人にはその地域の良さは当然すぎてなかなか分からないものだと思います。良さ悪さは他との差異から生まれるものだからです。私たちは一步引いた視点から地域を見ることが出来ます。その視点で地域に関わっていけるのは私たちだけであると自負します。

これからの活動でも、その地域のよさを外に、内に、私たちにしか見えない見方で、発信していきたいと思っています。



⇒朽木のおじいさんの家にて。貴重なお話から聞かす絵本が出来上がっていく。



⇒このような市場の活気も伝えていけたらと思う。

# 21

## 彦根人力舎—彦根地場産業発信計画— リキシャ



代表者名:黒田靖史(人間文化学研究科)  
指導教員:印南比呂志・面矢慎介(人間文化学部)



彦根市には、古くから仏壇製作や縫製などの地場産業が存在しているものの、現代の日常生活ではそれらと触れ合う機会がほとんどありません。私たちは、これらの地場産業に対する認知度・親近感を高め、彦根の地域ブランド形成をバックアップすることを目的として活動します。活動の初年度となる2008年度は、仏壇産業と繊維産業の技術を応用しながら、自転車生活をすすめる会が取り組む「彦根力車開発プロジェクト」で製作された「自転車力車」の改良に取り組みました。さらに、これらのイメージ調査を行いながら、デザインの分野から、「地場産業に対する認知度・親近感の向上」を探っていきます。



## 彦根リキシャ

### 彦根リキシャ

彦根でベロタクシーが走り出して約一年、休日の彦根城周辺を走るベロタクシーの姿は定着してきたように思う。しかし、一見、目を引く卵型のベロタクシーは全世界の観光地や都市で運行されていて、そのため観光地の風景が同一化される恐れがある。彦根城を中心とする彦根の景観にあった自転車タクシーがあってもいいのではないか。という考えが地域の中で生まれ始め、やがては学生も巻き込んでこのプロジェクトは動き出した。

### 自転車タクシー

彦根は江戸時代「陸舟奔車」という世界初の自転車が発明された場所であり、かつてトライアスロンなどの競技のステージであった場所でもあり、現在は自転車利用の活発さで全国でも有数になっている。ごく最近では滋賀県下で初めて自転車タクシー「ベロタクシー」が走り始め大いに話題になった。

彦根は歴史と環境と地域性に恵まれ、さらに伝統の技術(武具作成から派生した仏壇づくり)がある。

世界的な背景としては、地球温暖化の進行と各国の対策の実行(温室化効果ガスの削減)の進展により、環境対策商品の市場が広がりを見せており、自動車など身近な運搬運輸の移動手段を見直す動きのなか、荷物や人を運ぶ「働く自転車」が注目されている。

### 市場の現状

[日本] ベロタクシー以外は鹿児島の「かごりん」という牽引型が在る。愛地球博では国産の自転車タクシー(BS/ヤマハ/パナ)が走ったが、量産の予定はない。

[世界] ドイツ製ベロタクシー(VeloTaxiは商品名)=全世界で運行中。PEDICAB=人力3輪自転車はアメリカ、イギリス、フィリピンなど。サイクルリクシャー=スリムな人力3輪自転車がインド、ネパール、コペンハーゲンで運行中。ベトナム、カンボジア、南米のシクロは前に幌つきの1~2座席を配した、前2輪3輪車が運行中。

### 地域に根付く人々の技と力で創り出す

排気ガスを出さず、のんびりゆっくり人を運ぶその姿は四季を通して彦根の城下町の風景にとけ込み、リキシャそのものが風景となるだろう。混雑した狭い道も走行可能で、風雨に耐える実用性も兼ね備える。市民、NPO、学生、教授、伝統技術の製造業者、などの協力で開発。彦根から全国に「平成の陸舟奔車」を発信し、まちの交通の一つの方向を試みる。

ドイツ製でもアジア製でもない日本のオリジナル製品彦根を出発点として、全国各地の風土に合った「リキシャ」が展開していくことを目指す。



## 一年の流れ

### ～2月

- ・協力者集め(フレーム制作/プロダクトデザイナー/職人/ボランティア)
- ・調査(国内外の製品について/道路交通法ほか法律について)

### 3,4月

- ・基本デザインの提案
- ・ネーミングの提案
- ・コンセプトや実走の際のサービス、グッズなどについて構想

### 5,6月

- ・基本構造の試作(寸法/素材の検討)
- ・動作確認

### 7,8月

- ・制作分担決定(各方面のプロの技術をもって作製)
- ・車両制作図面作成(フレーム/重量などの検討)
- ・ネーミング決定

### 9月

- ・ロゴ作成
- ・車両制作開始

### 10月

- ・車両制作、漆塗装～仕上げ

### 11月

- ・展示会出展(環境ビジネスメッセ at 長浜ドーム 11/5-7)  
(大阪国際見本市ニューアース2000 at インテックス大阪)

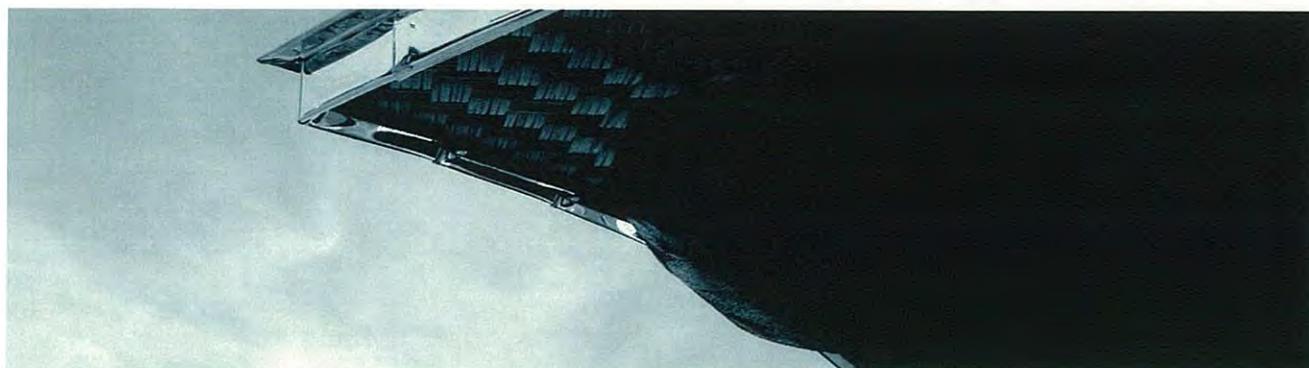
### 12月～3月

- ・車両補修、改良
- ・各種メディアの取材

### 3月～

- ・運行実施





## 展望と反省

プロジェクトの活動において、我々学生のリキシャチームが担当したのは、おもに模型や試作の制作、職人による作業の補助、職人や参加者のコーディネート等である。

プロジェクトは地域の住民、職人たちの活動に学生が参加するという形となった。学生が地域の人々の中で積極的に活動することで、プロジェクトを活性化させ、様々な人を集めるきっかけとなった。しかし、たくさん人が集まれば、考え方も多様になり、まとまらない部分もでてきた。学生主導の活動ではないという難しさがあった。

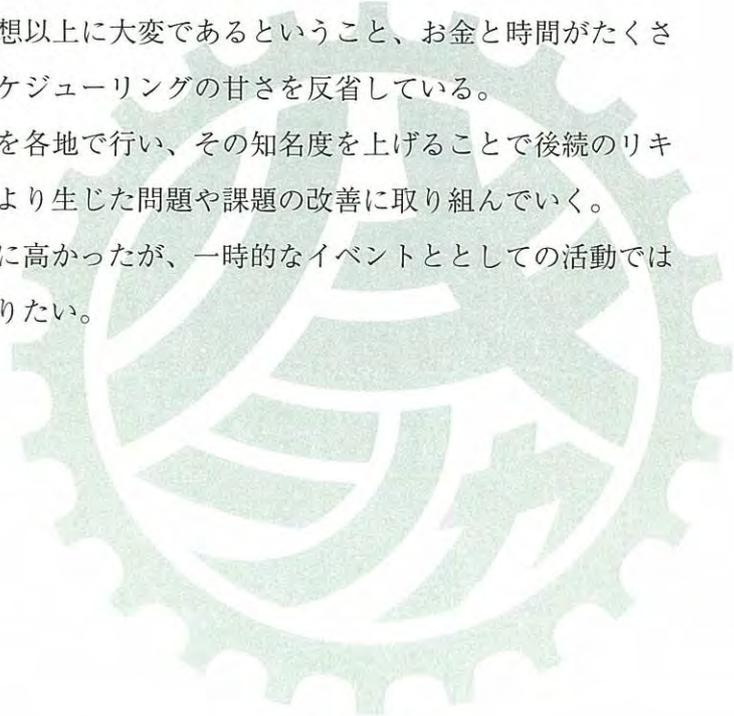
一年をかけてひとつのものをたくさんの人間で創り上げるという、単純な目標であったが、多くの人が関わる中でものを作るということが、いかに大変であるかということがよくわかった一年であった。

プロの職人の技術の中で制作に関わることで、職人の努力や苦勞を目の当たりにし、その技術がやはり素晴らしいものを生みだし、そして使う側にもきちんと受け入れられるという、ものづくりのプロセスを体感できたことが大きい。

しかし、ものを一から作り上げるという活動が予想以上に大変であるということ、お金と時間がたくさんいるということを痛感させられ、予算組みやスケジューリングの甘さを反省している。

今後は今年度制作し完成したリキシャ号の走行を各地で行い、その知名度を上げることで後続のリキシャ制作を目指す。また、リキシャ号の運行により生じた問題や課題の改善に取り組んでいく。

今年度の活動を通してメディアからの注目は非常に高かったが、一時的なイベントととしての活動ではなく、地域に根ざしたリキシャとなるよう、頑張りたい。



# 22

## 八日市屋台プロジェクト (プロジェクトW)

わいわい楽座

代表者名:依田知大(人間文化学研究所)

指導教員:布野修司(環境科学部)・山根周(人間文化学部)



私たちは、八日市中心市街地の街の再生を目標に、地元の既存イベントへの参加・協力や、まちに残されている歴史的・自然的要素や各種機能や人材などの「地域資源」の調査などに取り組んでいます。2008年度は、活動の情報発信と商店街の店紹介の為にマップづくりに取り組みました。現状の商店街の状況を知るため、駅前商店街の店舗100件ほどにアンケートやヒアリングを実施し、それらの調査結果をまとめ、店舗紹介のホームページや紹介カードを作成しました。

# 八日市屋台プロジェクト

## プロジェクトの目標

本プロジェクトは、八日市中心市街地のまち再生に向けての活動、およびその継続的手法を模索することを目的とした。

なお今年度、本プロジェクトは2年目の活動になる。

## 東近江市八日市とは

八日市中心市街地は滋賀県東部近江鉄道の八日市駅周辺に形成されている。古くから御代参街道(彦根から甲賀、伊勢へ)、八風街道(近江八幡から八風峠を経て桑名へ)が交差し、市街地が形成された。

高度経済成長期、工場立地が進むとともに、郊外の宅地化が進む。平成17年の周辺市町村(八日市、湖東町、愛東町、五個荘町、永源寺町、蒲生町、能登川町)との合併により、広大な調整区域となった現在、東近江市の中における新たな位置づけが求められている。

現在人口は増加傾向にあるが、八日市駅前のほんまち商店街は7割が営業を中止しており、中心市街地の衰退が目立つ。

こうした現状の中、青年会議所により、古くから市の町として発展した歴史を踏まえた二五八祭り(路上フリーマーケットイベント)が30年前から開催されているほか、地元事業者による活動団体『ほない会(保内商人発祥の地より)』によって、5年前より妖怪をテーマとした街づくりイベントが開催されている。

本プロジェクトでは、このような現状のなか、昨年は二五八祭りにおいて、屋台を出店し八日市の物産の販売・宣伝をおこなった。妖怪祭りでは、住民の方の祭りへの参加を促すために妖怪メイクや、妖怪ファッションの提供を行い、既存イベントの新たな可能性を提案した。

## 活動内容

今年度、本プロジェクトは中心市街地の活性化に欠かすことのできない、八日市駅前商店街の活性化を目標に活動をおこなった。

八日市の商店街は、営業を休止した店舗が多くみられるが、現在でも歴史ある個性的な商店が各所に見られる。これらの商店のなかには明治以前の創業のものも見られ、大型のショッピングセンターでは扱っていない商品やサービスを提供してくれる。また、近年に操業を開始した福祉施設や、工夫されたカフェなども見られる。店舗が減少した現在も、魅力ある商店は各所に存在する。これらの商店は、八日市駅前の活性化には欠かすことができないだろう。

しかし、利用者への情報提供が不十分な面が見られた。八日市の中心市街地には、空き店舗が増加しているが、マンションの住民など、新たにこの場所に移ってきた人々がいる。焦点の需要としては十分な住民がいるにも関わらず、商店街について情報を持っていない住民が多い。そこで、わいわい楽座では、八日市周辺に住まう住民を主な対象として、中心市街地の施設や店舗の情報を発信・宣伝するために、各店舗や施設の情報収集をおこない、それをもとに商店街の紹介を目的としたHPと、紙媒体の作成をおこなった。



八日市駅前商店街

## 中心市街地の各店舗・施設に アンケート調査を実施

八日市中心市街地の商店街の店舗紹介HP作成のため、現在営業をおこなっている、八日市駅前の商店街に対しアンケート調査を実施した。

アンケートは、駅前商店街・大通り商栄会・大通り商店街・栄町金屋商店街・栄町中野商店街・中央商店街・ときわ通仲之町商店街・ときわ通南町商店街・ほんまち商店街・みどりの街商店街などの、八日市駅前商店街や、その他周辺の店舗、約100件を対象に実施した。その内、60件の回答を頂いた。

回答を頂けなかった商店の多くは、店主が高齢であった。これらの商店は、情報発信に対して消極的であり、自らの代で、店をしまうことを考えているところが多くみられた。今後も、店をしまう店舗は増加していくように思われる。

なお、アンケートの配布・回収には、八日市商工会議所と連携し、おこなった。



アンケートの配布（金屋商店街）



アンケートの配布（本町商店街）

## アンケート結果をもとに取材・撮影

アンケート結果をもとに、回答を頂いた商店の取材をおこなった。

アンケート調査をおこなった店舗は、食料品(3軒)、カフェ(3軒)、薬・漢方(2軒)、クリーニング(2軒)、メガネ(2軒)、衣料品(8軒)、お菓子(4軒)、雑貨(5軒)、花(2軒)、美容院・理髪店(3軒)、写真(2軒)、福祉施設(5軒)、サービス(2軒)、電化製品・電設(2軒)、建材(2軒)、その他(6軒)である。

食料品を扱っている店舗が比較的少ない。カフェは数件あったが、飲食店が少ない印象を受けた。

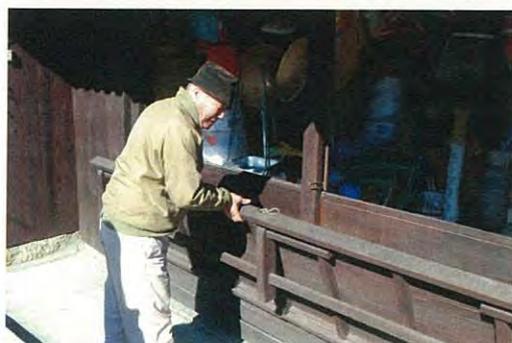
カフェは、近年できたものであるが、タイ人の方が営業をおこなっているものや、陶磁器販売を行っている店舗内で、信楽焼などの使用しているもの店などが見られた。

福祉施設が多いことも特徴的である。これらの多くは近年、空き店舗を利用して作られたものである。

また、蔀戸や床几が現在も使用されている店舗や、漢方を扱っている店舗など、歴史ある八日市の商店街ならではの店舗も多くみられた。



漢方を扱っている薬局（写真は狐の舌）



蔀戸と床几のある店



店舗取材 (ほんまち商店街の福祉施設)



店舗取材 (ほんまち商店街の福祉施設)

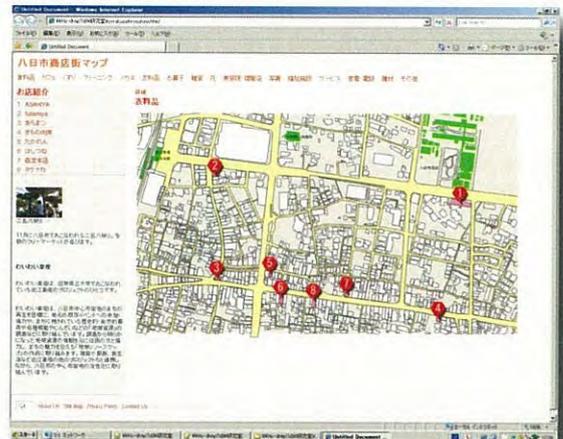
## HPの作成

商店街の紹介には主にHPを用いた。これは、継続的に更新をおこなうためである。

各店舗の位置情報と、アンケートや取材から、わいわい楽座独自の店舗紹介をおこなった。



店舗紹介ページ



店舗の位置情報

## HPの各ページの紙媒体を作成し、取材先に配布

HPと同時に紙媒体でも店舗の紹介をおこなう。これは、HPの宣伝も兼ねている。

HPと同様に、更新を簡単にするために、店舗紹介をラミネート加工を施しカード状にし、商店街に設置した。



店舗紹介のカード

## 今後の課題

店舗紹介のHP事態を住民の方に知ってもらう必要がある。また、店舗紹介は更新が重要となる。改良・更新をしていくことが重要になってくる。継続的手法を模索する必要がある。

また、プロジェクト中盤で、地域と本プロジェクトとのパイプ役のキーパーソンが転職により欠けてしまった。地域でのネットワークの再構築が課題である。

# 23

## 高島市における若者が輝くまちづくり調査活動 —高島における若者の生活スタイルに 関する調査および発信活動

Area+Design

代表者名:杉林久美子(人間文化学研究所)

指導教員:黒田末壽(人間文化学部)

少子高齢化が進展する高島市において、持続可能な地域社会の運営のための若者の定住促進が喫緊の課題となっています。私たちは、高島独自の地域性・風土・環境と若者のライフスタイルのつながりに着目しながら若者へヒアリング調査を行い、高島の可能性について、若者である学生ならではの視点で掘り起こしながら、若者の未来に向けた、高島の地域特性を生かした生活スタイルを検討・提案しました。また、それらを元に若者定住を目的としたPR冊子「『高島で暮らす』ということ」を作成しました。



# このまちにある、 いくつものライフスタイルを、 ほんの少し、おすそわけ。

## まずは、聞くこと。

空気・風景・ひと・生業…、さまざまな要素において、高島の独自性や魅力を見出すこと。それは、高島に住む人たちのライフスタイルから見つけること。そして、それをきちんと伝えること。高島の空に、思いを描く人たちに。思いを描きたい人たちに。

これが、私たちの活動の目的でした。

そこで、まずは、聞くことから始めました。高島市に住んでおられる方々の、さまざまなお話を、テープにとらせていただいて、何度も何度も聞きました。それぞれの人の声に表れる、高島の暮らしはどのようなものか、それを知りたかったからです。最初はなかなか難しいことでしたが、繰り返し聞くうちに、少しずつその人の暮らす場所の風景が見えてくるようで、そうならなくてもたってもいられません。

## 次は、歩くこと。

高島に住む人の声に表れていた風景を歩きました。現場を見て、そこに暮らす人に会いに行くためです。

「どんなところで、どんな暮らしをしている、どんな人なのか」、ひとに伝えるためには、まず自分がきちんと知ってなければなりません。今回は、20名の方のお話をもとに、取材に行きました。高島には、人の数だけさまざまな風景があつて、そこにはいろいろな暮らしがありました。写真撮影が取材の中で一番難しいことでした。どの風景をきりとれば、高島らしさがつたわなのか。この人の笑顔を、そのまま写真で伝えたい!などと思いながらの撮影でした。

この写真と、先に聞いていたお話を組み合わせ、今度は伝える媒体を作らねばなりません。

高島市における  
若者のライフスタイルに関する調査および発信活動

Area+Design

## 考える。

これまでの活動を通じて見えてきた、高島のライフスタイルや、その中から見出した高島の素晴らしい独自性を、どうすればきちんと伝えることができるのか。それは、私たちが聞いた「人の話」と、私たちが見てきた高島の風景の「画像」を、どうやって使うのか、ということです。つまり、「デザイン」の力が必要になるということです。

高島は、空がきれい。

海津で見た、琵琶湖の波。

あのひとの笑顔が良かった。

にんじんと土の、色のコントラスト。

木を切る音、におい。

それらを伝えるためには、多くの仕掛けを考える必要があります。コンセプト、材質や写真の選定、話の内容などなど。それらを一つずつ、クリアしていくのです。

## 冊子、完成。

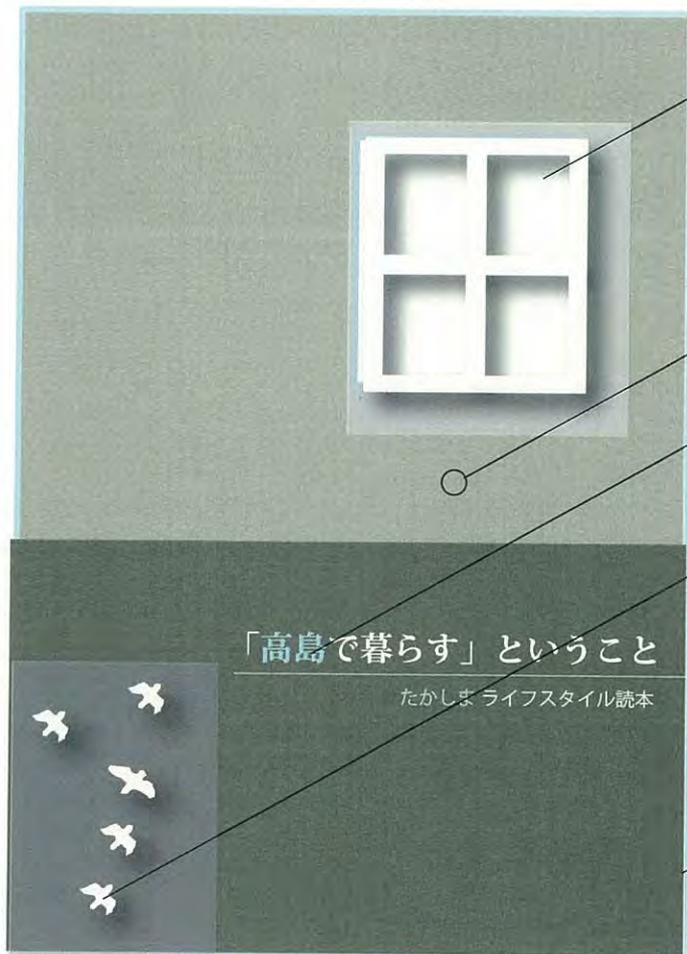
伝える媒体は、冊子に決めました。いつも手元に置いてもらえるように。どんな人にも、開いて見てもらえるように。

A5の大きさで、20ページの小さな冊子です。ここに、当初の目的であった、高島の魅力・独自性とそこに住む人々のライフスタイル、この2つをつめこんでいきます。

表紙の紙は、琵琶湖の波・山々の木肌、流れる雲をイメージして選んだもの。トレードマークの渡り鳥には、高島の湖岸に飛来する水鳥と、高島に移り住んでほしいという願いとをこめました。

このように、冊子のいたるところに伝えたい思いをちりばめてあります。この冊子が一人でも多くの高島に関心をもつ人の手に渡り、高島居住のきっかけになれば、これ以上うれしいことはありません。

# 冊子のこだわり紹介



## 窓・・・

高島で暮らす人々のライフスタイルをかいま見てもらえる内容なので、「お家をのぞく」というイメージをもたせるために窓を表紙につけました。

## グレイカラー・・・

冬季に多い、高島の曇り空や「高島しぐれ」のイメージ

## ブルーカラー・・・

高島の美しい青空の色。グレイの中で、水色を強調しています。

## 渡り鳥・・・

高島の琵琶湖岸に飛来する渡り鳥。高島への移住、定住の願いをこめて、渡り鳥を冊子のキャラクターにしました。

## 紙質・・・

琵琶湖の波、流れる雲、木々の肌を想像できる質感の紙を選択し、表紙に使用しました。

最初の文字を大きくすることで、**文字** 読み始めやすくしました。

ライフスタイルの雰囲気が伝わることを期待して、掲載者の姿だけでなく、仕事場の様子や道具などの写真を多様しました。**写真**

話の内容と、色を変えることで、**名前** メリハリを出しました。個人情報ということで、アルファベットで表記しました。

掲載者のお話の中で、最も印象に残った高島生活を象徴する一言を抜粋し、掲載してあります。**一言**

**在住歴と職業**  
個人情報ということもあって、あまり詳しい個人の説明は掲載していません。しかし、職業と在住歴は、各掲載者のライフスタイルをより鮮明にイメージしてもらうために掲載させていただきました。

琵琶湖の波のイメージです。ページ帯が進むにつれ、グラデーションがかかっています。**帯**

僕は、一般住宅の建具や家具を作っています。親父がこの仕事をしてたので、僕も継がなあかんのかな……と思って(笑)。仕事をやる中では、「つながり」を大事にしています。コミュニケーションというのかな。僕は、けっこう人見知りをするんですけどね(笑)。だから、自分から前に出て行くことはしないんだけど、誘われたこと、頼まれたことは大事にして、断らないようにしています。

地域のつながりや、人間関係なんかは、小さな頃から地域の祭などの中で教えてもらえたから、小学校3年生くらいになると、祭の前の1ヶ月は練習に行くんです。25歳までの青年会の人が教えてくれました。今は、それは続いています。みんな、祭が好きなんです。高島は、時間がゆっくり流れている気がしますね。

**Kazuyuki. I**  
自営業  
在住歴 32年  
仕事をする中で、大切なものは、つながり。誘われたこと、頼まれたことは大事に。

高島生まれの高島育ちです。夫は単身赴任なので、子供と実家で暮らしています。私も仕事をしているので、実家は家事や子育てなどで助かる部分が多いです。夫は休日には高島に帰ってくるので、休日は子供とゆっくり遊んでいます。子供たちにとっても、自然が豊かで安心して育てられる高島の環境の中で暮らした方がよいと考えています。高島は、タダで色んな遊びが出来るんですよ(笑)！川遊び、アスレチック、温泉、キャンプ、何でもできます。子供たちが遊ぶ環境としては最適。地域の人たちも、お互いに顔を知っているのが、安心なんです。また、福祉施設も充実しているし、保育料も安いから、いろいろな面で子供を育てやすい地域です。びっくりしたことは、夏の夜に、家で電気をつけたら、カブトムシが家の中に飛んできたんですよ！！しかも5匹も！！本当に自然とふれあえます。あとね、朽木の火花はいいですよ。湖岸の花火もいいけど、山で見る花火はまた、一味違います。音の迫力！

**Miki. N**  
公務員  
在住歴 32年  
カブトムシが家の中に！！しかも5匹も！！笑



## 2-2 全体の活動報告

### 2-2-1 中間発表会

#### ■ 中間発表会

▼日時：平成20年11月18日（火）10:30～17:00

▼場所：滋賀県立大学 交流センター ホワイエ

▼参加者：97名

（うち学内92名、学外5名）

▼内容：プロジェクトの中間報告と情報・課題の共有、課題解決の意見交換

活動の中間報告と相談会を兼ねて、座談会形式で発表会を開催しました。

#### 【座談会 part 1 10:40～12:10】

<パネラー>

○松尾清（百彩）／○石野啓太（信楽人）／○山本徹（未来看護塾）  
○八百山和（Taga Town Project）／○横山耕蔵（とよさと快蔵プロジェクト）／○中小田すばる（もったいないプロジェクト）／○依田知大（わいわい楽座）

<ファシリテーター>

○平河勝美（近江楽座専門委員会／人間看護学部）

#### 【座談会 part 2 13:10～14:40】

<パネラー>

○田口真太郎（エコキャンパスプロジェクト木楽部会）／○青木麻美（Oumi Food Project）／○古田修一郎（男鬼楽座）／○佐藤友紀（ボランティアサークル Harmony）／○元吉良輔（ソーラーハンター）／○井川達朗（菜の花エネルギー）／○土井敏生（リキシャ）

<ファシリテーター>

○錦澤滋雄（近江楽座専門委員会／環境科学部）

#### 【座談会 part 3 14:50～16:20】

<パネラー>

○仁科美香（古民家楽座）／○岩崎史子（Cotton Project）／○石丸薫（エコキャンパスプロジェクト）／○鈴木宏健（くつきチーム）／○杉森香苗（Living Design 12th）／○田中良祐（廃棄物バスターズ）／○福島志帆（長浜楽座）／○杉林久美子（Area+Design）

<ファシリテーター>

○山根周（近江楽座専門委員会／人間文化学部）

#### ▼概要、キーワード

##### 【座談会 part 1】

○ 特色、活動への思い、課題

- ・ 活動が評判をよび他の地区でもイベントを開催することができた。地元主導であり、今後、期待が持てる。（百彩）
- ・ 活動拠点が遠く、作業時間が長いので、人材確保に苦勞。（信楽人）
- ・ 定期、不定期の活動を行っているが、情報発信力が弱いため、HPの作成に取り組んでいる。マンネリ化を打破するヒントは？（未来看護塾）→プロジェクトに関わる関係者の声。
- ・ 活動やミーティングの様子を HP に早くアップしている。地元住民には授業の一環と、誤解されているところもある。自主的な活動だと理解してもらいたい。（Taga Town Project）





- ・ 蔵を改造したゲストハウスづくりに取り組んでいる。課題は慢性的な資金不足。(とよさと快蔵プロジェクト) →地域で準備していけるよう働きかけていくことも必要。県外他事例との情報交換。
- ・ 今後の課題は後継者がいないこと。(もったいないプロジェクト)
- ・ 学生だけでは継続性に問題がある。今年は屋台から地域にこだわって活動。(わいわい楽座) →自分たちらしさを出すため、とことん屋台にこだわるという手もある。

○ ステップアップに向けて

- ・ 他のプロジェクトのツールを利用して連携すると、新たな展開の可能性が拓ける。
- ・ 得意分野でつながる、地域や空間でつながるなど様々な方向がある。
- ・ メンバー集めの工夫として、ターゲットを絞った広報を。

【座談会 part 2】

○ 活動でよかったこと、困っていることなど

- ・ ワークショップで子どもたちとのよい関係が築けた。(木楽部会)
- ・ つくったものをおいしく食べてもらえたこと。(Oumi Food Project)
- ・ 課題は下級生への引継ぎ。(木楽部会、Oumi Food Project 他)
- ・ 活動をつなげていく縦のつながりをつくりたい。また研究室以外でも気軽に参加できるというPRに力を入れたい。(男鬼楽座)
- ・ 事務作業負担の偏り。(ボランティアサークル Harmony)
- ・ 研究室だけでは出会えない方たちとの出会い。(ソーラーハンター、菜の花エネルギー)
- ・ プロのものづくりの現場と関わり、経験になった。(リキシャ) →卒業生も関わってくれていることが大きな力になっている。
- ・ 参加者の満足度が高く、地元も積極的に関わった。(木之本楽座)

○ ステップアップに向けて

- ・ 人材不足解消のためには1、2回生への働きかけ。人間探求学受講生に実際に体験してもらうとか。現場に来てもらう機会づくり。
- ・ 他団体との交流やOB、OGの活動への参加。
- ・ 地域が近江楽座(学生+資金)に頼り切ってしまうのはよくない。

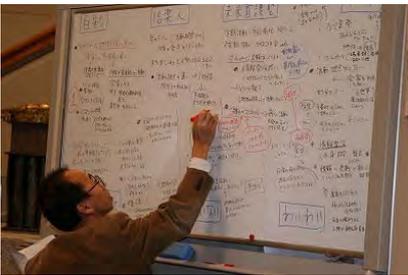
【座談会 part 3】

○ 活動でよかったこと、困っていることなど

- ・ 活動メンバーが重複している。引継ぎのため後輩を探したい。(古民家楽座)
- ・ 活動場所への交通手段。地域団体との情報共有。(Cotton Project) →マイクロバスを所有するのも1つの方法。
- ・ 他の楽座プロジェクトや学内・学外の様々な団体との連携、協力しながら活動できた。組織内での情報共有は不十分(エコキャンパスプロジェクト)
- ・ 引継ぎが不十分で、地域との関係を一から築き直すのは大変だった。遠隔地なので、交通が不便。(くつきチーム)
- ・ チームでTシャツをつくった。共通のアイテムをつくることで、連帯意識が生まれたり、アピール、認知度アップにつながった。(Living Design 12th)
- ・ 企業、団体協力により地元産のものがつくれた。(廃棄物バスターズ)
- ・ 昨年度の実績があり活動しやすかった。地元の人たちの関心を高める工夫。(長浜楽座)
- ・ 取り掛かる時期が遅れ、予定がずれこんでいる。(Area+Design)

○ ステップアップに向けて

- ・ チームが気軽に集まれる場所や空間が楽座として学内に確保できるとよい。
- ・ こういう発表会を通じて、解決策を探ったり、連携のきっかけづくりができる。楽座全体としても連携のシステムづくりが必要か。
- ・ 組織マネジメントは多くのチームが課題。これからは、活動だけでなく、組織運営についてチーム内で時間をとって検討していくことも必要。





## 2-2-2 成果発表会

### ■ 近江楽座パネル展

▼日時：平成 21 年 4 月 23 日(木)～5 月 1 日(金)

▼場所：滋賀県立大学交流センター ホワイエ

▼内容：

23 プロジェクトの成果報告パネルや実際に制作した成果物などの展示を行うとともに、近江楽座や新聞等メディア掲載について展示しました。

### ■ 成果発表会

▼日時：平成 21 年 4 月 25 日 (土)

▼場所：滋賀県立大学 交流センター ホワイエ

▼参加者：150 名

(うち学内 120 名、学外 30 名)

▼ 内容：

23 チームが 4 つのテーマに分かれて活動成果を発表しました。それぞれの発表の後、地域関係者のコメント、質疑応答が行われ、最後に全体まとめが行われました。

また、Oumi Food Project と Bar タルタルーガ(とよさと快蔵プロジェクト)プロデュースによる近江牛バーガーと飲み物のセット販売や廃棄物バスターズによる環境クイズなどの実演・販売も行われました。

(プロジェクト発表のパート分け・発表順位は、報告書 2-1 プロジェクトの活動報告、2-1-1 プロジェクト一覧を参照)

#### 【 成果報告－健康・暮らし－ 10:15～11:40 】

司会：平河勝美(近江楽座専門委員会/人間看護学部)

地域関係者から、「自閉症の子どもが学生さんと関わることで、作業所で人間関係をつくれるようになった。学生さんもすごく成長している」、「親と子、教員だけではできないことに若い学生の力を得て、活動が大きく進展した」、「地域の中にどんどん入ってきてほしい」、「学校で学んだことを社会で活かせるよう、特別な事業だけでなく、長く企業とつながりがもてたらよい」等のコメントをいただいた。

質疑応答では、「コミュニケーションのとり方について、現場で学ぶことで未来の看護について考えるヒントになる」、「他の楽座とのつながりや出来なかったことを後輩たちへつないでいきたい」等があった。

全体の意見として、「報告ではプロジェクトのボリューム・イメージがあったほうがいい」、「学生という立場と学校をうまく生かして、ずうずうしく地域に貢献してほしい」、「学生の関わり方は、単にイベントに参加するものとか、いろんな関わり方がもっとあっていい」、「近江楽座の今後の方向性として目に見える形や制度につなげていくことと、表に出てこない地域との交流や地を這うような活動実態が楽座の本質でもあり、そのことをきちんと伝えていく必要がある」等があった。

#### 【 成果報告－環境－ 12:30～14:10 】

司会：石川慎治(近江楽座専門委員会/人間文化学部)

地域関係者から、「市民団体と地元自治会、学生プロジェクトの協働で活動できる体制が整ってきた」、「学内、学外に関わらず様々な団体ともっと交流をもってもらいたい」、「学生らしさとは、若者の熱意だと思う。チームが本当にやりたかったことは何なのか、思いが伝わってこなかった」、「学生のチャレンジ精神に押されて、我々も菜の花栽培に挑戦することができた」、「環境問題に世代、立場を超えるような解決策を探してほしい」、





「学生がたくさん参加してもらえたことで我々の活動もできた」等のコメントをいただいた。

質疑応答では、「ワークショップで知り合った人たちに湖風祭に来てもらったり、いい関係が築けている」、「製作した足こぎ発電機を体験してもらって、生の声を聞くことができたのがよかった」、「近江楽座の交流会への参加者が限られていた。もっと定期的にプロジェクトの進行状況が確認し合えればよかった」、「小学校での環境クイズなど活動にメリハリがあることで、モチベーションが継続できるのではないか」等があった。

その他、「エココンに他のチームも出てほしい」等の提案があった。



【 成果報告－景観・再生－ 14:20～16:00 】

司会：野間直彦（近江楽座専門委員会／環境科学部）

地域関係者から、「学生が運営するバーは、学生と地域の人を結ぶだけでなく、地域の人憩いの場にもなっている」、「この取組をきっかけに、隣の村とも一緒にやろまいかという気持ちが出てきた。自分の在所だけでもやれることをやってみようと、新たな取組も始まっている」、「学生さんはしっかりテーマを持って地域に入られるが、地元は自らお願いしていないので意識がない、受け皿が出来ていない。事前の仕込が必要」等。

質疑応答では、「若い世代に町並み等に意識をもってもらいたい」、「活動を多くの地域でやっていると実際に地域の中に入れるかどうか」、「町歩きをすると次の活動につながる場所もあり、気長に考えている」、「外から学生が来てやってくれているイベントは、学生がいなくなるとどうなるか不安。地元で自主的にやっという方は心配ない」、「様々な出会いによりネットワークが生まれてきている」、「地域には危機意識がない。理解してもらうのに苦労している。学生が訴えて気づいてもえるところに、やりがいがある」、「AプロジェクトとBプロジェクトを較べると?」、「BプロをやるにはAプロの経験が大きい」、「Aプロは学生主体で教員は見守り。Bプロは求められていることがあり、自由にやれない部分はあるが、応える力がつく。学生が成長するにはよいプロジェクト」等があった。



【 成果報告－地域づくり－ 16:10～17:50 】

司会：面矢慎介（近江楽座専門委員会／人間文化学部）

地域関係者から、「信楽が今少しずつ変わってきている。ここが、その中心的な拠点となっていくだろう」、「学生さんたちには外からの視点で、まちをみてもらっているのが参考になる」、「絵本を発行することを楽しみにしています」、「市民活動から始まったことに対して、モノづくりとしてのクオリティをどう高めていくか難しかった。印南研究室のメンバーがそれをつなげる役割を果たしてくれた」、「デザイン、コンセプトとも素晴らしい出来栄になった。課題は発注者と調査実施者との意識合わせ」等。

質疑応答では、「今年は地域に入りやすかった。目的が明確でなかったと自覚している」、「少しずつ地域に入れるようになると、いろんなことが見えてくるようになった」、「商店街の情報発信としてHPを選んだターゲットは20代、30代の若い世代」、「今回、大学に発注された意図は?」、「若者定住というテーマなので、学生さんに頼む効果大きい。またライフスタイル調査もやりやすいというメリットがある」等があった。



▼全体コメント

- ・ 人とお金がタダで出るシステムと見られないよう、必ず地域の自立を促してほしい。
- ・ 他のチームとの協働を次の課題として、是非取り組んでほしい。
- ・ 毎年、学生が変わっていくのに、活動が継続していくのが、素晴らしい。学生が地域に学ぶことを改めて感謝したい。
- ・ たくさんのプロジェクトが出来ていくことも全体で見れば継続性。
- ・ まじめに取り組んでおり、活動レベルも高い。もっと学生の参加を。
- ・ 近江楽座は、学生、地域、大学にとって三方よし。
- ・ 持続するというは大変なことなんだということ。





## 2-2-3 地域活動スキルアップ講座の開催

地域活動に必要な基本的マナーや、活動を深めるためのより高度なスキルの習得をめざして、地域活動スキルアップ講座（全3回）を開催しました。企画にあたっては、以下の点に留意しました。

- ・ 全3回をとおした一貫したテーマ設定（「伝える」）
- ・ 講師の現場経験に基づくノウハウ提供
- ・ 学生とも比較的年齢の近い講師選定
- ・ 一方的な講義型ではなく、対話型の講座運営
- ・ 実践的な作業（ワークショップ）を盛り込む。

企画協力：NPO 法人五環生活

### ■ 第1回「ビジュアルで伝える」

▼テーマ：上手な活動写真の撮り方とは？

▼日時：10/20（月）18：00～20：00

▼場所：滋賀県立大学交流センター研修室1・2

▼講師：長岡野亜さん（ドキュメンタリー映画監督・写真家）

▼内容：伝わるビジュアルとしての写真について、実践形式で上手な活動写真の撮り方を学ぶ。

▼参加人数：32名（うち、学外1名）

### ■ 第2回 何を伝える？どうやって伝える？

▼テーマ：広報戦略を考える

▼日時：11/20（木）18：00～20：00

▼場所：滋賀県立大学交流センター研修室1・2

▼講師：芝原浩美さん(NPO 法人ユースビジョン理事・事務局長)

▼内容：簡単なワークショップを交えながら、活動を伝えるための具体的な広報戦略を考える。

▼参加人数：14名（うち、学外3名）

### ■ 第3回 メディアから伝える

▼テーマ：メディアを上手に利用する

▼日時：12/19（金）18：00～20：00

▼場所：滋賀県立大学交流センター研修室5・6

▼講師：木村愛子さん(フリーライター／元朝日新聞あいあいAI 滋賀編集室)

▼内容：プレスリリースを通して活動をメディアにとりあげてもらうためのポイントを学ぶ。

▼参加人数：8名（うち、学外3名）

### ■ 全体まとめ

全3回を通じて参加者の満足度の高いものになりました。その理由として、

- ・ 毎回ワークショップなどの実践的な内容が盛り込まれていたこと
- ・ 少人数で行ったため、アットホームな雰囲気であったこと

などがあげられます。





## 2-2-4 情報の発信

### ■ ホームページ

近江楽座ホームページを活用し、各プロジェクトのイベント告知や活動報告などの情報発信を行いました。各プロジェクトごとのバナーや、タイムリーなイベント情報などのお知らせバナーを作成し、更新情報がわかりやすくなるように工夫しました。

近江楽座ホームページ URL : <http://ohmirakuza.net/>



### ■ ニュースレター「ohmirakuza.net」の発行

活動情報誌（ニュースレター）の「ohmirakuza.net」を、ほぼ毎月の定期発行し、ホームページと合わせて様々な活動情報を掲載しました。最新号ならびにバックナンバーはホームページでも閲覧できるようにしました。



## 2-3 学生委員会の活動

これまでに楽座プロジェクトチームの代表を務めた学生らが中心となり結成された学生委員会が、今年度も「プロジェクト間の連携」を目的に活動しました。

### ■ 『近江楽座のススメ 学生力で地域が変わる／4年間の軌跡』の編集・デザイン

これまで活動してきた50近いチームの中から12チームをピックアップし、地域活動を通して、悩み、考え、成長していく学生たちの歩みをドキュメント形式で綴った『近江楽座のススメ』が発刊されました。

大学が持つ「学生力」は地域をどう変えていくのか。学生たちの能力は地域でどう引き出され、活かされていくのか。学生・教員・地域関係者の手による、地域と大学の連携の可能性について、一つのあり方を提案する1冊です。本書発刊にあたっては、近江楽座学生委員会が大きな力を発揮しました。

- 編 著：滋賀県立大学 近江楽座学生委員会
- 出版日：平成20年12月23日
- 発行所：株式会社ラトルズ
- 仕様：A5判 224ページ
- 定 価：1,890円(税込み)
- 構成：はじめに／第1章 学生力／第2章 成長／第3章 発信／第4章 継続／データで見る Ohmi-rakuza／おわりに



### ■ 定例交流会の開催

毎月20日を定例交流会の日とし、毎月交流会を開催しました。日ごろはなかなか話す機会のない他のプロジェクトらと情報交換したり交流できる場を積極的に作りました。

### ■ 活動紹介冊子の製作

8月に、学内外への情報発信を目的として、プロジェクト紹介冊子（カラーA5判・30p）を作成しました。中には、各プロジェクトの活動内容や一年間の活動スケジュールなどが大きな写真とともに紹介されています。



## 2-4 メディア掲載状況一覧

本年度も、近江楽座の活動は、多くのメディアで取り上げられました。

	日 時	チー ム	メ デ ィ ア	見 出 し
1	H20.4.1	C3 ※19年度プロジェクト	読売新聞	パンプキン王子デビュー 学生が協力今夏から予約販売 県立大「C3」
2	H20.4.8	近江楽座	読売新聞	滋賀県立大学学生フェスティバル「近江楽座」/まち・むら・くらしふれあい工舎 2007年度成果発表会
3	H20.4.10	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	古民家を改造 魅力再び とよさと快蔵プロジェクト代表 横山 耕蔵さん
4	H20.4.20	近江楽座	中日新聞	竹林整備や古民家を活用 県立大生 地域貢献活動の成果発表
5	H20.4.29	近江楽座	読売新聞	ふるさと活性 奮闘 根付いたぞ 県立大 学生フェスティバル『近江楽座』
6	H20.5.20	エコキャンパスプロジェクト 木楽部会	FM 滋賀 「平和堂 My	
7	H20.6.1	エコキャンパスプロジェクト	KBS 滋賀「さんさんワイド滋 wish」	
8	H20.6.1	近江楽座	ウォロ (V o l o)』6月号	[特集]キャンパスはまちのなか! 学生たちのまちづくり
9	H20.6.10	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	学生の新聞 古民家 生き返る 滋賀県立大生が再生プロジェクト
10	H20.6.15	菜の花エネルギー	神戸新聞	バイオディーゼル燃料車両 エンジン稼働実験順調
11	H20.6.17	わいわい楽座	読売新聞	屋台で元気にしたい 県立大生のプロジェクト
12	H20.6.21	エコキャンパスプロジェクト 木楽部会	滋賀リビング新聞	間伐材や端材で気楽にものづくり
13	H20.6.21	もったいないプロジェクト	滋賀リビング新聞	ライフスタイルを見直す「もったいない帳」
14	H20.7.20	男鬼楽座	中日新聞	かやぶき民家 屋根ふきかえ 無人集落 県立大生ら作業
15	H20.7.23	信・楽・人-field gallery project	雑誌 SAVVY (2008年9月号)	[特集] のんびり、気ままに 電車の旅
16	H20.7.27	Taga-Town-Project	京都新聞	竹製あんどん作り着々 県立大生や住民が協力
17	H20.7.27	Taga-Town-Project	中日新聞	万灯祭 盛り上げよう 県立大生ら行灯作りに汗
18	H20.8.5	もったいないプロジェクト	読売 しが県民情報	エコ生活始めよう「もったいない帳」県立大 4年 中小田 すばるさん
19	H20.8.6	百彩	滋賀彦根	高宮の街を赤色に彩る「百彩」イベント 9、10日
20	H20.8.8	百彩	近江同盟新聞	中山道高宮宿赤色に染める
21	H20.8.10	百彩	京都新聞	街並み赤色で彩り 彦根でイベント
22	H20.8.11	百彩	中日新聞	古い街並み 赤く彩る 彦根で景観づくりイベント
23	H20.8.19	エコキャンパスプロジェクト 木楽部会	読売新聞	育て! 大作スピリット 県立大生らが指導 竜王・キッズ彫刻
24	H20.8.21	長浜楽座	近江毎夕新聞	長浜の町並み調査

	日 時	チ ャ ム	メ デ ィ ア	見 出 し
25	H20.9.10	木之本楽座・長浜楽座	朝日新聞	湖北の暮らしを体験しませんか 県と県立大が募集
26	H20.9.10	木之本楽座・長浜楽座	近江毎夕新聞	ワークショップ開催
27	H20.9.11	木之本楽座・長浜楽座	読売新聞	移住するなら湖北へ 10, 11月 長浜などで体験講座
28	H20.9.17	木之本楽座・長浜楽座	京都新聞	山里の暮らしを体験しませんか 県など参加募る
29	H20.9.23	木之本楽座・長浜楽座	読売新聞	湖北スローライフ…夢実現へ一歩一歩 県と県立大の促進事業
30	H20.10.1	Oumi Food Project	広報ひこね	元気フェスタ（イベント告知／折り込みチラシ）
31	H20.10.7	Cotton Project	読売しが県民情報	地元住民と放置畑で2種栽培 県立大生「稲枝CottonProject」
32	H20.10.12	ボランティアサークルHarmony	京都新聞	水しぶき浴びカヌー楽しむ
33	H20.10.20	ボランティアサークルHarmony	中日新聞	障害児がカヌー体験
34	H20.10.20	木之本楽座・長浜楽座	近江毎夕新聞	湖北移住体験イベント開催
35	H20.10.22	リキシャ	朝日あいいいA   滋賀	彦根に似合う自転車タクシーを製作プロジェクト進行中
36	H20.10.26	百彩	中日新聞	民家や商店赤布で彩る 彦根 とりいもと宿場まつり
37	H20.10.28	信・楽・人-field gallery project	読売しが県民情報	民家まるごと白いギャラリーに 県立大+若手窯元集団
38	H20.10.28	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	映像で全国に発信へ 古民家改修、住民と学生交流の姿
39	H20.10.31	廃棄物バスターズ	中日新聞	県立大研究グループ 廃プラでプランター開発 地産地消へ第一歩
40	H20.11.3	リキシャ	朝日新聞	ペロタクシー彦根流に「城下町仕様」大名かご・人力車イメージ
41	H20.11.4	木之本楽座	中日新聞	都会人が山里“体感”
42	H20.11.5	廃棄物バスターズ	京都新聞	廃プラ「地産地消」園芸用プランターに再生 県立大の「廃棄物バスターズ」
43	H20.11.5	廃棄物バスターズ	京都新聞	廃棄物も地産地消 彦根で発信したい 田中良祐さん
44	H20.11.6	廃棄物バスターズ	読売新聞	リサイクル県内で完結 ゴミ再生プランター販売 県立大など共同開発
45	H20.11.8	廃棄物バスターズ	びわ湖放送「滋賀経済NOW」	廃棄物も地産地消
46	H20.11.9	リキシャ	滋賀彦根新聞	「彦根リキシャ」初お目見え 彦根仏壇技法採用の自転車タクシー
47	H20.11.13	リキシャ	毎日新聞	「ひこね自転車生活をすすめる会」・彦根リキシャ開発
48	H20.11.16	ソーラーハンター	週刊滋賀民報	「太陽電池で環境にやさしく」ソーラー自転車タクシー 県大生らが開発
49	H20.11.17	リキシャ	朝日新聞	城下町・彦根にマッチ これが「リキシャ」
50	H20.11.18	廃棄物バスターズ	毎日新聞	市内の廃プラ回収「廃棄物も地産地消」プランター開発

	日 時	チ ャ ッ ム	メ デ ィ ア	見 出 し
51	H20.11.22	ボ ラ ン テ ィ ア サ ー ク ル Harmony	中日新聞	障害者も気軽に来て 県立大で来月6日クリスマスコンサート
52	H20.11.25	リキシャ	京都新聞	彦根仏壇の技法用い輪タク
53	H20.11.25	リキシャ	京都新聞	彦根リキシャ 伝統美込め快走 蒔絵、漆塗り技術駆使
54	H20.11.25	リキシャ	中日新聞	「彦根リキシャ」完成 地元職人や学生ら開発 城下町にぴったり
55	H20.11.25	Cotton Project	こんきくらぶ	コットンボールに夢をのせて
56	H20.11.27	リキシャ	読売新聞	自転車「力車」彦根に登場 来春運行へ 大名駕籠風
57	H20.11.27	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	今日のBBC 「激カラ！」 滋賀県立大学
58	H20.11.28	木之本楽座・長浜楽座	読売 しが県民情報	湖北 見て！触れて！「移住へ」反応上々 古民家再生ネットワークなど
59	H20.12.1	リキシャ	ABC TV「おはようコールABC」	彦根高級リキシャ
60	H20.12.1	リキシャ	コープ神戸「ステーション」	「彦根リキシャ」に見るメイド・イン・ヒコネの力
61	H20.12.2	廃棄物バスターズ	読売 しが県民情報	新製品開発へ技術支援 「リサイクルプランター」
62	H20.12.2	廃棄物バスターズ	中日新聞	金城小 県立大院生が先生 クイズ形式環境考えた
63	H20.12.5	信・楽・人-field gallery project	毎日新聞	「shiroiro-ie」開設 信楽の若手窯元に県立大生ら協力
64	H20.12.13	ソーラーハンター	近江毎夕新聞	ほのぼのと運行 商店街にペロタクシー
65	H20.12.21	近江楽座	中日新聞	「近江楽座」を出版 県立大生が活動まとめる
66	H20.12.24	廃棄物バスターズ	びわ湖放送 「びびドキ」	廃棄物も地産地消
67	H20.12.25	近江楽座	中日新聞	「近江楽座のススメ」県大生 4年間の活動を本に
68	H20.12.29	近江楽座	京都新聞	「近江楽座」の取り組み本に 県立大生 貢献、感動描く
69	H20.12.30	近江楽座	読売 しが県民情報	近江楽座 活動成果本に
70	H21.1.18	廃棄物バスターズ	朝日新聞	彦根・県大をあるく
71	H21.1.25	信・楽・人-field gallery project	雑誌 Leaf 2009年3月号	京都・滋賀 2008年にオープンした新しいお店 196軒
72	H21.1.25	近江楽座	読売新聞	「近江楽座のススメ」刊行
73	H21.1.26	リキシャ	朝日新聞	エコの追い風、自転車タクシー快走
74	H21.1.28	近江楽座	朝日あいあいA I 滋賀	「近江楽座のススメ」を発刊 彦根・県立大学
75	H21.2.3	リキシャ	読売 しが県民情報	ひこね市民活動ふれあいまつり 2009 「彦根リキシャ」
76	H21.2.9	廃棄物バスターズ	NHK 「おうみ発 610」	

	日 時	チ ャ ム	メ デ ィ ア	見 出 し
77	H21.2.24	リキシャ	読売 しが県民情報	県立大生、職人ら「彦根リキシャ」街走れ！自転車タクシー
78	H21.2.24	木之本楽座・長浜楽座	読売 しが県民情報	移り住むなら滋賀県・湖北交流移住を応援する 湖北人の交流会
79	H21.3.2	もったいないプロジェクト	毎日新聞	生活の中から「もったいない」意外にたくさん
80	H21.3.2	Area+Design	京都新聞	若者の高島ライフ紹介 定住促進へ市が冊子
81	H21.3.3	リキシャ	滋賀彦根新聞	「彦根リキシャ」公道で走行へ
82	H21.3.6	近江楽座	毎日新聞	県立大生の地域連携調査研究 4年間の軌跡 出版 活性化へ今後も貢献
83	H21.3.6	廃棄物バスターズ	FM 滋賀「マイ エ コロ スタイル」	
84	H21.3.10	エコキャンパスプロジェクト	読売新聞	
85	H21.3.16	廃棄物バスターズ	日本TV「おもいっ きりイイ!!テレビ」	家族で野菜作り

# 3 課題と今後の展望



## 3-1 ふりかえりシートにみる近江楽座

今年度近江楽座として活動したチームが、活動を実施した後、自分たちの活動を振り返りその効果等を評価するとともに、課題を整理し今後の活動の発展につなげていくために、Aプロジェクト20チーム、Bプロジェクト3チームを対象に「ふりかえりシート」を記入してもらいました。ここでは、シートの記入内容にみられる傾向を紹介しながら、今年度の活動について報告します。

### ■ 実施体制について

#### (1) チーム構成人数

チームに参加した学生数は最多69人、最少2人、平均16人、指導教員は、最多5人、最少1人、平均2人でした。一方、学外構成員は、最多70人、最少0人、平均13人でした。また、計画時との比較では、20人以上の増減があったチームが3チームありましたが、それ以外は、多少の増減はあるもののおおよそ計画どおりの体制であったことがわかります。

	最大	最小	平均
学生	69	2	16
教員	5	1	2
地域関係者	70	0	13

#### (2) 連携団体

全体の傾向としては、地域組織、市民団体やNPO、行政機関との連携が突出する形となりました。昨年に比べて、市民団体・NPOは多少の減少、地域組織と行政機関との連携が大幅に増加しています。地域でのプロジェクト活動が継続して行く中で、地域の幅広い対象に連携が拡大しているという傾向が強まっています。また、連携先が1つの団体で活動するチームが12チームある一方、複数の団体と連携するチームが9、最大では5つの団体と連携するチームが1チームありました。今年度は平均1.7団体/チームという結果で、昨年の平均1.2団体/チームよりも若干増加の傾向にあります。

①地域組織	15
②市民団体・NPO	8
③行政機関	10
④教育研究機関	3
⑤民間企業	2
⑥特定施設	0
連携団体なし	2

#### (3) 活動地域

各チームの活動地域は、学内11チーム、彦根市内14チーム、滋賀県内13チームとなりました（複数回答）。また、23チームのうち、複数の活動地域を持つチームは13チームで、学内のみで活動するチームが1チーム、彦根市内のみが5チーム、県内のみで活動するチームが4チームでした。

①学内	②彦根市内	③滋賀県内
11	14	13

#### (4) 活動拠点

研究室に拠点を置くチーム、学内施設に拠点を置くチーム、学外に拠点を置くチームがそれぞれ右表のようになり、例年に比べてやや学内を拠点とするチームが多い傾向にあります。

学外に活動拠点を置くチームは、彦根市から遠い場所で活動するチームが多く、さまざまな関連団体の協力を得て現地に活動拠点を構えて活動していることがわかります。

①学内 ・研究室	②学外 ・その他	③学外
10	8	7

①生活文化・伝統	9
②観光・発信	1
③地場産業	4
④環境の保全	7
⑤健康・福祉	2
⑥食生活	2
⑦子ども	5
⑧防災・地域安全	2
⑨景観の保全	6
⑩アート・ものづくり	10
⑪中心市街地活性化	5

### ■ 活動内容について

#### (1) 活動テーマ

活動テーマをみると、単独のテーマを掲げて活動を行うチームは7チームあり、16チームが複数のテーマを掲げて活動を展開しています。そのなかで、⑩アート・ものづくりが10チーム、①生活文化・伝統が9、④環境の保全7、⑨景観の保全6、⑦子ども5、⑪中心市街地活性化5、③地場産業4の順に多数となっています。

⑩アート・ものづくり、①生活文化・伝統は昨年最も多く、次いで④環境の保全、⑨景観の保全という項目は変わっていませんが、③の地場産業をテーマとするチームが若干の減少傾向となっています。

①20万円未満	7
②20万円代	1
③30万円代	5
④40万円代	5
⑤50万円代	3
⑥60万円代	1
⑦70万円代	1
⑧80万円代	0
⑨90万円以上	0

できた	まあまあ できた	あまり できな かった	できな かった
6	3	9	6

※1 チーム複数回答あり

できた	まあまあ できた	あまり できな かった	できな かった
6	13	4	0

できた	まあまあ できた	あまり できな かった	できな かった
11	12	0	0

できた	まあまあ できた	あまり できな かった	できな かった
3	11	5	4

できた	まあまあ できた	あまり できな かった	できな かった
4	12	7	0

## (2) 経費

近江楽座の予算から支出した経費は、チーム平均 363,268 円で、昨年より約 17%の減少となりました。継続プロジェクトについては、活動を継続して行く中で地域から信頼を得たことにより、近江楽座以外からも資金を獲得できるようになったことや、設備備品などの大きな初期投資ほぼ完了したことにより、全体的に活動経費が前年度より減少している傾向にあります。

## (3) 単位認定

今年度単位認定を伴う活動を実施したチームはありませんでした。

## ■ 予算・企画について

### (1) 計画どおりプロジェクトを実施できたか。

計画通りにプロジェクトを実施できたチームは全体の 40%ほどで、昨年の 30%より改善された結果となりました。計画段階でのプロジェクトの綿密な練り上げが引き続き課題となっています。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・計画、スケジュールリングに問題やあまさがあったため
- ・メンバー不足によるもの
- ・費用面によるもの

### (2) プロジェクトを進めるにあたって、事前の準備や情報収集が十分行えたか。

事前の準備に関しては、多くのチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができました。

「あまりできなかった」理由

- ・広報活動の開始時期が遅かった
- ・目先のイベントに気を取られてリハーサル不足になってしまった

### (3) 企画内容が地域性、実施対象、実施方法などの観点から妥当であったか。

全てのプロジェクトから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることが出来ました。

### (4) 当初の計画通り予算を執行できたか。

計画通り予算を執行できたチームは全体の 60%ほどで、昨年の 45%よりは改善された結果となりました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・申請時の予算組みが甘かったため
- ・計画の変更が多かったため
- ・追加作業が発生したため
- ・交通費や成果物に当初予算との誤差が出たため

## ■ プロジェクトの運営について

### (1) チーム内の役割分担は明確にできたか。

約 70%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年の 50%より改善された結果となりました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・対話不足で、役割分担の範囲について把握できていなかったため

- ・学生が忙しい時期があり、役割分担が機能しないことがあった
- ・一部のメンバーに負荷が偏ってしまった

## (2) メンバー同士の情報共有やコミュニケーションが十分行えたか。

約70%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年とほぼ同レベルの達成度となりました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・情報の共有が、ほとんどコアメンバー間のものになってしまった
- ・役割分担された人のところが情報がとまり、水平展開しなかった
- ・活動に関する主なメンバーが固定されていたから

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
2	15	5	1

## (3) プロジェクトの実施過程で、内容の工夫や改善を十分行えたか。

約85%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年とほぼ同レベルの達成度となりました。

「あまりできなかった」理由

- ・メンバー全員が集まり話し合う機会を定期的に設けておらず、工夫や改善計画をあまり立てることができなかった
- ・計画した内容を実施すること以外がやや場当たり的になっていたため

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
7	13	2	0

## (4) チーム内や連携団体等と振り返りや話し合いの場が定期的にもたれたか。

約80%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年の45%よりも大幅に改善された結果となりました。

「あまりできなかった」理由

- ・他学科・他学年の方たちとの連絡が密にできなかった
- ・チーム内では連絡できていたが、関連団体とは定期的に行えていなかった。
- ・話し合いがどうしても不定期になりがちだった
- ・作業に追われ、話し合いの機会をもてなかった

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
8	11	4	0

## ■ 情報の発信・ネットワークづくりについて

### (1) メールやブログ等コミュニケーションの為に情報ツールを活用できたか。

約60%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年と同レベルの結果となりました。来期以降の底上げが課題です。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・ML以外のツールが活用できなかったため
- ・インターネットの環境について興味を持つ人がいなかったため
- ・企画の進行で手一杯だったため
- ・初期の頃に楽座のHPを活用しなかった名残が最後まで続き、十分な更新や情報提供ができなかった。また、専用のHPを作っていないこともその要因。
- ・ブログなどは作ったが、更新ができなかった

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
9	5	8	1

### (2) 自分たちの活動を知ってもらうために広報活動や情報発信を行えたか。

約60%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年よりも減少する結果となりました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・活動内容を明確に周知できなかった
- ・近江楽座のブログでのみの情報発信となってしまった
- ・プロジェクトとしての意識が希薄であったため
- ・活動自体が実測などであったため
- ・広報活動があまり浸透しなかった

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
7	7	8	1

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
4	16	1	2

(3)活動を通じて地域の連携団体とのネットワークを強化できたか。

約85%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年の60%よりも大幅に改善されました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・強化はできなかったが、今までにかかわりのなかった団体と交流することができた
- ・地域の方との話し合いを持つことができなかった
- ・仕事での付き合いという形にしかならなかった

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
5	5	7	8

(4)近江楽座の他チームとの情報交換や連携を図ることができたか。

「できた」「まあまあできた」という回答は約48%のチームにとどまり、昨年の60%よりも大幅に減少しました。この点については、チームの主体的な活動に加えて、外部にコーディネーターを設けることを検討する時期に来ていることを示す結果となっています。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・福祉系のプロジェクトがあまりなく、接する機会がなかったため
- ・自分たちの作業だけで手一杯だったため
- ・他チームとの交流の場を作れなかったため
- ・交流会や講習会に十分に参加できなかったため
- ・活動を限定したため

■ 地域貢献について

(1)活動を通じて、住民や関係団体との信頼関係を構築もしくは維持できたか。

約80%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年とほぼ同レベルの達成度となりました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・イベントなどの自主的な活動ができず、頼ってしまうが多かった
- ・連絡が後手になりがちで、常にぎりぎり動いていた
- ・キーパーソンが転職してしまったから
- ・媒介組織があったため

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
8	11	2	2

(2)プロジェクトを地域に根付かせることができたか。

約70%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年の50%から大幅な改善となりました。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・時間が足りず、定期的な催しができなかったから
- ・地域活動の補助スタッフとして定期的に参加することができず、少し無責任な形になってしまったから
- ・イベントに参加していただいた方にしかPRができなかった
- ・はじめての試みで地域住民や自治体との意識が整っていなかった
- ・広報不足と連携不足

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
4	12	5	1

※わからないとの回答が1件あり

(3)活動によって地域活性化へ貢献できたか。

約70%のチームから「できた」「まあまあできた」という回答を得ることができ、昨年とほぼ同レベルの達成度となりました。地域で活動し、それが根付き始めている実感はあるが、貢献というレベルにはまだ達していないと評価するチームが多いことが読み取れます。

「できなかった」「あまりできなかった」理由

- ・補助的な活動が多く、自分たちが主体になって動くことが少なかったから
- ・活動には十分に行ってきたが、まだ“参加している”という域を脱していないため
- ・まちのの人に主に主体的に動いてもらうようなレベルには達していないから

できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
8	8	5	1

※わからないとの回答が1件あり

#### (4) 具体的にどのようなことに貢献できたか。(複数回答可)

右記のような結果となりました。

昨年との比較においては、地域の独自性創造が大幅に増加していることが挙げられます。また、その他として以下が挙げられており、地域への影響が多岐に渡ってきていることを示しています。

- ・大学と地域の繋がりの強化
- ・子供たちに自分の手でものづくりする面白さを伝えた
- ・エネルギーと環境に対する意識の向上
- ・問題に対する地元住民の意識向上

①地域文化の継承	6
②地域産業の活性化	6
③地域の独自性創造	10
④地域人材の育成	4
⑤環境生活の改善	3
⑥地域福祉の向上	4
⑦その他	5

### ■ 人材育成・スキルアップについて

#### (1) プロジェクトの活動を通じてどのようなことが身についたか。

(複数回答可)

右記のとおりです

①専門知識や技術の習得	12
②交渉力やコミュニケーション能力の習得	18
③企画力やプロデュース力の向上	14
④地域社会の理解・問題解決能力の向上	10
⑤人的ネットワーク	18
⑥学内で新たな出会い・交流	6

### ■ 課題

ふりかえりシートの結果から、

- ①プロジェクトの継続や充実した活動に対しては十分な人材が必要であり、その確保に苦労している
- ②広報について、近年は web 情報ツールの発展がめまぐるしいが、それを使いこなせる学生がまだ少ないため、活用し切れていない現状がある
- ③プロジェクトの運営はコアメンバーに負荷が集中する傾向があり、その分担ができていないところが多い
- ④他チームとの連携などを図り活動の幅を広げることで、新たな提案が生まれ、地域への貢献度がレベルアップすることが今後求められている

①活動の向上	9
②活動の継続	8
③交流連携の強化	11
④地域への根付き	4
⑤人材の確保と育成	5
⑥情報発信・広報の強化	10
⑦組織内での役割分担	2

おおまかに以上の4点を課題としてまとめることができます。

①③については、今後のプロジェクトの存続にかかわる大きな課題であり、チームとしての組織力やモチベーションをいかにあげるかという根本的な議論の場を持つことが必要とされます。

②について、広報はプロジェクトの根付きや、外部へのプロモーションの意味で重要であり、近江楽座の新たな価値創造の可能性を持っています。課題である web の部門については各自のスキルアップはもちろん、今後も積極的に講習会を催すなどして強化していく必要があります。

そんな中で、継続プロジェクトについてはこれまでの実績から徐々に地域との連携が取れるようになってきており、信頼を得ているプロジェクトが多くみられるようになりました。この流れを来期にも継承するとともに、④にあげたような新しい試みによって近江楽座の活動が次のステージに押し上げられることを期待します。

## 3-2 近江楽座推進会議からのメッセージ

学生たちの活動を見守る教員組織である、近江楽座推進会議（地域づくり調査研究センター運営委員会第一専門委員会）からのメッセージを紹介します。

### ■ 野間直彦（環境科学部）

滋賀県立大学には、現行の「中期計画」の「数値目標」に、近江楽座などの環境・地域に関わる自主活動への全学生の参加を目指す、という項目があります。楽座の体制は大学のこの決意を反映したもので、それなりに手厚いと思いますが、参加人数を増やすことにはなかなか成功していないのが現状です。

私は、活動の「すそ野を広げる」イメージで多くの人に参加できるようにすることに可能性があると思っています。全学的にたとえば「近江楽座の日」などを作って、各プロジェクトが年に1日、2日でも、まだ参加したことのない学生によびかける、などの取り組みができたらと思います。

### ■ 鶴飼修（環境科学部）

全体的に、昨年より活動が充実しているように感じられました。学生の皆さんのスキルが向上したとともに、事務局による支援が充実した成果でもあると思います。

気付いた点を2点述べます。

1 点目は、プロジェクトの継続や引き継ぎについて悩みが多いように思われる点です。前任者のモチベーションを引き継ぐのは、相当、経験や価値観が合致しないと困難かと思しますので、無理せず自身の身の丈にちょっとプラスした活動を実施することがよいと思います。地域活動の基本は、地域の価値を地域住民と共有し、自分自身が楽しむことです。

2 点目は、地域において自分たち学生の役割が分からずに悩んでいる人も多いと思われる点です。そういったときは、その前に自分たちが何がしたくて、何ができそうで、何をしなければならぬか整理することが必要でしょう。ただし、皆さんの可能性は無限大です。小さな成功体験を積み重ねてゆくことがよいと思います。

いずれの悩みの解決にも、先行きをイメージする力が欠かせません。イメージするには情報の収集や状況把握が大切です。では、そのために何をすればよいかというと、あまり難しく考えず、まずは自分自身で動いてみることでしょう。たくさんの人と出会い、臆せずお話ししてみることでしょう。

それができるのが、学生という立場の利点でもあります。

### ■ 奥貫隆（環境科学部）

平成20年度は、近江楽座をスタートして5年目という節目の年でした。12月に「近江楽座のススメ」を刊行しましたが、テーマや方法論の異なる12プロジェクトについて、楽座の先輩或いは卒業生が本音で語る言葉には説得力があります。楽座の活動メンバーには必読の一冊です。地元の期待の大きさにプレッシャーを感じたときや活動の方向が見えなくなったときなど、この本で紹介する先輩たちの経験から学ぶところ、勇気づけられるところが随所に刻み込まれています。

地元学に携わる人たちが共通して語る言葉ですが、地域価値を発見し、あるいは創造するためには、「風の人」と「土の人」の異なる価値観と行動特性が不可欠です。学生は、地縁的にも世代的にも地域活動においては、典型的な土の人。学生だから発揮できる多くの能力に自ら気づき、自信を持って活動して欲しい。

学生力×地域力=近江楽座。近江楽座の5年間の活動実績をとおしていえることは、「学生力」が地域を動かす起爆剤となりうること、そして「地域力」が学生の活動を受け入れ、育ててくれるということです。

新しい時代、新しい社会、そして自己の未来を切り拓いていくために、所属する学部、学科の専門性ととどまらず、探求心、実践力、連帯感を持って、新たな



地域価値の発見と創造にチャレンジしてください。「近江楽座」から「近江環人」の称号を獲得して社会人となった先輩たちを目標に！

#### ■ 錦澤滋雄（環境科学部）

近江楽座の運営メンバーに参加して四年ほどが経過しました。継続的な取り組みを通じて、地域の中に溶け込み、根付いてきたグループもいくつか見られるようになってきたように思います。一方で、多くのチームが依然として後継者不足に悩んでいるようで、いかにして後進を巻き込んで育てていくか、この点は今後もお解決すべき課題として残っているようです。そのような中、元気に活動しているグループは、他大学との交流を深めて協働でイベントを開催したり、楽座OBOGを招いて指導してもらう機会を設けたりと、活性化するための工夫をこらしています。2009年度も近江楽座の取り組みを活性化するための新たな工夫を各グループが実践し、全体で共有していくことが求められます。近江楽座のますますの発展を期待します。

#### ■ 村上修一（環境科学部）

5年間にわたって相当数の地域プロジェクトが継続している。活動をつないできた卒業生や現役生の努力の賜物と評価したい。また、活動を暖かく見守っていただいている地域の方々への感謝の気持ちを忘れないようにしたい。地域での実践をとおして得られたことは大きいはずである。地域起業家としての意識を高く持ち、社会で活躍されることを祈る。

#### ■ 河崎澄（工学部）

滋賀県立大学生独自の様々なアイデアが提案そして実行されていることを頼もしく感じます。近江楽座のキーワードの一つは人と人のつながりだと思います。活動が“ひとりよがり”や“自己満足”とならないよう、自己点検を心がけながら、さらなる発展と学生諸君の成長を期待します。

#### ■ 石川慎治（人間文化学部）

今年度は中間発表会に参加できなかったので活動途中の状況が分かりませんが、先日の成果報告会では、チームの体制づくりで苦悩したり今後の活動自体に不安を持っているチームがあったり、地域から予想以上の反響に手ごたえを感じているチームなども見受けられ、一年間の学生のみなさんの近江楽座における「泣き笑い」を垣間見ることができました。一年間、おつかれさまでした。特に、うまくいかなかったと感じているチームのみなさん、これからが大事になってくるのではないのでしょうか。ぜひ、今年度の楽座での経験を糧にして次のステップに踏み出してもらえたらと思います。

#### ■ 面矢慎介（人間文化学部）

全プロジェクトの成果発表を聞き通して感じたのは、学生たちがこの一年の間、実に良く地域へ出ていたことだ。プロジェクトに関わった学生たちの膨大な時間とエネルギーが、地域に、つまり通常の大学のカリキュラムの外の時間と場所に、注がれてきたことを改めて痛感した。その一方で我々教員はどこまで地域に出たいだろうか、と自省することにもなった。

地域に関わるどのプロジェクトも、学生メンバーと地域の人たちの協力がなければやり通すことができなかつただろう。それをやり通すためのコミュニケーション能力、企画力、行動力、人を組織する力、総じて「学生力」とでも言う他ない学生の力は、プロジェクトの現場を通して確かに育ってきたといえるだろう（いやでもそれをしなければならぬ状況に追い込まれて、無理やり育てられた、という方が正確かもしれないが）。

このような学生力は、通常の大学カリキュラムだけでは育つ機会がほとんどない。その意味では、深く参画した学生たちには近江楽座は大きな「教育的効果」があったことになる。ただし、このプログラムに参加する学生は依然として少数派であり、学内の大多数の学生はこのプログラムの深い意味や得られる達成感、

魅力を知らない。そこで、プロジェクトを終えたメンバーたちにして欲しいことの一つは、地域に出て得られた各自の体験を、まだ地域に「出て」いない他の学生たちに広め伝えること、そうしてさらに一人でも多くの学生を地域に誘い出すことだと思う。

#### ■ 森川稔（人間文化学部）

地域に入り、地域の方々と協働し、地域に貢献する。その過程を通じて、学生は多くのことを学ばせていただき、地域の方々には学生の元気を受け取ってもらおう。私が学生の時には、明確な志と計画性をもって、そうした取り組みをしてこなかっただけに、毎年の学生の熱心な取り組みには、多いに感心させられている。ただその一方で、当初の計画内容とはだいぶ異なってしまったり、助成金を十分に生かしていないな、と思うようなプロジェクトも見受けられる。また、楽座がはじまってから5年が経過し、活動がマンネリ化したり、活動がうまくつながっていないと思われるプロジェクトもある。継続して取り組んでいるプロジェクトについては、先輩から後輩にしっかりとその内容が受け継がれていくと同時に、取り組みそのものが、毎年、その年独自の新たな成長をみせてくれることを期待したい。さらに、新しいプロジェクトが数多く立ち上がり、楽座に新風を吹き込んでくれることも期待したい。継続、脱皮、新しい風。これからの近江楽座にそんなことを望んでいる。

#### ■ 山根周（人間文化学部）

「近江楽座」も丸5年継続し、大学としての地域連携の一つのスタイルが確立されたように思います。一つのプロジェクトを数年にわたって継続しているチームもかなりありますが、今後これらのチームについて、どのような方向で独立（自立）するのか（NPO、コミュニティビジネス、etc.？）、あるいは独立せずに大学がサポートを続けていくのか、等々、その将来像を考えていく必要があるのではないかと感じています。

「近江楽座」スタート時の位置づけである「教育プログラム」という意味では、「地元学入門」という授業が設立されるなど、その成果は一定の形に結実しているように思います。今後「教育」の側面と「地域貢献」の側面のバランスをどう取っていくのか、また成果発表会でも見られた「学生力」のエネルギーとまじめさをどうよい方向へもっていき「近江楽座」を継続発展させるのか、考えていかなければならないと思います。

#### ■ 伊丹君和（人間看護学部）

「近江楽座」の活動は、学生の自ら学ぶ力を育てるとともに、それぞれの専門分野への興味・関心や知識・技術を高めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。したがって、「近江楽座」での活動はそれぞれの学生の将来にも少なからず影響しています。また、各プロジェクトにおける学生間の縦と横のつながりの関係性はもちろん、地域住民との関係性など、自ずと社会性やコミュニケーション力の向上にもつながります。そのほか、悩み試行錯誤を重ねる活動の中で、豊かな感性をも育んでいます。

このような「近江楽座」の活動を益々発展させていくために、特に継続プロジェクトは立ち上げ当初の熱い思いと活動本来の目的を再確認して、さらに活動を発展できるよう取り組んでいくことが必要と思います。また、新たなプロジェクトの発掘も必要と考えます。

学生の教育効果と地域貢献の両者が結びついた「近江楽座」の益々の発展と継続を望むとともに、これからも支援していきます。

#### ■ 中野優（近江楽座学生委員会）

スチューデントファーム「近江楽座」まち・むら・くらしふれあい工舎も5年目を終えました。学生プロジェクトというその性質故に、毎年新しい学生が参加する一方で、卒業していく学生もたくさんいます。そのような新陳代謝を繰り返す近江楽座ですが、培ってきた経験や知識をそれぞれのプロジェクトごとだけではなく、近江楽座として蓄積し継承していくためにも、そしてより多くの人たち



に活動を知っていただくためにも、本年度「近江楽座のススメ 学生力で地域が変わる／4年間の軌跡」が発行されました。

学生委員会も編集・デザインに関わらせていただき、現場の生の声やその臨場感を、新しい近江楽座生に、地域の方々に、そして全国の方々にお伝えすることができる、そんな一冊が出来上がったのではないかと思います。

来年度からは継続プロジェクト枠の中に新たにステップアップ枠が設けられ、近江楽座の新たな展開を迎えようとしています。その中にあっても「人が育つ大学」という本学の理念を持ち、これまでの歩みを継承しながら新しい近江楽座を一人一人の学生たちがつくってほしいと思います。わたしたち学生委員会も現場の学生の目を持って、近江楽座の運営に関っていければと考えています。来年度もよろしくお願い致します。

#### ■ 篠原尚子（事務局 地域貢献研究推進グループ）

近江楽座発足から5年経ち、楽座は間違いなく県立大学の「顔」となりました。言うまでもなく、活動に携わったすべての皆さんの努力のたまものです。この5年間で継続プロジェクトは世代交代が進み、当初のメンバーだった学生さんたちの就職情報をちらほらと聞くようになりました。楽座での経験は、間違いなく社会に出たときに役に立ちます。人は年を重ねる毎に広い「社会」で生きていきます。そして、守られた世界から、「世間の荒波」の中へ出ていくわけですが、どんな環境にあっても「人と関わり」が上手くできていれば、しんどい状況にあっても乗り越えられると思います。「楽座に関わった」ことは、新しく「人と関わろう」とした証。自信を持って、これからもお金で買えない財産（＝友人）を増やしていきましょう。

#### ■ 三田村奈美（事務局）

20年度、私にとっての近江楽座でのビッグニュースは、なんといっても「近江楽座のススメ」の出版でしょうか。現代GPへ採択されたことから始まり、18年度までの4年間の近江楽座の歩みを綴ったこの本は、いわゆる形式的な報告書ではない、地域に、全国に誇れるといっても過言ではないとても濃い活動ドキュメントです。

私も、今年度より編集チームとして作業に関わらせていただきました。私が主に編集を担当したのは、「エコキャンパスプロジェクト木楽部会」、「くつきチーム」、「C3」、「廃棄物バスターズ」の4チーム。学生メンバーが書いてくれた初稿を元に、取材や編集を重ねる作業が1年ほど続きました。その過程で、今まで知らなかった彼らの活動の別の一面や、原点、活動での喜びや苦悩に触れ、新たな発見をし、改めてその活動の奥深さを感じたのでした。それぞれのチームが、異なるテーマを持ち、様々な地域と協働し、それぞれ試行錯誤する中で生まれたドラマを“文字”にすることの大変さは想像以上のものでしたが、だからこそ、出来上がった本を学生たちと初めて手にした時の感動は、今でも忘れられません。

出版計画が持ちあがったのは、実は19年度のこと。当初作業に関わっていた各チームのメンバーの多くは、完成を待たずに卒業してしまいました。そして、丸々2年をかけて製作された「近江楽座のススメ」を初めて手に取る現役メンバーたちの中には、プロジェクトの発足当時の話を知らない新メンバーも多く存在しています。この本が、プロジェクトのコンセプトや先輩たちの熱い思いを知る機会として、自分たちの活動に刺激を与えるカンフル剤として、これからもずっと、近江楽座に代々受け継がれるものとなってくれたらいいなと願っています。

#### ■ 秦憲志（事務局）

事務局として1年間、学生たちの活動を見守り・支援させていただきました。プロジェクトの数が多いのは嬉しいことなのですが、充分目が行き届かないのが悩みの種です。楽座の縦糸となる学生たちの主体的な活動を支援していくと同時に、基本的なスキルの習得や活動をつなげるツール、広報・発信など楽座の横糸を太くしていきたいと思っています。

## 4 近江楽座なヒトたち

今年度の近江楽座にも、学生・教員を始め、地域の方々にたくさんご参加いただきました。(敬称略)

## 01. ボランティアサークル Harmony

衣斐千紗・井流有紗・岡田憲治・奥村彩奈・久世恵里奈・酒井良輔・佐藤友紀・永島綾香・中村初美・西川雄希・長谷川敬春・福居恵子・福井健大・箕浦麻衣・山口祐・山中由貴・山盛孝治・黒田末壽・竹下秀子・NPO 法人 障害者の就労と余暇を考える会メロディー

## 02. Cotton Project

有賀薫・岩崎史子・久保田奈純・道明美保子・澤とし江・富江春枝・富江みよ子・萩原星子・古川和夫

## 03. Oumi Food Project

青木麻美・清川晶子・辻愛・鈴木かほる・永田卓巳・横井健二・飯塚真帆・石島唯・奥野央子・杉田千紗・中村佳奈子・橋本美帆・茂山翔太・渡邊由貴・築山恵子・林絵里・前川祐希奈・前田晃宏・陸田めぐみ・村里智美・森岡瑞奈・森沢佳織・山野明日香・吉川愛乃・灘本知憲・浦部貴美子・岡本秀己・田中敬子・佐々木一泰・飯田智輝・富田恵一・神谷紀子・上田健吉・田島茂洋・太田裕美・苗井満輝・林清和

## 04. 未来看護塾

伊丹君和・豊田久美子・久留島美紀子・山田博子・朝見彩香・按察芽夢・石川翔太・鶴飼和子・大橋真理子・木村彩・北村有加・黒木愛・坂井美由紀・玉越小百合・寺村沙矢香・中村初美・原田勝博・堀上知美・山口示右・伊井真理・奥嶋桃子・片岡春香・日下部優・甲津江理・佐々木美紀・墨田沙希・富田悠・山口なつみ・吉田真帆・池田圭佑・伊藤みなみ・井上真奈美・木股慶子・工藤沙也加・坂本知広・佐川彩菜子・諏訪由香里・塚本紋加・中村奈央・野口はるな・長谷川真衣・早川史織・林怜史・平山由貴・山口美穂・山本有由未・山本徹・湯口知美・青木沙織・石川舞・岩元佳菜子・植田麻耶・鶴飼晴香・岡崎未央子・岡田美菜子・小川歩美・小野田沙織・北村朋世・桑原さつき・島田朋実・杉山文香・鈴木佳奈・外村菜穂・長尾理世・中川碧・中川ゆかり・中川亮・西山真由・桧枝裕貴・松井宏樹・山本千晶・山元理央・吉田裕美子・赤松信(彦根市立病院)・松井徳子(彦根市立病院)・安寺久美子(彦根市立病院)・福井久美子(NPO法人ぼぼハウス)・山脇玲子(NPO法人ぼぼハウス)・尾田保子(NPO法人ぼぼハウス)

## 05. Living Design 12th

奈良田拓・中村彩子・杉森香苗・荒山恵理子・有賀薫・井上未貴・江口倫子・大西町子・岡崎朋子・嘉数有利恵・金山和樹・鬼海めぐみ・久保田奈純・近藤茉莉・近藤美乃里・坂本侑子・芝あゆみ・谷口和泉・千田亜沙子・中川湖路・並川紘輔・西尾萌・福永修子・孫崎晴子・三橋恵・宮越翔子・山下恵理華・山元結加・吉崎瞳・吉島千晶・森下あおい・道明美保子・株式会社ツジトミ・株式会社タケツネ・株式会社双葉工芸・株式会社ユニックス・株式会社清原織物・株式会社麻し商会・北川織物工場・塚本繊維株式会社・滋賀麻工業株式会社

## 06. エコキャンパスプロジェクト (犬上川竹林プロジェクト)

LEAFS・井上・臼井学(琵琶湖博物館)・江島・男鬼楽座・北村雅彦(犬上川を

豊かにする会)・湖東地域振興局・佐々木和之(犬上川を豊かにする会)・定森秀夫・滋賀植物同好会・田川・陶器浩一・額田直子・彦根市環境保全指導員・彦根自然観察の会・平山直子・琵琶湖博物館・松尾則長(犬上川を豊かにする会)・宮田睦月(長浜バイオ大学)・未来看護塾・森小夜子・安寺科長(彦根市市立病院)・山口さん(彦根市市立病院)

## 07. エコキャンパスプロジェクト木楽部会

一浦皓治郎・大江真広・小川智哉・川内愛子・田口真太郎・松村公二・御子柴泰子・宮武侑平・盛千嘉・佐野幸太郎・下出健一・井上悠紀・古橋香了・酒井麻南・吉村紗央里・山田昇吾・芦井絵利子・石黒浩兵・梶岡勇輝・木原己斗・堤健二・堀路・柏木一鉦・松本清香・松岡拓公雄・山根周・大滝山林組合・地球の芽・クラフトキッズ

## 08. ソーラーハンター

元吉良輔・角田成明・武田暁洋・永田昭彦・齋藤毅・亀田将史・川島功嗣・小森一貴・野村勝矩・井上慶・熊田和真・小林健吾・野間達也・松村昌訓・美濃羽輝・奥健夫・鈴木厚志・近藤隆二郎・竹内洋行(五環生活)

## 09. 菜の花エネルギー

井川達朗・奥野泰徳・川瀬啓太・長田真悟・森慶太・森耕太郎・伊勢裕介・伊勢裕介・上田泰佑・祐真健・田中一成・馬林・森田銀・山本純平・吉澤直人・吉増敬太・青山孝司・山根浩二・河崎澄・武田義和・吉島利博

## 10. もったいないプロジェクト

青木傑・池田友理・香川雄一・久保寺郁・近藤隆二郎・田中正(彦根市役所)・田中尚宏(彦根市役所)・中小田すばる・中村和也・西野慧・松尾清

## 11. 廃棄物バスターズ

石川清一・伊熊友里・井上貴博・今井昭寿・今里ふくみ・北川裕也・北村充人・高野泰典・多賀将人・滝本直英・田中大樹・田中良祐・長江大志郎・中島兵悟・西坂健一・東谷直樹・三谷隆之・山本憲・若元佑太・徳満勝久・HIKONE  
キレイキャンペーン隊

## 12. 古民家楽座

宇野将人・大野沙織・奥野春花・亀山芳香・張玲・西井良輔・仁科美香・福島志帆・古田修一郎・翠勇樹・宮本真次・依田知大・劉謙・濱崎一志・石川慎治・山崎一真(滋賀大学)・中川信子・田内三智代

## 13. 百彩

小林清子・小林清子・杉原豊治・塩谷・中村善一朗・北川稔彦・岡村博之・善利恵子・とりいもと宿場まつり実行委員会・西村洋子・迫間勇人・青木傑・泉谷慶・久保寺郁・浜岡利一・平川順一・上村礼子・武田真由子・日笠美希

## 14. 男鬼楽座

宇野将人・大野沙織・奥野春花・亀山芳香・張玲・仁科美香・福島志帆・古田修一郎・翠勇樹・宮本真次・吉川敦・依田知大・劉謙・濱崎一志・石川慎治・

市川秀之・武田俊介・野間直彦・山田雅史（山城茅葺屋根工事）・中森千尋（山城茅葺屋根工事）・中山香（山城茅葺屋根工事）・塩澤実（茅葺屋）・相良育弥（茅葺屋）・大久保稔・谷口谷三・辻中清一

## 15. とよさと快蔵プロジェクト

浅田龍太・飯田裕子・一浦皓次郎・井上悠紀・上西慎也・岡村博之・小川智哉・尾崎裕次・刈谷奈都紀・河尻大地・北川稔彦（とよさまちづくり委員会）・河野奈津美・桜井藍・迫田正美・下出健一・清水ちあき・高橋邦夫（とよさまちづくり委員会）・高橋博充（とよさまちづくり委員会）・田中さん（とよさまちづくり委員会）・中川雅史・中田翔太・成宮さん（とよさまちづくり委員会）・成宮美穂（とよさまちづくり委員会）・西村眸・橋本知佳・浜田将光・船田賢・前田広幸（とよさまちづくり委員会）・村松公二・宮武侑平・宮川博司（とよさまちづくり委員会）・村岸弘子（とよさまちづくり委員会）・山口健太・山田省吾・横山耕蔵・渡辺篤紀（とよさまちづくり委員会）

## 16. 木之本楽座

宇野将人・奥野春花・張玲・福島志帆・西井良輔・翠勇樹・宮本真次・依田知大・劉謙・濱崎一志・青田朋恵（滋賀県）・北浦裕之（滋賀県）・廣西裕介（木之本町）・山内芳博（木之本町）・二之宮貞三（杉野学区地元住民）・藤田稔（杉野学区地元住民）・松本長治（杉野学区地元住民）・的場廣行（杉野学区地元住民）・脇坂治男（杉野学区地元住民）

## 17. 長浜楽座

宇野将人・奥野春花・亀山芳香・柴田善秀（京都大学）・清水安治（滋賀県自治振興課）・張玲・西井良輔・西島進一・濱崎一志・瀧村茂（人間文化科学研究科OB）・福島志帆・藤原加奈子（近江環人・かな設計工房）・翠勇樹・宮本真次・吉井茂人（中心市街地活性化協議会）・吉川敦・依田知大・劉謙

## 18. 信楽人-field gallery project-

角真央・石野啓太・鮫島拓・中貴志・中村喜裕・芦井絵利子・一浦皓治郎・中島圭一・寺田佳代・八百山さん・田中英里子・葛西慎平・小川智哉・井上悠紀・御子柴泰子・野口香織・長尾祥子・片井あき・土井敏生・大西町子・西尾萌・黒田靖史・印南比呂志・細馬宏通・南政宏・長谷川善文・谷井秀夫・竹若壽・笹山忠保・富岡喜六・武市智子・藤原孝子・直村小春・直村日文・大平正道・山越美香・大岸祿弥・三木雄野・株式会社松庄

## 19. Taga-Town-Prpject

稲葉結実・井手友美・小川哲史・大橋弘明・北村梨紗・中西智也・佐野康宣・堤健次・八百山和・酒井麻南・佐野幸太郎・吉村紗央里・山根周・松岡拓公雄・本多重男・多賀町商工会・門前町共栄会・大字多賀区・多賀区まちづくり委員会・多賀区子供会・多賀小学校・多賀大社・ボーイスカウト・柏の会・安養寺・近江鉄道・株式会社マルト

## 20. くつきチーム

山形蓮・小南亮輔・森愛鐘・磯崎あゆみ・加藤彩夏・亀島奈央・鈴木宏健・高橋美也子・中島由佳・前田佳美・山岸昂史・山田陽二・黒田末壽・武邑尚彦・岸本辰雄・玉木京・中村源一・中村源一・中村みね・伴正男・伴とし子・松原勲・朽木東小学校・高島市森林組合

## 21. 彦根人力舎-彦根地場産業発信計画-

大西町子・小川智史・片井あき・金山和樹・草川雅文・黒田靖史・坂上博行・坂根龍我・角真央・竹内洋行・武田善和・土井敏生・長尾祥子・西尾萌・野口香織・原寛紀・三木雄野・水野浩嗣・印南比呂志・磯嶋裕之

## 22. わいわい楽座

大浅理絵・岡村知明・嶋田菜穂子・福島志帆・依田知大・布野修司・山根周・久保文裕（東近江市市役所）・大國勉（東近江市市役所）・逢坂拓宏（商工会議所）・高田勝彦（ほない会）・中村康宏（商工会議所青年部）・寺村仁志（青年会議所）・吉田悟士（くらま楽器）・重森仁（ほない会）・松吉容史（ほない会）・加藤晋三（ほない会）・三木健治（株式会社アルパック）

## 23. Area+Design

杉林久美子・青谷守（高島市）・石倉和幸・石津大輔・上山大介・小田切健一郎・小田切裕美・北川渉（NPO）・黒田末壽・斎藤卓男・坂井田智宏・坂井田あすか・左壽謙介・坂本由貴枝・嶋田奈穂子・志村道代（高島市）・杉林久美子・高田拓朗・多谷冬樹・戸田雄一・中江春美・中西麻以子・中村美希・樋口恵太・福井朝登・細田美鈴・松本英利・松本香・南野加奈子・吉田富夫（近江印刷）

5

付録



## 近江楽座2008年度活動報告書

平成21年6月 発行

発行者 滋賀県立大学地域づくり教育研究センター  
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500  
TEL：0749-28-8612／FAX：0749-28-8567  
E-mail：info@ohmirakuza.net  
URL：http://ohmirakuza.net/

